

長崎レイン

BIG HUG

安希 Aki



「もし日本に原爆が投下されなかったら、私の祖母も叔母も日本兵に殺されていた。そして、私は今、この場にいることはできなかった」

涙を流しながらそう叫ぶデボラの声が、リハーサルホール一杯に響き渡ったとき、私の中の何かが音を立てて崩れ始めた。



長崎レイン

BIG HUG

安希 Aki

フォークナー先生のEメール 6

十七歳、はじめての長崎 12

ハミングバードおじさんのオーディション 29

危険な家族に囲まれて 39

瞑想から醒めて 50

多国籍、多民族、十人十色のメンバー達 58

正直な話 83

私たちの爆発 90

私も、あなたも、罪びとか？ 109

現代韓国人の思い 116

日本悪い悪い話？ 124

性的奴隷 135

八月の陽炎
148

仲間たちの気遣い
172

プロジェクトの主要事項
177

テロとアメリカ国旗
183

人種、人権
195

新しい世代
205

好戦・反戦・非戦
210

中性化する私たち 225

プロジェクト発表 233

フレンドシップ 248

あとがき 254

「もし、日本に原爆が投下されなかったら、私の祖母も叔母も日本兵に殺されていた。そして、私は今、この場にいることはできなかった」

涙を流しながらそう叫ぶデボラの声が、リハーサルホール一杯に響き渡ったとき、私の中の何かが音を立てて崩れ始めた。張り詰めた空気が切り離された時間。私の体は硬直し、視線は傷んだ床の木目のひとつに刺さったまま、微動だにしなかった。

フォークナー先生のEメール

二〇〇二年一月、私たちは、長崎レインプロジェクトをスタートさせた。カリフォルニア大学アーバイン校の、ドラマ（舞台芸術）学部でのプロジェクトである。

学部の先生と院生が一人ずつ、それにダンス科の先生を加えた三人が企画し、そこへ大學生、院生、その他の先生がごちゃ混ぜで十五人加わってプロジェクトは始まった。その企画は簡単に言うと、「日本で五十七年前に投下された原爆を中心に、今現在も後を絶たない国際紛争に目を向け、それをテーマに一つのステージを創作しよう」といった趣旨のものであった。

初めてこの企画を耳にしたのは二〇〇一年九月下旬、近所の大衆型スーパーマーケットでピクルスを探している時だった。ふいに背後から声がして振り返ると、学部のカウンセラーがニコニコしながら立っていた。中国系アメリカ人だというカウンセラーのクロツドは、片田舎の短大からロス近くのマンモス大学、アーバイン校へ編入したばかりだった私

を、いろいろと助けてくれていた人である。

どここのスーパーマーケットは魚の種類が豊富だとか、日系のスーパーに行く道順、それから本当はカリフォルニアの長粒米が好きなのに、彼女のご主人が短粒米を好むので、毎日いいいや短粒米を食べていることなど、いろいろな話してくれた。学校のシステムに関する説明は、常に明確かつ的確で、どんな質問にも迅速に、フレンドリーに答えてくれた。小柄な体にはやや大きすぎる買い物カートを押しながら、クロッドは話し始めた。

「ドラマ学部のクリフ・フォークナーという先生が、今度、長崎原爆をテーマにした舞台をやるみたいなんだけど、日本人の学生で、そのことに関心があって、ついでに日本の歌が歌える人を探しているみたいなのよ。アキ、これはチャンスよ。クリフは最高に素晴らしい先生だから、絶対にいい経験になるはず」ちよつと興奮気味に彼女は続けた。

「そのうち、オーディションの連絡があると思うから、注意して掲示板とEメールをチェックしてね」そう言うと、「カートよりは買い物かご派です」と言い張る私に、「カートのほうが絶対楽よ。たくさん入るし」と二回も念を押して去っていった。

クリフ・フォークナー先生か……。編入前に、学部案内のカタログで先生の顔と名前を

何度か確認していた私には、なんとなくその先生の顔が頭に浮かんだ。いったいどんな舞台をやるというのだろうか。先生は、どういふつもりで長崎原爆などをテーマに選んだのだろうか。

九月十一日に、二機の飛行機が世界貿易センターへ突っ込んでまだ間もないときということから、同時多発テロが、何らかの意味で関係していることくらいは察しがついた。しかしなぜ今、五十七年も前に起こった原爆をやるのか。しかもアメリカで。ビッグネームの先生の下で経験が積めるかもしれないという、願ってもないチャンスに高なる胸。しかしそれとは逆に、アメリカにおいて、日本文化、歴史に対する誤認を何度か目の当たりにしてきた自分は、この企画が、日本に対する誤解に拍車をかける可能性があり、しかも、自分自身がそれに加担してしまうかもしれないということを少し懸念した。もっとも、音痴を自分のパーソナリティの一つに数えている自分としては、「日本語の歌を歌える生徒」という条件はもっと深い悩みの種となっていた。

しばらくして、フオークナー先生のほうから直接Eメールがきた。大学内の何人かの日

本人留学生と、日系アメリカ人学生に宛てたものらしい。企画内容を簡単に説明した最後に、先生はこう書いていた。「この企画を、君たちはどう思いますか。近々オーディションを行うつもりですが、興味はありますか。もし、このプロジェクトに、日本人または日系人が一人も加わらなかった場合、私はこの企画を遂行するつもりはありません」

先生は、私たちの参加を懇願してもいなければ、強制もしていなかった。ただ、そのEメールからは、彼の「提案に対するとても慎重な姿勢」が感じとれた。

こういうときの自分の直感はずごい。突如、このプロジェクトが自分の大学生活の中で、とてつもなく重要な体験になる予感がした。この先生は、慎重で、クロッドが「He is the best」と太鼓判を押した人なのだから、このプロジェクトが、自分にとって単なる苦い経験になるはずはない。それに、自分は被爆国日本から来た人間であり、原爆や日本の歴史に関して誤解が生じた場合、堂々と「NO」といえる立場の人間なのだ。結果がどうであれ、少なくとも自分は何かを主張すべきだ、というどこか使命感にも似たものを私は感じた。はつきり言ってこれは大げさな話なのだが、そのときの自分には、この大げさぶりに勝るとも劣らぬだけの気持ちの高揚があったのは確かだ。オーディションへの参加を即決

した私は、その勢いのまま返信のEメールを打った。

「Eメールありがとうございます。私は、このプロジェクトに大変興味をもっていますし、ぜひとも参加したいと思っています。最終的に、プロジェクトがどういったものになるのかは想像もつきませんが、一人の舞台芸術を専攻する生徒として、この経験を通じて多くを学ぶことができばと思っています。今回、このプロジェクトのオーディションへの参加を即決したもう一つの理由に、自分自身の長崎原爆に対する特別な思いというのがあります。原爆及び、核兵器の問題は、私が十七歳の時、修学旅行で長崎を訪れ衝撃を受けて以来、常に、注目すべきこととして心に留めてきた問題です。アメリカに来てからも、大学でのレポート、エッセイ、そして、スピーチのテーマとして、核兵器の問題には、それなりの関心と関わりをもってやってきたつもりです。実際、アメリカで原爆をテーマに何かをやることは、容易なことではないと思いますが、せつかくのチャンス、ぜひ参加したいと思っています。最終的なパフォーマンスの段階で、たとえば演技をする側に加われなかったとしても、その他何らかの形でプロジェクトには関わってゆきたいと思います。日

本語の文献の翻訳や、日本の機関とのやり取りで、もし力になれることがあれば、喜んでやってゆくつもりです。オーディションでお会いするのを楽しみにしています」

翌日、学校から帰ると、またもや先生からEメールが届いていた。

「Eメールありがとう。君が興味を持つてしていると聞いて嬉しいです。私自身もまた、以前、長崎の原爆資料館を訪れた際に、大変な衝撃を受けました。一緒にプロジェクトができるということです。オーディションで君に会うのを、僕もまた楽しみにしています」

私は少し驚いた。この先生は原爆資料館を訪れたことがあるのだ。アメリカへ来て以来、各国の友人から、「日本へ行ったらの街を訪れるべきか」という質問に、東京、京都といったおなじみの都市に加え、「できれば一度、広島か長崎へ行ってみるといい」とアドバイスしてきた私は、先生の言葉にいくらかの喜びと安堵を感じた。そして、あの原爆資料館を訪れたことがあるなら、同じ人間であるなら、アメリカ人であれ日本人であれ、私たちの原爆や平和に対する思いに、さして違いはないはずだということを、私はこのとき確信した。

十七歳、はじめての長崎

私の対核兵器観を変えた出来事。それは紛れもない高二の秋、九州三泊四日の修学旅行である。いかにもお金のない公立高校といった感じの、日数的にも、行程的にも、私立校とは比べものにならないほどしょぼい旅行だった。それでも、三重県の津などという、県都にしては相当に田舎じみた街で高校へ通う我々には、しょぼい修学旅行も、高校生活最大の楽しみであったのだ。

旅行の最大のポイントは、二日目の午前中にスケジュールされた自由行動。当時、〈規律が全て〉の日本の教育システムの中で育った私たちは、〈自由行動〉という単語に、先進的かつ快活な響きを覚えていた。オランダ庭、中華街をねり歩き、福砂屋でカステラを買う。計画は進んだ。

「カステラなんてどこのでも一緒やんか」と、当初冷めていた私も、周りが「福砂屋、福砂屋」と声をそろえると、自分まで、カステラを買うなら福砂屋でなければならぬ気がしてくる。

「たかが数時間の自由時間で、こんなにあっちもこっちも回れるはずがない。君らもアホやねえ」と、我々のスケジュール用紙を見ながらいやみを言う先生に、「こんなにあっちもこっち回らんなんのに、数時間しかくれへん先生らのほうがよっぽどアホや」と、心の中で言いながら、さらに過密なスケジュールをたててみたりした。

私たちは若かった。田舎者だった。そして、明らかに足りきっていた。

朝、津を発った我々一行は、電車とバスを乗り継いで、昼過ぎには長崎へ入った。この時にはもう、親戚や家族への土産は、「福砂屋の」カステラと腹に決めていた。一日目は、ほとんどが移動に使われ、主だった行事としては、午後のわずか一、二時間程度に組まれた長崎原爆資料館への訪問だけである。翌日に控えた自由行動にはやる気持ちを抑えて、我々一行は、資料館へと足を踏み入れた。

そこで、この修学旅行一つ目の原爆が私の中に落ちた。

館内には、半世紀も前に起きた戦争の生々しい傷跡が散乱し、悲しみというよりはむしろ、絶望とか失望とかいった感じの空気が立ち込めていた。生徒は私語をやめ、そこにあ

る写真、戦争の残骸、被爆者の体験談の書かれたボードを、食い入るように見入っている。頭から、耳、背中までが焼けただれ、肉がむき出しになった少年。簡素で、不衛生そうな、木造の小屋の中で、ぼろぼろになったござの上に横たえられた被爆者たち。家族、親戚、友人を、一瞬にして失った人々の辛い告白。次から次へと目にとび込んでくる、超現実的な現実。血の引くような思い。

この日の自分には、ホラー映画を見たときのような恐怖感も、人が大勢死んだことに対する悲しみもなかった。ただ、言いようのない絶望感と脱力感が全身を覆っていた。叫び声も、涙もない静寂の中で、もう人間の心などはどこか彼方へ吹き飛び、体中の感覚が抜け落ちてしまったような虚脱感の中で、脳裏を一つのフレーズが何度も過ぎった。

「写真の中の人たちは、カメラを向けられた人々。病院へ引き取られた、むしろ幸運だった人々なのだ。この写真にも写らないようなところで瓦礫に埋もれ、灰になって死んでいった人が何万人もいる」

日本人として生まれた私は、一応の平和教育を受けて育った。八月六日と九日には、夏休みにもかわらず登校し、戦争映画を観たり、戦争体験者の話を聞いたりして戦争につ

いて学んできた。映画『ほたるの墓』を観て、その後一カ月近く、夜一人でトイレに行けなくなったり、『はだしのゲン』を読んで、ゲンの家族が壊れた家屋に挟まったまま燃えていく場面が何度も夢に出てきたりもした。しかし、そこにはいつも恐怖と悲しみがあつたはずだ。絶望感ではなくて。

十七歳という年齢がそう思わせたのか、それとも、自身にとって生まれて初めて経験する被爆地の訪問だったからか、それまで抱いていた様な単純な感情ではないもつと複雑な何かを感じ始めていた。修学旅行初日の昼下がり、ほとんど言葉を発することなく、私は、資料館を後にした。

その夜、私たちは長崎市内の旅館に宿泊した。修学旅行の夜は楽しい。小さな畳の部屋に九枚の布団を二列に敷き並べると、部屋の中心に向かって頭を寄せ合つて布団に入った。女の子にとって、秘密話と、噂話と、恋愛の話ほど楽しい時間はない。電気まで消して、密談ムード作りにも余念がない。準備万端で、私たちは話し始めた。

「ちよつとさあ、さっきの原爆資料館、めっちゃめっちゃショックちがつた？」

「うん。マジでショックやった。あんな、一時間やそこらじゃぜんぜん時間足らんちゅうねん。もっと見るべきところとか一杯あったのに」

そうである。私たちが最初に話したのは、男の子のことも、福砂屋のカステラでもなかった。その日資料館で見た原爆の残骸に対する個々の思いを、いきなり語り始めたのだ。しかも、しんみりと。

「何がショックって、写真の中の焼け焦げた人とか、傷ついた子供とか、そりゃショックやんか。でもな、見とって一番辛かったんは、やっぱり生存者の被爆談やわ。読み入ったら時間たつのも忘れとった。結局いくつかの話は時間切れで最後まで読めんかった」

「なんか信じられへんよな。昔ここでさあ、マジで何万もの人が亡くなったんやで……。こんなことって、ほんまに起こるわけ？ 起こってもええわけ？」

「資料館行く前は、訪問とかゆうても、単なる行程の一部やんって思っとったけど、ほんま、原爆資料館とかいうても、なめたらあかんで」

彼女達もまた、私と同じようにかなりの衝撃を受けていたのだ。原爆は、誰の心にも容赦なく降ってくる。そう言えば、皆、館内では無言、バスに乗り込んだ後も、しばらくは

言葉少なだった。

私たちには珍しく、ゆっくり、暗く進む会話の中、私は、さっきチラッと窓から見えた長崎の夜景を回想していた。深く切り込んだ山間の谷間の闇に、小さな明かりが、ポツリポツリと、張り付くように散らばっている。静寂の中に広がる濃紺の空間が、私の中に切なさを植えつけていく。長崎まで来て妙に感傷に浸っている自分がおかしかった。

それでも、いつまでも沈んでいられないのが高校生である。楽しくなくては修学旅行も意味がない。ついに我々は、その夜の本題に突入した。

「ところで、A君とBちゃんの関係はどうなつとるわけ？」

Bちゃんは「へ？」という顔をしている。

「へ？ って。A君どう考えてもBちゃんに気があるやん」

「なにそれ？」

「えっ？ もしかして、本人気付いてないとか」

「そんなん、A君の日頃の行動観とつたら分かるやん」と、他が続く。

「えっ、じゃあ何、みんながみんなそう思つとるわけ？」

私たちは「うんうん」と、得意そうにうなづく。一人、また一人と、A君に最近見受けられた「Bちゃんに関心を持っていると思われる行動」の特徴を挙げてゆき、ついにBちゃんは、

「じゃあアキちゃんはどう思うわけ？」と、私の意見を求めた。

正直言つて、私はこういうことには鈍感だ。私もまた、九州へ向かう電車内で、友達に、「アキはホンマに鈍感やなあ。そんなもん、A君の行動見とったらわかるやん！」と、しかられたおかげで、今、知ったか振りができるようなものだ。第一に、私はA君の行動など見ていない。第二に、仮に見ていたとしても気付かない。なぜなら私は、生まれた時にはもう、こういうことを察知する神経が欠落していた、先天性鈍感なのだから。

「言われるまでは、私も気付かんだんやけど……」と言うと、Bちゃんは、同意を求めるように、嬉しそうに、

「そうやんなあ」を、二度くり返した。

「でも、言われてみるとそうかもね」と言う、今度はあっさり落胆した。

鈍感で鳴らした私までもが、「そうかもね」などと言つては、うわさもいよいよ現実味

を帯びてくる。その夜、Bちゃんは完全に混乱し、私たちは、その他の密談にも花を咲かせながら、夜遅く眠りについた。楽しいおしゃべりの向こう側で、さらに大きな衝撃が翌朝の私たちを待ち構えているようとは、この時だれが予想できただろう。

旅行二日目の朝は忙しかった。朝食、被爆体験談の聴講、そしてお待ちかねの自由行動と、午前中に全部一気にやってしまおうというのだから、貧乏公立高校はすごい。寝ぼけたまま朝食をとり、胃の中が唸りを上げている間に話を聞き、話の余韻に浸る間もなく市内へ放り出されるという、「いかにも」というような強行日程にも、従順な高校二年生は、なるがままに従った。

朝食をとり、広間へと集まった高校生たちを待っていたのはまず、修学旅行名物でもある『朝の説教』。

「おい、お前たちの中に、団体行動を乱すものがある！昨日の夜、消灯時間が過ぎてからも、いつまでも男子部屋にひそんだ女子の生徒が何人かおった！我々は、君たちを御両親から預かつたのや。無責任なことは出来ない。こんなだらしないうことをするんやった

ら、修学旅行はとりやめんとあかん。もうちょっと分別をわきまえろ！」

私は、前夜に起きたふしだらな事件を聞きながら、「一体、誰が誰の部屋へ忍び込んでいたのかしら」と、ワクワク想像をめぐらせ、男子部屋へ紛れ込んで行った女の子たちの大胆な勇氣に妙に感心したりした。それでも、朝っぱらからの説教は、さすがに私たちのテンションを下げる。私は、殆ど食事にも手をつけないまま食堂を出ると、ホテルの大広間のテーブルの一つに、班の友達と座った。被爆者の話を聴くためである。

十一あつたクラスは、三つの部屋に分かれ、一組だった私は、一・三組の生徒と、引率の先生達と同じ部屋で、講演者の方を迎えた。

私は、最前列のど真ん中のテーブルの一番前の席、つまりは、講演者の真ん前の椅子に腰掛けて、斜め前方でこつちを向いて並んで座っている校長先生はじめ、引率の先生たちの視線に最もさらされる位置で、話を聴き始めた。

私たちの部屋で講演された方のお名前は、残念ながら覚えていないのだが、その方は、「核兵器廃絶運動をしている団体で代表を務めておられる方」だということを、生物の先生が後々話していた。

この日、修学旅行二つ目の原爆が、私の中に落ちた。未だかつてない猛威で私の心を粉砕した。その後の私の核兵器に対するスタンスを決定づけた体験談。強烈なスピーチだった。

講演をされた被爆者の方は、六十代くらいの、小柄な女性だった。壇上へ上がると、彼女は淡々と被爆体験を語り始めた。

原爆が投下された日、彼女は、彼女の妹と一緒に、山の斜面に掘られた防空壕へ避難していたそうだ。彼女の母親と彼女の叔母を家に残して。当時彼女は十二歳くらいだったとおっしゃっていたと思う。

狭い防空壕の中にすし詰め状態になって、彼女は爆破の瞬間を迎えた。爆音が響き渡り、熱風が迫り来る。異常な事態が起こっていることは明らかだが、しばらくは壕の外へすら出られない。熱く息苦しい時間が流れ、ようやく外へ這い出たが、今度は地面が焼け焦げていて熱くて歩くに歩けない。しばらく熱が冷めるのを待って、それでもまだ熱過ぎて地に足をつけられなかった妹を、彼女は背中に負って、焼け付く道を家のあった方角に向かって歩き出した。「家の方向」と言っても、ほとんど全ての家屋が倒壊し、爆風でできた瓦

礫の山の至る所から煙が出ている中で、方角も何もあつたものではない。それでも、やつとの思いで、以前彼女の家があつた場所にたどりついた彼女は、そこで原爆の悲劇を目の当たりにする。

「私と妹は、そこで、跡形もなくなった私たちの家と、灰になった母と叔母を発見しました」これは、とても悲しい被爆体験談である。しかしよく考えてみると、被爆体験談の典型的な話であるとも言える。「家を失い、家族のほとんどを一瞬にして失った」と、いった感じの話は、それまでも、本やテレビを通じて知っていることだった。でも、この時の私は、それまでに味わつたことのないほどの、辛い思いで彼女の話聴いていた。

同じ部屋の、その間二メートルもない、互いの息が感じられるほどの至近距離で、この小柄な女性は、彼女の母親が〈灰〉になった話をしているのだ。涙を見せることも、声を震わすこともなく、淡々と話を続ける彼女の姿。今日に至るまでに、一体どれだけの苦勞を乗り越えてきたのだろうか。こういうとき、逆に、感情を表に出さない素朴なスピーチは、聞き手をどんどん切なくさせる。

結局、戦争で父親も亡くした彼女に、残された家族は、妹ただ一人。それでも、前向き

な心を失わなかった彼女は、

「お母さんと一緒に死にたかった。一緒に死んだほうが良かったです」と、悲しみにくれる妹を、がんばって生きていこうと励ましたという。

しかし、彼女の努力は、非情にも最悪の結末を迎える。ある日、妹は、地元の電車の線路に身を投げ、自殺してしまったのである。

「その後、私も妹を追って死のうと、何度も何度も考えました。もう、生きていても意味がない。ただ苦しいだけだと思いました。でも、私は死ぬことができなかった。そして、自分の体験を語り、核兵器廃絶を訴えることが、自分の生きる意味であり、また、使命でもあると信じて、今日まで生きてきました」

またもや、自分の体が脱力感に覆われている。それとは逆に、顔全体がカーツと熱くなるのを感じながら、もし、自分の親が〈灰〉になり、姉が自殺してしまったとしたら、それでも自分は生きる道を選ぶだろうか、と、一瞬考えた。そして、それ以上のことを考える余裕も、何かを感じる余力も、もうその時の自分には残っていなかった。

スピーチの最後に、彼女は、私を長崎レインプロジェクトへと直接導くこととなった、重要な余談を付け加えた。

「これは、私がヨーロッパ講演を行っていたときの話ですが……」と、彼女は話し始めた。「ヨーロッパでも近年、核兵器廃絶に対する関心が高まってきておりまして、私どもの努力が少しずつ実ってきていることを喜んでおりました。そんなある一講演の終わりに、現地の学生の間から、『核兵器は絶対に必要ない』と言う声があちらこちらから上がり、成功に胸をなでおろしておりましたところ、私はその公聴者の中に、一人の日本人留学生をみつけました。そして、他のヨーロッパの学生から、日本人としての意見を求められたその人は、一言、「I don't know」知らない、と答えたのです。当然会場は騒然となり、『当の日本人は何も知らないのか！』という怒りの声が上がりました。私はショックでした。もし皆さんの中に、将来海外へ行かれる方がおられましたら、その時には、『原爆は恐ろしいものだよ。そんなものは絶対必要ないよ』と、ただ一言そう言っていただければ幸いです」

そう話し終えると、その小さな体は、演壇を静かに下りた。

あんなに張り切っていた自由行動のことも頭から消え去り、市内に放り出された私は、路面電車を乗り降りするお年寄りたちを、ボケーッと眺めていた。もう、福砂屋のことなどは忘れ切っている。

長崎市内では、本当に多くのお年寄りを見かけた。復興を象徴する路面電車と、それを支えてきたお年寄りの入り混じった光景は、私に、今自分がいる場所が長崎であるということを実感させる。この復興の影に、一体どれだけの苦労があったのか。

自分たちの立てた自由行動のスケジュールを飛ばし飛ばし進み、最終的に福砂屋に辿り着いたところまでは記憶している。しかし、そのカステラの味はおろか、はたして自分は、福砂屋でカステラを買ったのかどうかすら思い出せない。ただ、覚えているのは、チョコ、チーズ、抹茶味が3本セットになった安い観光者向けカステラ。その安っぽくて歪な味に残る、あの日の自分の虚脱感だけである。

私たちは、残りの日程も無事にこなし、大分から船に乗って大阪港を目指した。帰路に

つく直前、長崎での放心状態が響いてあまり土産を買っていなかった私は、大分港のみやげ物屋さんを、忙しく歩き回った。かねてから楽しみにしていた明太子をやつと手に入れ、旅行後には「どうしてこんなものを買ったのだろう」と、首をかしげることになる、絶対必要な「いわゆるみやげ物」も多少買って帰った。

船内で、A君 & Bちゃん騒動は、周りのみんなの勘違いと早とちり、という当の二人には迷惑極まらない形で結末を迎え、

「何やかんやゆうて、最初からアキが一番よう見抜いとったってことやん」

と、今度は、A君の行動に何の疑問も抱かなかったことを褒められた私は、自分が鈍感すぎるのではなく、周りが敏感すぎるのだという事実にはホッと胸をなでおろした。

家に帰ってから包みを開けた「大分港出身」の明太子は、まさに「無添加」という、天然の潮の味がする、なかなか良質のものだった。

修学旅行は、それなりに楽しく、あつという間に終了した。長崎で聞いたあのスピーチを除いては。

核兵器と、自分はどう向き合っていくのか。修学旅行の間も、その後も、自分はそのことを時々考えた。自分に何ができるだろう。自分は、戦争を知らない世代に生まれ、原爆について学ぶことはできても、それを実際に体験された方々が味わった本当の苦痛や苦勞など、分かるはずもない。自分は、政治家でも、核兵器廃絶運動家でも、まして国連の職員でも何でもない。自分には自分なりの生活や夢があり、ごく普通に日々を過ごしている。はつきり言って、自分は実に無力だ。

しかし、あのスピーチを聴いた後で、あれだけの勇氣を見せられた後で、自分が無力だからといって、

「私には、どうせ何もできないから……、とうてい理解できることではないから……」

と、無関心でいるわけにもいかない。事実、今、核戦争などが起これば、敵も味方もなく、もうその時には、地球上のほとんどの人間が、瞬時に消えてなくなる時代なのだ。あつてなく自分も死ぬか、長崎の何倍以上も悲惨な壊滅状態の中で、家族や友人のほとんどを失うか。生まれてから今まで、一度も爆弾など見たことがない自分にとって、核兵器の破壊力は超現実的で、人類滅亡などは、まったく想像できない。だからこそ今一度、核兵器は、

自分にも被害を及ぼしうる現実的な問題なのだとということを、理解すべきなのだと思う。

こんな自分にもたった一つだけできること。それは、核兵器の危険性、その廃絶の重要性に対する「意識」を、自分の中に持ち続けることだと思う。自分は、核兵器廃絶を訴える為に存在しているわけではない。しかし、自分が存在している限り、そこが日本でも、アメリカでも、その他の世界のどこであつても、自分は常に、核兵器について少しでも知る努力をし、核兵器に対して、一言「NO」と言うだけの準備をしようと思う。

私は、「I don't know」とは絶対に言わない。なぜなら、無知は危険であり、無関心は犯罪だから。

ハミングバードおじさんのオーデション

年中温暖なアーバインにも、十一月にもなると、それなりに秋の気配というものが漂い始める。空が高くなり、空気が澄んでくる。過ごし易い季候とともに、学業にも熱が入ってくる季節だ。私の学校生活も日増しに忙しくなり、プロジェクトのことなどはもう頭の片隅にすら残っていないかった。提出物の期限、小テストの為の読み物、中間試験の準備など、次から次へと課題が迫り来る毎日の中で、学部内のオーデションにおいて、受けては落ちて、受けては落ちて、の繰り返しを懲りずに続けていた十一月のある日、長崎レインプロジェクトの告知を掲示板の上に見つけた。

プロジェクトの主旨とオーデションの概要を伝えるポスターの左片隅には、丁寧にも、色とりどりの小さな折り鶴が飾ってある。今まで見た中でも、最も手の込んだオーデションの張り紙からは、先生の意気込みと、几帳面さが見て取れた。

オーデションのタイムスロットに自分の名前を即座に書き込むと、もう一度、時間と

場所の確認をした。土曜日の午前十時半。場所は「Studio Theater」。ブラックボックスと呼ばれるタイプの、その名の通り、正四面体の箱型になったスタジオで、中の空間を自由にアレンジすることが可能な劇場でオーディションは行われる。土曜日が待ち遠しい。

土曜日の朝は、澄み渡るような秋晴れだった。朝食をいつもよりやや多めにとると、発声練習を二、三回繰り返して家を出た。日差しはまだまだ強いのに、涼しく乾いた空気が、ひんやりと肌に気持ちいい。土曜日の朝とあって、大通りの車もまばらで、学生街がゆったりとした時間に浸っている。自転車大好き人間の自分にとって、こういう朝は最高だ。体全体に新鮮な空気が冴え渡り、ペダルを踏む足にも力が入る。ゴルフ場の横を走り抜け、樹木の整備がゆきとどいた住宅街を抜け、額にうつすらと汗がにじみ始めたころ「Studio Theater」に到着した。

オーディションまで、まだ二十分程ある。スタジオ内では、一つ前のタイムスロットにサインをした生徒達が、グループオーディションを受けていた。スタジオの前には応募用紙の束がおいてある。その少し離れた場所で、インド系の女性が立っていた。

顔の特徴からも、彼女が身にまとっていたインド独特の衣装、サリーからも、どこから見てもインド系。ふいに目が合って、彼女に話しかけた。

「十時半のオーディションの人ですか？」

彼女は静かにうなづく。

「じゃあ私と一緒にグループですね。ドラマ学部の生徒さん？」

「いや、私は生徒でないんだけど、知り合いにオーディションに行くように勧められたので。あなたはこの学部のひとつ？」

「ええ」面白そうなプロジェクトだね、と言ったところで、お互い少し笑みがこぼれちゃうなずくと、私は、募集用紙の束に目をやった。待ち時間の間に記入しておくようにという張り紙が横に付いていて、鉛筆が添えてある。

「これ、記入するんだよね」

と、話しかけるでもなく、独り言を言うのと、私は鉛筆を手を取った。質問内容もユニークで、演技の経歴などはまったく聞いていない。名前、国籍、何語を話すか、文化的背景、特技など、とても個人的なことを聞いている。私は、思い出せる限りのことを、全て書き

込んだ。こういうときに重要なのは、真実を書くことではなくて、ウソを書かないことである。後で「嘘だろう」と問い詰められた時に、「まあ、必ずしもウソというわけでもないです」と反論できそうなものは全て書いた。

何か付け足すことはないかと、未練がましく、もう一度用紙の頭から目を通し、それからオーディションの内容が書かれた部分に目をやった。

簡単に言うと、オーディションは三つのパートから成り立っていた。一つ目は、想像力を使って、自分の話しをすること。二つ目は、グループのメンバーと相互作用しながら、即興で、体を使って何かを表現すること。三つ目は、歌。即興という文字は、いつ見てもいい心地はしない。

しかし、それまでも、即興のクラスや、その他のオーディションでの即興で、しっかりと恥をさらしてきていたおかげで、この時には自分の神経もずいぶん図太くなっていた。とりわけ、今回はしゃべる即興ではないという事実が、心に余裕をもたらしていた。わずかな緊張感が自分の中にほどよい集中力を与えている。そして何よりも、クリフ・フオークナー先生との対面が、いよいよ迫ってきたことに、自分は興奮していた。「わくわくする」

と言う形容動詞は、こういうときのためにあるのだと思う。「わくわく」して緩みかけている頬を、われながらみつともないと思いつながら自分の順番を待った。

予定時間を少しオーバーしたところで、スタジオの戸口の内側が騒々しくなり、やがてドアが開かれ、四人の生徒が出てきた。準備時間がかかるのだろう、そのドアは、私たちを入れることなくすぐまた閉じられた。

「オーデションどうだった？」

私は、今出てきたばかりの人の群れに向かって聞いた。

「おもしろかったよ。今から受けるの？ がんばってね」

皆口々に感想やら、互いに対する賛辞やら、順番待ちのグループへの励ましやらを言いながら、それぞれ違う方向へ消えていった。と、そこへ、一人の学生がキャンパスの芝生を突っ切って走ってくるのが見える。ディアナだ。

「アキー」と叫びながら走り寄ってきた。同じ演技のクラスをとっていた彼女とは、比較的仲のいいほうだった。人懐っこくて、いつも笑顔のディアナはメキシコ系で、英語にも少し訛りがある。

「ディアナ！ 元気？ 今からオーディション受けるの？」

「うん。でもさつきまで、舞台セット作りの手伝いをして、遅れてしまったんだけど」

「十時半にサインしたんだったら、大丈夫。まだ始まってないよ。それより、私たち同じグループじゃん」

「そう！ サインした時に、同じスロットにアキの名前を見つけたから知ってたんだけど、今日は、ほんとに間に合わなかったかと思って焦ったよ。あー、でもよかった」

「ディアナと一緒になら心強いよ」

「あつ、この応募用紙、記入しないと。でも、時間が……もうないかなあ……」

などと言っていると、内側からギギーっとドアが開かれ、入るように指示された。ドアの入り口で、ついにクリフ・フォークナー先生と対面した。

先生の顔を真近で見る。

あれ！ この先生知ってる！ 一瞬、半分微笑みかけた顔を硬直させたまま、無言でとまどっている私に、フォークナー先生は、

「やあアキ！ 僕がクリフです。昨日は挨拶ができなくてごめんね」と、握手を求めてきた。

そうである。私は、昨日この先生に会った。大掛かりな舞台セットのペンキ塗りをしていた私が、ペンキの入ったバケツを危うく脚立でなぎ倒そうとしていたところを助けてもらったのだ。しかし、昨日以前にも、私はこの先生を何回か見かけている。当時、舞台セット作りに精を出していた私は、セットデザイナーでもあるこの先生と、作業場で何度かすれちがっていた。誰とでもそうであるように、目が会えば、お互い微笑み合っていたのだった。彼がかの有名なフォークナー先生だとも知らずに。「どうも。私がアキです。お会いできて光栄です」と言って微笑むと、握手をしながら、先生の顔をまじまじとみた。どうして今まで気付かなかったのだろう。

学部案内のカタログに載っていた先生の顔写真を思い浮かべて、ハッとした。全然似ていない！ 雰囲気から髪のはえ具合まで、カタログの写真とは随分と違っているではないか！ 一体何年前の写真を載せていたのだろう。大学もなかなかいい加減なものだ。

実物のフォークナー先生の第一印象は、「満面の笑みを浮かべながら、忙しなく羽ばたいているハミングバード（はちどり）」といったところである。やさしさとエネルギーが、全身に満ち溢れた先生に、私は好感を持った。フレンドリーで、先生の威厳みたいなもの

があまり感じられない。一瞬にして、フオークナー先生は、自分にとって、「ハミングバードおじさん、クリフ」になった。

クリフの横に、もう一人背の高いお兄さんが立っていた。演技科の院生で、脚本家でもあり、ギタリストでもあるジェフである。ゆつたりと、落ち着いた笑みを浮かべながら、ジェフは握手を求めてきた。見た目はカッコいいお兄さんなのに、どこことなく、冬眠から覚めたばかりのクマみたいな雰囲気がある。初対面では、落ち着いた人なのか、それともただボーっとした人なのかは見極めにくい。それでも、おっとりとした優しい人柄には、やはりこちらも好感を覚えた。

そして、スタジオの奥のほうに、もう一人、女の先生が動き回っている。確か、名前を言う程度の挨拶は交わしたと思うが、ざわざわしているうちに本題へと入ったため、よく覚えていない。用意された椅子に腰掛けて、手渡された印刷物に目を通していたとき、クリフが説明を始めた。

さつき奥で動き回っていた先生を意味して、

「こちらがディードラ、彼女は創作ダンスの分野で活躍している先生です。今日は、彼女

にオーデイションの指示をだしてもらいます。それじゃ始めましょうか」

と、言つてディードラと目を合わせると、今度は彼女が立ち上がつて、私たちの椅子の方へ歩み寄つてきた。

全身黒ずくめで、レンズの小さい黒ぶちメガネをナウくかけている。四十代後半ぐらいだろうか。微笑んでいて、やさしそうではあるのだけれど、他の二人にはない威厳があつて、少し近づき難い。

「それじゃ始めようか。先ずは床に座りましょう」

言われるままに、床にあぐらをかいて、ディードラ、自分、そして他の二人の生徒と共に輪になつて座つた。

「私が、今からみんなを想像の世界に導いてゆきます。それでは目を閉じて……、ゆっくりと息をして……。今あなたはどこにいる？ 何が見える？」

なっ、何だ！

催眠術か？ 瞑想術か？ どこにいるつて、わたしやここ、スタジオの中にいるよお。何が見えるかつて、何にも見えないよ、目を閉じたままじゃ。後の二人も目を閉じてるのか

な？ちよつとす目を開けてつと……。ああやっぱり、みんなちゃんとやつてる。やばい。早く瞑想の世界へ入らないと……。

瞑想などという、いかにも怪しげな課題に対する自我の抵抗が少しあって、それから一瞬、故郷の用水路で魚とりをしていた、幼少期の思い出が頭を過ぎる。青々とした田んぼから風が吹いてきて、用水路の水面を波立たせる。水の動きにときめく小学生の胸を、今の自分の中に体験しかかったその時、突然、実家の風景がフラッシュバックして、魚とりを遮った。なんと慌ただしい瞑想だろう。

小学校三年生くらいだった頃の、何の変哲もないある冬の日の、食後の光景。家族団らんの時間が、生々しく蘇ってきた。頭の中だけでなく、自分の体全体が、想像の中で小学生の自分を生きている。アメリカへ来て以来、何年かに一度しか会えなくなった家族のこ

とを、懐かしさと共に思い返していた。

危険な家族に囲まれて

しんしんと冷え込む真冬の夜。おでんの匂いが、積水ハウスの我が家の一階のリビングルームに立ち込めている。部屋の中は暖かく、明るい。さっきまではお張っていた、おでんの煮卵ともち巾着でお腹は一杯だ。食事の後方付けも終わり、家族でホッと一息つく時間。ダイニングテーブルでは、母と上の姉がお茶をすすっている。いつも忙しそうにバタバタと動きまわっている母も、この時ばかりは、ほっとした表情を浮かべて、ボケーっとお茶を飲んでいた。ダイニングテーブルの横のリビングエリアでは、私と、中の姉と、父が、ピンクのじゅうたんに座り込んでトランプをしている。

「一緒にトランプやろうよ。早くうー！」

母や上の姉も誘ってみると、母は、やる気なさそうに、「えー、わたしはもうええわ」と、歯切れ悪く答える。「もうええわ」とはどういうことだろう。一度だってトライしたことすらないのに……。

私の母は、よく働く。人より要領が悪い分、人より多く働く。仕事をし、家事をし、私の記憶の中で、母はいつも働き疲れていた。そして、夜、家事がひと段落すると、ボケーとし始める。起きているのか寝ているのか、はたまた、生きているのか死んでいるのかすら分からないような際どいラインで、ただただボケーっとしていた。この日も相変わらず、ボケーっつと、ダラーっつと、焦点の合っていない目で、湯飲み茶碗を見つめていた。この調子からいくと、たとえ茶柱が立つのが目に映っても、それを認識するのに最低三時間。

「あつ、そういえば、茶柱が立ってたわ、何かお願い事でもしようかしら」

と、願い事を考え始めるのは、翌朝になってからというような思考ペースだった。

上の姉はと言うと、

「あんたらのバカ遊びにはつきあつとれん！」

と、いつもの決め台詞をぴしゃりと言って、私たちを無視している。姉は冷めていた。そして、妹二人とはあまり遊びたがらなかった。唯一付き合ってくれた

くまちゃんごっこ（シルバニアファミリーの動物人形遊び）でさえ、一度遊び始めると、下の二人からは距離を置いていた。

私と中の姉が、「くまちゃんごっこ」とマジックで書かれた段ボール箱を引きずり出してくると、上の姉は、きれいな赤いカンカンを下げてやってくる。下の二人が、鼻や足の先が、むけむけのはげはげになった、くまちゃんやら、うさぎちゃんやらを、全ての小物がごちゃ混ぜになった箱から掘り出しているとき、上の姉は、赤いカンカンから、一つ一つ丁寧に、箱に入った小物や、くまの人形を出していく。せっかちな妹二人は、くしゃくしゃになったハンカチやティッシュを適当に床に敷き並べ、わずかな所有物であった、おもちゃの机や暖炉をその上に並べると、もう遊び始める。

「あらこんにちわ。うちのくま子がいとお世話になっておりますて、どうも」

「いえいえ。うちのうさ雄のほうこそ、本当に……」

関西に生まれ関西に育った私たちが、くまちゃんごっここの時ばかりは、必ず標準語になる。無意識のうちにそうなる。くまちゃんの世界は、いわば我々にとって、ファンタジーの世界であり、日常語であった関西弁（正確に言うところ、津市の方言、津弁）は、所帯じみ

ていてファンタジーのくまちゃん達には似合わない。話の筋はいつも同じで、くま先生の家の学校へ通う、くま子とうさ雄が、困難を乗り越えながらも結婚し、白い猫の双子が生まれるといったものだっただけ。

当時、自分たちの持っていた人形の種類が限られていた私たちは、熊とウサギから猫が生まれるというストーリーに何の違和感も持っていなかった。

「うちのくま子も、そろそろ嫁にやりたいと考えているんだがねえ」と、くまの父。

「あら、それでしたら、うちのうさ雄が、お宅のくま子さんを気に入っているようですわ」「それでは、二人を結婚させましょう」

「そうしましょう」

そして、うさ雄とくま子の壮絶な恋愛が始まる。

「くま子さん、僕はあなたと結婚したいのだけれど、実は今から、戦争に行かねばならないのです」

「えっ、そんな……」

くまちゃんごつこの度に、うさ雄は戦争に行かされていた。

「僕は必ず生き残る。いや、生き残って見せる、なぜならあなたを愛しているから！」

「うさ雄さん！私もあなたを信じて待っています。なぜならあなたを愛しているから！」

そしてうさ雄は出征し、しばらくして、ティッシュを体中にぐるぐるに巻きつけて帰ってくる。その後二人は結婚し、生まれたばかりの猫の双子を覗き込みながら、

「なんてかわいいのでしょう」

と言って、めでたしめでたしとなる。こんなやりとりを、私たちは、真剣に、感情を込めてやっていた。

私たちの横で、上の姉はまだ、小さな小物や家具を丁寧に並べている。我々の話には一向に参加してこない。ファンタジーの世界を抜け出して、私は、姉に津井でこう言った。

「ちよっと、ゆきちゃん（上の姉の名）！何しとんの。まだ？もうこっちは赤ちゃんまで生まれて、話が終わってしまったやんか。早う！なんか話し作ろうよおー」

すると姉は、今自分が作り上げた、完璧に整備されたくまの家を眺めて、一つため息をつくと、

「はあ。なんか、もう疲れた」

と言つて、いきなり片付け始める。さつき、箱から出てきたばかりのくまさんは、傷一つないまま、またもとあつた箱の中へと、丁寧に収められていった。姉のきれいなくまさんが、私のむけむけのうさ雄と結婚するなどはもつてのほかである。

とにかくこんな調子で、姉は、妹二人のする遊びには、めつぽう冷めた態度を示していた。姉が冷めすぎていたのか、下の二人がバカ過ぎたのか、そこは今でも謎である。

食後の居間、そこに敷かれたピンクのじゅうたんの上には、姉いわく『バカ遊び』をする三人が取り残されている。私、中の姉、そして……父。

父……。食卓では、政治、経済、哲学、物理、阪神タイガース、ドラゴンボールZに至るまで、あらゆる分野において熱弁をふるい、何が面白いのか全く理解不可能なおやじギャグを言つては、「あはは、おもしろいね」と人工的に笑う母以外、顔も上げなければ、箸の動きすら止めなかった娘三人を前に、一人でウケて、なぜか照れていた父も、トランプとなるとたいしたことはなかった。

中の姉は、強くて、速い。脚も相当に速かったが、何をしていてもとにかくスピードが勝負の人である。年子だったため、一見双子のように育った姉と私だったが、強くて速い姉に、真つ向勝負で勝てたためしはない。トランプにおいてもそうである。

この夜、私たちは、定番の『銀行』ゲームをやっていた。敷き並べられたトランプを、運任せにめくっていき、三が三千円、二が二千円、エースは千円、四から十が百円。ジャック、クイン、キングが五百円。そして、ジョーカーが出れば四千円と言った具合に値が決まる。残りの二人は、めくり手の金額と同等の額をめくり手にあげなければいけない。つまり、三が出れば、めくり手は、九千円の収入になる。技術も何も要らない、頭を使う必要の全くないゲームが私たちは大好きだった。姉は、目にも留まらぬ速さでカードをめくり、「ちよつと！はやく！何しとんの！」

と、急かしてくる。私と父は追い立てられるようにして、カードをめくり続けていた。そして、どういうわけか、いつも姉が勝つのだ。速過ぎて、なぜ彼女がいつも勝つのかすら分からない。オセロも、将棋も、チェスも、どれをとっても彼女は速すぎて勝ちめはない。

こっちに考える暇を与えない。

自分の駒をさつさと動かし、次に私の番になると、

「じゃあ、みいちゃん(姉の自称かつ呼び名)がアイスクリームをとって帰ってくるまでに、絶対駒を動かしといてよ！」

と、プレッシャーを掛けておいて、自分はサッと台所へ行き、三秒弱でアイスクリームを口へ入れたまま帰ってくる。そして、

「ちよつと！まだ？もう、仕方ないなあ。じゃあもう一回アイスクリーム食べてくるから、今度こそ絶対に駒を進めといてよ！」

と、またもや台所へと消えていく。

私の頭は混乱し、ハッと気付いた時には負けている。負けるという表現は、ここでは不適切かもしれない。私は、自分が負け始めると、

「もうええわ。やる気ないわ」と、片っぱしから勝負を投げっていたので、負けもしなかったが、よく負けに追い込まれていた。

この日のゲームも、やはり姉が先行している。それでも、この光景の中で、自分は幸せ

を味わっていた。家族団らん。それは、我が家の数少ない幸福のひとつであった。が、それと同時に、あまりにも長いだらだらとした団欒タイムは、悪習でもあったと思う。

私が日本にいた学生時代、あまり勉強をしなかったのは、できなかったからである。原因は二つ。だらだらと続く食後の団欒。そしてもう一つは、深夜に聞こえてくる両親の凄まじい「いびき」。

私の両親のいびきは凄い。高校に通っていた当時、毎晩のように英語の予習に悩まされていた私を、さらに苦しめていたのが両親のいびきだった。夜、勉強していると、隣の寝室から、「ガ〜ガ」「グ〜グガ」「ガ〜ガ」「グ〜グガ」と、いびきの大合唱が聞こえてくる。勉強に集中などできたものではない。

「ちよつと！うるさい！うるさいってば！」

と苛立って、隣の部屋から叫んでみるが、一向におさまる気配はない。それどころか、どんどんとボリュームが上がってきているのではないか。

「あー、やかましいー！」

と、今度は、机の引き出しから物差しを出してきて、自分の部屋と両親の寝室を隔てている壁を、叫びながら叩いてみる。無論、この程度の抵抗でおさまるような代物ではない。翌朝、寝不足のまま、

「いびきどうにかして！騒音公害で、勉強なんてできたもんじゃない！」

と訴えると、母は、「えつ」と、とぼけた顔で父に、

「おとうさん、私ら、昨日そんなにもいびきかいたったつけ？」

そんなことあったかしら？という表情で、父の同意を求めようとする。すると、新聞から顔を上げた父は、

「ん？いや」と、こつちも、「そんなはずはないでしょう」という顔で、知らん振りしている。

私がまだ小さかった頃は、こんな風ではなかったのに。父はいびきなどかかなかったし、母のいびきも今はひどくなかった。本を読んでほしいとせがむと、母は娘たちの布団に仰向けになって、私たちが大好きだった『ねむいねむいねずみ』か、『ぐりとぐらのかいすいよく』をよく読んでくれた。

「ねむいねむいねずみ」と題名を読んだあたりで、もう、ふぁーとあくびをし、二行半ぐ

らい読んだところで、バサツと本が母の胸の上に落ち、そうかと思うと、出っ歯の口をパカツと開けて、「カー」「カー」つと、寝息を立て始める。ねむいねむいのは、ねずみなのか母なのか、子供心にも疑問だった。それでも当初は、「カー」「カー」程度のかわいいものであったのに……。今はどうだろう。

「いびきなどというもんはなあ、人のを聞いてばっかりでは損や！」

と、私が高校に上がった当時、反撃を開始していた父と、さらにその上を行こうとする母。相乗効果とは実に恐ろしい。隣の部屋で、ものさしを振りかざして吼えている娘のことなどは夢にも見ることなく、いびき合唱隊は勢いを増していった。

瞑想から醒めて

強いおでんの匂いを、鼻の奥に残したまま、私は瞑想から醒めた。目の前が少し霞んでいる。時間の流れが遅く、静寂にしばし身をゆだねていた。穏やかな微笑を浮かべながら、こちらを見つめているクリフが目映る。無意識に自分の頬が弛んだ。緩やかな時の流れに沿うように、私たちは、静かに、たった今起こった体験を一人一人語り始めた。

先ず、インド系の彼女、ソヒニが話し始めた。彼女はどうかやら、瞑想の中でインドへ行っていた様だ。何やら、幼少時代の重要な体験を話しているらしい。自分でも、頭の中がまだ通常通り動いていないのが分かる。彼女の話を聴きながら、話の内容が、自分の頭の中でうまく画像化されない。イメージを伴わないまま、言葉という音の塊が、両耳から滑り込んで来ては消えてゆく。

ソヒニが話し終わると、ディアナと一瞬目が合って、彼女の目が「先にいくよ」と合図してから話し始めた。幼い日の彼女が、家の入り口の開いたドアのところに立って、誰か

の帰りを待っている。切ない話だ。情緒深い彼女の語り口に、自分の胸が動かされ、それと同時に、ドアのところで、無言のままうつむき加減に誰かを待っている少女の姿が、頭の中に浮かび始めた。

その時だ、今までのリラックスマードが、自分の中で崩れ去り、緊張が全身に走る。我に返った！血の流れが速くなり、心の声が慌しくしゃべり始めた。

ヤバイ！ くないしよう。二人ともこんなにも真剣で、心深い話をしてるのに、自分の団欒の話は、あまりにも間が抜ける。ボケーっとした母や、トランプに燃える父の話は場違いや。あー困ったなあ。もっと何か芸術的なことを想像をすればよかったのに。って、第一、芸術的な経験もないのに、どうやってそんなもの想像せえちゅうねん。あー、こんなときに自分で突っ込みいれてどないすんの！自分アホやわ……。あつ、そうや、なんか適当に、話を作りあげて言うてみようかな。あかん、そんな器用なこととはできへん！焦りで、じわりじわりと手のひらが湿ってきた。ヤバーい！

ディアナの話が終わる。全員がふいにこっちを見た。頭の中の声がスッと消える。みんなの優しい表情に、さっきまでの焦りが急速に退いていく。そして、胸の中がストーンと落

ちた。一呼吸して微笑むと、私は、自分が今さつき想像した光景を、正直に話し始めた。

「私は、小学校三年生ぐらいで、自宅のリビングルームにいます」

さつき見た光景が脳裏に蘇ってくる。私は、頭の中に見えるイメージと、自分がそのイメージの中で感じるものの全てを、忠実に、事細かに、自分の言葉の中で再現した。ほのぼのとしたイメージに合わせてか、話をする自分の顔が弛みっぱなしだ。

「部屋の中には、さつきまで食べていた夕食の匂いが立ち込めています。とても強い匂いで、私の大好きな匂い。日本の冬の伝統料理、おでんです」

『おでん』と言う名詞を私が言った瞬間、クリフの顔がくしゃくしゃに弛んで、嬉しそうにうなづく。

「あれ？知ってるの？」と、とつさに彼に聞く。するとクリフは、もう一度、大きくうなづいた。おでんを知っているなんて、この先生は相当の日本通かもしれない。

私の話は続く。所帯じみた話を、明るく、楽しげに話し、最後は、

「今夜も姉が勝っている。でも私は幸せな気分です」

と、締めくくった。ずうずうしくも、場違いな話をしたなどという罪悪感とは、この時に

はもうみじんも無かった。加えて、私の話に、ニコニコ顔で同調している周りの人間が、私をさらに図に乗らせているようだ。

オーディションの滑り出しはまずまずだ！なんだか自信が湧いてきた！

二つ目の課題は創作ダンス。

プリントされた詩を先ず読んで、その内容を、三人で相互作用しながら体现するように指示が出る。最初の一分間で、簡単に打ち合わせをしてから踊り始めるようにとのことだった。別に密談しているわけでもないのに、私たちは頭を寄せ合い、ヒソヒソと話し合う。とは言っても、ソヒニが一人で話すのを、私とディアナは、役立たずにも聞いているだけだった。ソヒニの話が、二分、三分と、長引いている。すると、ディードラが立ち上がって、神妙な顔つきでこういった。

「あのー、いい加減踊り始めてくれないかなあ」

慌てて立ち上がると、ソヒニが、「じゃ、さっきの打ち合わせどおりに」と、言わんばかりに、私たちに目で合図をし、さっさと一人で踊り始めた。

「さっきの打ち合わせで、彼女は一体何を言いたかったのだろうか……」私の頭の中には、はてなマークだけが無数に生えていた。彼女が何をしようとしているのかは分からない。でも、何かをしなければいけない。私は、後の二人の動きを横目で見ながら、手、足、腰、頭を、適当に動かしてみた。ギクシャクと。

自分の動きがいかにもいかということとはよく分かっていた。体が人一倍硬い私は、うまく踊れない。それでも、恥を捨てて、中途半端に飛ぶバツタのような動きをひたすら繰り返し、最後に、意味も無く天井を見上げるポーズをとって創作ダンスを終えた。だんだん自信が無くなってきた。

オーディションの最後は、予告どおり歌のテスト。

私は歌が下手である。これまでにも、歌のレッスンを受けたりして、少しでも向上するよう試みては来たのだが、やはり上手くはない。音程がとれないわけではないから、必ずしも音痴というわけでもないのだが、何せ音域が狭すぎて、私の歌は、お経に毛が生えた程度にしか聞こえない。高音も、低音もダメ。音量も無いため、ヒャーヒャーと音がかす

れる。歌っている自分でさえ、自分の発する不快音に、時折、黒板を爪で引っかいたときの身震いを覚えるのだから、それを聞かされている人たちの心境などは、想像するのも恐ろしい。

しかし、オーディションでは、『歌が、得意』であるかのように見せかけて、歌いきらねばならない。自信の無さと謙虚さは、オーディションの敵だ。なぜなら、オーディションでは歌の技術とともに、『歌の上手い自分』を演じきる、演技力が問われているから。

演技とは、一種の嘘つきゲームである。事実、演技のクラスでは、嘘つきゲームを練習する。例えばこんなゲームがある。

五人一組のグループから一人、ミシェルを選び、彼女の実体験と、家族や生活などの全ての背景をグループ全員が把握し、それを、一人一人が、あたかも自分の話であるかのように語り、もう一つのグループが本当は誰の話なのかを当てるのだ。敵方チームから名指しでくるどんな質問にも、平然と答える。例えば、敵方がエレンに、

「エレンに質問。君の車はどんな車？」

と聞けば、たとえば彼の本当の車が、赤のフォードでも、ミシエルの車が緑のトヨタなら、

「緑のトヨタ」と、平然と答える。

今度は、敵方がニヤリとしながら聞いてくる。

「じゃあ、アキに質問。君のお父さんの名前は？」

「ビル」

「お母さんの名前は？」

「キャサリン」

「両親の母国語は？」

「もちろん英語」

このあたりでみんながゲラゲラと笑い出す。自分でも、バカバカしくて笑いがこみ上げてくる。でも笑ってはいけない。真顔でやり通さなければ、役者とは呼べない。そして、このオーディションにおいて、自分が演じ通すべきうそはただ一つ。

「歌への自信は？」

「満々です！」

ここ数カ月の間、シャワーを浴びながら、それはもう必死になって練習してきた曲、『ふ

るさと』を、心を込めて歌った。誰一人として、耳をふさいだり、逃げ出していくものはいなかった。みんなの寛大さと、忍耐強さに、私は感銘を受けた。

月曜日の昼前、朝のクラスを終えて教室を出てくると、掲示板には合格者の名前が張り出してあった。ドキドキしながら自分の名前を探す。

あった！あった！自分の名前があった！

プロジェクトのテーマが長崎の原爆で、しかも、オーディション前に、Eメールでコネまで作っておいて落ちるほうがおかしい。それでもやはり嬉しい。嬉しい……、嬉しい。

多国籍、多民族、十人十色のメンバーたち

二〇〇二年一月四日金曜日。日本ならまだ正月休みのこの日、新学期が始まった。つまり今日が、待ちに待ったプロジェクト初日である。アーバインは暖かく過ごし易い。この時期に、長袖Tシャツ一枚で、芝生の上に寝転んで日光浴ができるのは、やはり南カリフォルニアの特権と言えよう。

のどかな金曜の午後。普段なら一番眠たくなるこの時間帯も、今日は特別。心の中も、頭の中も、スカッと晴れ渡っている。好奇心を抑えきれず、集合時間の午後一時の四十分近く前からリハーサホールの辺りをうろうろしていた。無意味に行ったり来たり、立ったり座ったり。するとしばらくして、クリフがホールの中へ入っていくのが見えた。あつと思つて後を追いかけてようとしたが、何が何でも時間が早すぎる。クリフは何か一人で準備することがあるのだろう。入りづらい。かといって、部屋の周りにずっと張り付いているのも惨めなものだ。仕方が無いので、一たんトイレへ行って時間をつぶしてから戻ってくると、今度こそ

勢いよくホールの扉を開けた。クリフと目が合うと、案の定、満面の笑みで迎え入れてくれた。

「やあ、アキ！元氣？来てくれてありがとう。冬休みはどうだった？楽しかった？」

クリスマス休暇中ずっと、親友のケリーの家に泊めてもらい、ケリーのお母さんの手料理をたらふく食べさせてもらっていた私は、休暇前よりもやや丸くなった顔をほころばせて、楽しかったと答えた。

「やっぱり友達と過ごすのが一番だね」と、クリフは忙しそうに動き回りながらも、話をする一瞬、必ず私の目を見る。その軽快な体さばきに、ハミングバードを連想する。

天井の高い、体育館のようなホールの奥のほうには、二十脚あまりの椅子がサークル型に並び、そこに、女の子が一人立っていた。彼女の名前はエデン。それとなく視線を逸らしながら話す姿からも、彼女はシャイらしい。話す時はとても早口なのに、べらべらと一方的に喋りたてるのではなくて、こちらが話している時は、真剣に耳を傾けている。

一人、また一人と、ホールの中にメンバーたちが集まってきた。次第に人の輪が大きくなり、お互い自己紹介をしあったり、たわいもない話をしあっている。クリスマス休暇の話が多い。名前を覚えるのが苦手な私は、自己紹介された相手の名前を、片っぱしから忘

れていっていた。一番最初に話したエデンの名前ですら、聞いた二秒後にはさっぱりと忘れていたのだから、情けない。

定刻を数分過ぎたところで、クリフが集合をかけた。新しいメンバーを見てみると、モリモリとやる気が湧いてくる。どんなことをとつてもそうなのだが、私は、先行きの見えない不安や恐怖感、初めて何かを体験するときの緊張感を、変に愛している。何か新しいことを始める時、どこか新しい場所へ行く時、誰か新しい人に会う時、私は恐怖を感じる。未知なる物に対するワクワク感だとも言えるが、ワクワク感にも二種類あり、ただ単純に、「楽しいこと」に対して起こる興奮にも似たワクワク感と、もう一つは危機感と緊張感の中に感じるワクワク感がある。前者は、友人と旅行に出かける時や、前評判の良い芝居を見に行く時に起こる。

安全地帯にあつて、どこか「ポジティブ」な経験であることが保障されているような時に発生する感覚である。後者は、より危険で、不透明で、挑戦的な状況に遭遇した時に起きるワクワク感。初めてアメリカへ来た時や、初対面の人と何かを始める時、それから、

ステージで即興をやる時に感じてきたタイプのものだ。

私は、人にはよく「勇気があるね」と言われるが、自分は、実は人一倍、未知なる体験を恐れている人間なのではないか、と思うことがある。だから、さらに危険で挑戦的な状況に身を追い込んでいき、もうジタバタしても如何にもならない、ある種の諦めの中で、スツと体の力が抜け落ちる瞬間を追い求めているようなところが自分にはある。自分が、破滅しそうで、しかも極端に居心地が悪くなる可能性を秘めた、そういった状況に遭遇すると、私は恐れ、緊張し、そして奇妙にその状況を愛する。逃げ場もなく、もう前に突き進んでいくより他仕方が無い時に生まれる「覚悟」が、自分の中に新たなエネルギーを与える。

新しい経験、見知らぬ人たち、先の見えないプロジェクト。新メンバーを前に、私はワクワクし、モリモリしていた。

メンバーと上手くやっていけるだろうか。英語でのコミュニケーションは大丈夫だろうか。クリフの要求に、十分に応えていけるだろうか。

考え出したら、不安などは際限がない。だから、私はそういうことは考えずに、勝手に湧いてくるワクワク感にのみ、身も心も任せていた。

ジェフの指示で、準備運動が始まる。まずは、空間の中を自由に歩き回ることから。徐々に、歩く速度を速めていく。次に、すれ違さまに相手の目を見ながら歩く。そして今度は、目が合った相手と、自己紹介をしてはまた歩く。この時私たちは、それぞれが、メンバーの中の誰かの名札を一つずつ持ち歩き、その名札の相手が見つかるまで、互いの自己紹介を繰り返していった。私の手の中には、『エデン』と書かれた名札が入っている。

エデンってどの子だろう？

今思うと恥ずかしい限りだが、この時私は、自分がさつき最初に話した彼女がエデンだということに全く気付いていなかった。そして、延々と自己紹介を繰り返し、最後の最後に彼女に歩み寄ると、

「あのー、何度も聴いて悪いんだけど……、あなたもしかしてエデン？」

準備運動が終わると、今度はクリフの指示で、私たちはあらかじめ並べてあった椅子に腰を下ろした。個人判別ゲームをする為である。

「アメリカ出身者」と、クリフが言えば、アメリカ出身者は椅子から立ち上がる。

「アメリカ以外の出身者」と言われると、今度は、私も含めた何人かが立ち上がる。

「家族がアメリカ以外の出身者の人」

私はまたも立ち上がる。そして今回は、メンバーの殆どが立ち上がった。国際色豊かなグループ構成だ。私の他にも、もう一人日本人がいる。イズミだ。彼女は、日本のことをよく知っていて、歌もうまい。プロジェクトの間中、日本に関する質問が飛ぶたびに、しどろもどろしていた私とは違い、彼女はしっかりと受け答えしていた。

私は他の学生に混じって、

「なるほど。日本の文化って、そうなんだー」

と、彼女の説明に感心しっぱなしだった。

実際、日本のことを外国人に説明するのは容易ではない。後々、簡単なことだったのにと気付くことはあっても、唐突に聞かれると、答えが見つからずしばし悩んでしまう。イズミはその点すごかった。何にでも即答する。

オーディションで同じグループだったソヒニとディアナもいる。ソヒニは、思った通り

インド出身で、インド北部の伝統的民族ダンス、マニピュリを専門にして、博士号まで取っている人だと、後々分かった。五カ国語を操り、インド出身とあって、黙想のことに精通した人らしい。そう思い返してみると、たしかにオーディションでも、彼女は、民族的で、宗教っぽい踊りを披露していた。こんなに偉い人だとは知る由もなく、私は中途半端なバッタジャンプの創作ダンスで彼女の踊りをぶち壊してしまったようである。

それから、ディアナ。彼女はメキシコ系で、とにかく明るくてキュート。プロジェクトの中で、戦争やテロといった暗い話題が続いた時にも、ホッと一息入れさせてくれるのが彼女の笑顔だった。

その他のメンバーの、国籍や民族的背景も実に多様だ。

モニカ。彼女は、スウェーデン出身。どんなことに對しても学ぶ意欲満々。二回ほど、彼女と一緒に、アジアの舞台の歴史や理論を学ぶクラスをとったことがあったが、とにかく頭の回転が速く、どしどし意見を発言していた。前向きで、強くて、賢い。本人はしゃべり過ぎる癖を気に病んでいたようだが、私はいつもモニカの話を聞くのを楽しみにして

いた。つまらないことをだらだら話すクラスメートには付き合いきれないが、モニカの話は、ためになるから、どれだけ聞いても飽きない。ペアワークなどもよく一緒にやった。真顔でジョークを言う癖があるが、それが結構つばにはまって面白い。

「I like you」と真顔で言われたことも数回あった。

「デートでも行くか」と、冗談で誘うと、

「そうするか」と、真顔で乗ってくるから笑ってしまう。

ジョンは、日系四世のアメリカ人だ。一回生であるうえに童顔の彼は、若いというよりはむしろ、少年といった感じがする。しかし、一度話し始めると、その外見からは想像もできないほど大人だ。穏やかで、落ち着いた口調。周りのことが非常に良く見えていて、細やかな気配りのできる人だと思う。日系アメリカ人のジョンにとって、原爆は何を意味するのだろうか。

ジニー。演技科の院生。イタリア系アメリカ人で、自身ニューヨーク出身の彼女は、九

月十一日のテロから数カ月しか経っていなかったこの時、複雑な心境でこのプロジェクトに参加していた。崩れ去った貿易センターの中に親友を失った彼女もまた、テロの犠牲者と言えよう。知的で、大人で、演技力抜群のジニーは、私たちのグループのお姉さんの存在だったが、テロの話題になるたびに、こらえきれずに彼女の両目から溢れ出した涙が、今でも私の脳裏から離れない。ちなみに、日本に関する知識も多少あり、日本を訪れたこともある彼女の好物は、トロ。彼女には、むやみに、

「夕飯でも一緒にどう？ おごるよ」

などと言ってはいけない。

アレックス。彼は、三歳の時にルーマニアから移住したアメリカ人で、チャーミングボーイだ。赤毛でキュートな彼は、おそらく彼自身、自分がチャーミングなことを認識していたと思うが、キザなところが全く無く、さまざまなことに向きで真面目。彼もまたディアナと同じ様に、私たちが暗く落ち込まないために、グループ構成において、絶対不可欠な存在であったと思う。なかなかの演技派でもある。

デボラ。七年前にアメリカへ移住した韓国人。歌が上手く、とても気さくで、すぐに友達になった。プロジェクトでは、韓国から見た日本について、彼女から多くのことを学んだ。かつて、韓国人の教授が、「日本は、近くて最も遠い国」と、私に日韓関係の歴史を話してくれたことがあるが、デボラをはじめ、何人かいる韓国人の友達と接していると、「やはり韓国は、文化的にも感覚的にも隣国である」という印象を受ける。話さなくても、「アジア人どうしだから分かる何か」がある。自分にとってデボラは、アットホームな気分になれる友達だ。

ウィリアム。演技科の院生で、「身体動作」に重点を置いて研究をしているらしい。一見、ラテン系の貴公子のようにも見えるが、気取ったところが全く無く、温厚で、物静かで、注意深い。プロジェクトの間、体で何かを表現することが多かったため、ウィリアムのアドバイスは興味深かった。いつも、慎重に、慎重に、そして、慎重に、物事を見据えて、アドバイスや発言をする。それ以外の面では、かわいい奥さんというもラブラブ。

リリアン。コロンビア出身のリリアンは、演劇と政治の関係について勉強を進めている、政治物知り博士だ。特に、国際紛争を主題としているこのプロジェクトでは、彼女の国際政治に関する情報は貴重だった。リリアンとは家の方向が同じだったため、よく一緒に帰った。彼女は、帰り道にいつも、

「私、今日何か変なこと言ったかなあ」

と、自信なさそうによく聞いてきた。彼女ほど知識があり、その内容を明確に伝えられる人間でも、自信をなくすことがあるのだと分かって、妙に自分が救われた気分になったのは、あまりにも都合の良すぎる解釈だろうか。

クリス。演技科の院生で、アラブ系と、黒人と、その他いろいろ混ざっているらしい彼は、演技力も凄いが、自分のアイデアを妥協しない姿勢も凄い。考えていることが全て顔に出る彼は、嬉しいのか、怒っているのか、すねているのか、手に取るように分かる。演技や何かを訴える姿の中に、情熱を感じさせる俳優である。編入後、初めて受けたオーディ

シヨンで、コールバック（二次選考）に行った私が、最初に見た演技、つまりは、アーバイン校編入後、初めて見た演技が、彼のものだった。呼び戻された七十五人の先陣を切つて舞台へ飛び乗ると、台本を片手に、堂々と、熱く演じ始めた彼の姿が忘れられない。

「レベルが違う」

そして今、彼と同じプロジェクトにすることが信じられない。

ジェシカ。赤毛のアメリカ人ジェシカには、日系三世のご主人との間に、人懐っこくて、信じられないほどかわいい、小さな娘がいる。ジェシカのように、子供を育てながら大学へ通う学生が、アメリカにはたくさんいる。たくましい学生たちとでも言うべきだろう。ジェシカも物静かでありながら、やはりどこかに、母親の強さを秘めている。彼女の、アメリカ社会や国際社会に対する視点に、娘の存在が大きく影響している。

ドネッタ。アフリカ系アメリカ人のドネッタは、当時、院三回生で、ドラマ学部のスターだった。歌唱力、演技力共に抜群。スターなのに、物腰が決して高くなく、慕われている

というよりは、多くの生徒や先生に親しまれていた。ミュージカルの主演をいくつか務めていた彼女は、多忙で、今日のミーティングには来ていない。

自分の家族の出身地を順々に述べては、着席していく。出身地の多様性にも驚いたが、一緒に立ち上がっていたクリフに順番が回ってきた瞬間が最も驚いた。

「Japan」クリフはサラッとそういつて席に着く。クリフの家族は日本出身？

私は、右斜め前方に座っているクリフの顔を、まじまじと見た。どこから見てもアジア系には見えない。おでんを知っていたり、家族が日本人だったり……。クリフは謎だ。

質問が変わって、今度は、

「家族の誰かが、戦争に関わったことがある人」

少し考えて、それから私は立ち上がった。不思議な質問だった。確かに、自分の家族は、人類史上最大で最悪、と言われた第二次世界大戦に関わった。私の祖父は、大戦中、戦闘

飛行機を作っていたし、祖母も戦争体験者であることには間違いない。しかし、改めて、「家族が戦争に関わったかどうか」と聞かれると、一瞬実感が湧かない。戦争を、遠い歴史か何かの一部にしか思っていない自分の内心を、鋭く突いている質問だった。

メンバーの殆どが、戦争を実際に体験した家族を持っていると答えた。その多くが、第二次世界大戦や、ベトナム戦争だった。戦争は昔話ではない。遠い国の話でもなければ、誰か他人の話でもない。

個人判別ゲームの質問は、どれも普段自分が意識することの無い自己のアイデンティティーを、再認識させる。それと共に、民族的、国籍的に見ても、非情に多様性に富んだ私たちの殆どが、戦争や国際紛争と、切っても切れない関係にあるという事実が、戦争がグローバルな問題であることを印象付ける。椅子から立ったり、座ったりするだけの、単純な作業によって、視覚的に「自分たちが誰なのか」を学ばせようとしたクリフの意図が見える。

質問の合間に、私は一度、クリフの目をじっと見た。何となく惹きつけられて凝視した。ハミングバード先生の目の奥に、強くて鋭いものがある。クリフの体の中に通っている、

絶対に揺るぐことの無い芯のようなものが、目の奥に映っていたとでも表現しようか。軽やかな身のこなしや、絶えることのない笑みの内側で、どつしりと構えている何かがある。

プロジェクト折り返し地点の五週目を迎えた頃、モニカと私は、クリフについて話をしたことがあった。当時、プロジェクト以外にもクリフのクラスを取っていたモニカに、クラスの様子を聞くと、

「課題のエッセイで、大方の部分ではクリフと意見が一致してたんだけど、一箇所だけ意見が合わない部分があつてね。クリフらしく反論してあった。クリフの言っていることも分からなくはないけど、まあ、あんまり納得はいかないね」

と、強気のモニカは言うつと、

「クリフは、とても保守的だから仕方ないけど」

と、それでもまだ納得がいかない顔で付け加えた。

「保守的？」

驚いた。クリフほど保守的という言葉が似合わない人はいない。しかも、モニカの口から、クリフを指して、「保守的」と言う言葉が出たことにもっと驚いた。まさか、という表情

で私は、

「クリフほど前進的で、オープンな人はいないと思うけどねえ。新しいアイデアが好きだし、変化や違いを、常に尊重しているし。私はてつきり、モニカも私と同じようにクリフのことを感じていると思ってた」

プロジェクトを始めるにあたって、クリフが述べていたプロジェクトの展望からも、クリフがオープンな人であることは明確だったはずだ。

彼はこう言っていた。

「僕は今、押さえ切れない興奮と共にここにいる。一つには、こうして集まってくれたメンバーのバラエティの豊さに興奮している。それからもう一つ、これからプロジェクトをじて、何が起るのか、僕自身全く予想できないという事実に興奮している。このプロジェクトには一人の舵取り役はいない反面、一人一人、メンバー全員が言わば舵取り役を担っているとも言える。だから、最終的にどんなプロジェクトになっていくのか、もう全然分からない。だから、本当に楽しみ！」

他のメンバーと共に「へっ？」という顔をして、私は、変形生物「アメーバー」を連想していた。クリフは、「こうでなければならぬ」というフォーマットを、決して人に押し付けたりしない。だから、モニカの言う「保守的」と言うイメージに、初めはピンとこなかった。

納得のいかない顔をしていると、モニカは、

「アキの言っていることも、確かに正しいよ。要するに、クリフはとても保守的で、かつ前進的な人なの」

しばらく考えていると、モニカの「保守的で、前進的」という表現は的を得ているように思えてきた。自己という揺ぎない芯を持たずして、他にオープンでいることは難しい。古い知識や技術を尊重せずして、新しいものは生まれない。クリフは若い生徒の無謀な意見を受け止め、些細なことにも注意を払う。そういうことができるのは、きっと彼が、強い自己と、自信を持っているからだと思う。

ハミングバード先生の鋭い眼光を見つめながら、まだその時は漠然と、強くて鋭い「何か」を感じているだけだった。謎だらけのクリフ。彼の目の奥から、一つだけわかったことがある。

「この先生、頑固おやじに違いない」

個人判別ゲームの後、今度はグループに分かれて、宗教や言語、文化の違いなどを話し合った。そして、四時間みっちり続いた初日のミーティングの最後は、このプロジェクトへの参加動機を、順々に語ってゆくことだった。

「なぜ君は、今日ここにいるの？」という質問に答えていく。

何人かの生徒が、ニューヨークのテロ事件を参加の動機に挙げていた。第二次世界大戦後も、アメリカは多くの戦争や紛争を繰り返してきた。そして、武装器具や破壊兵器の開発に莫大な費用とエネルギーを費やしてきた。にも関わらず、アメリカ社会に、軍事超大国であるという意識や危機感が薄かったのは、アメリカは本土で戦った経験が無いからではないだろうか。それが、今回のテロによる本土攻撃で、実は、アメリカが国際紛争に最も関係のある国で、戦いには無実の市民の死が多数伴うという当たり前の事実を、少し自覚し始めたのかもしれない。

「テロの後、世界で起きている戦争や紛争に関心を持ったから」

「テロのことも含めた、いろんな意味での戦いというものについて、もっと話し合いをする機会が必要だと思ったから」

といった具合に、動機を説明している。このプロジェクトを、「攻撃されたかわいそうなアメリカについて語る場」ではなく、「世界の紛争に目を向ける機会」にしたいという意識が伝わってくる。プロジェクトのテーマを、攻撃されたニューヨークではなく、アメリカがずっと昔に攻撃した長崎にしたあたりに、クリフの巧妙さを感じる。テロはあくまでも、考える「きっかけ」であり、今回の「主題」ではない。

ウィリアムを含む数人の生徒は、自身のマイノリティー（少数民族）としての立場を参加動機に挙げた。ドラマ学部はとりわけ白人が多い。年間を通じて行われる、大小合わせて十五以上ある演劇も、白人を主題にしたものが多い。アーバインのドラマ学部では、多様性を尊重しているため、マイノリティーにもチャンスはある。しかし、ウィリアムの言う、「どうもいまいちシツクリこない」や、「学部全体を見渡した時に、自分の居場所について、疑問を持つことがある」という考えは、分からなくもない。

長崎レインプロジェクトに関して言えば、マジョリティー、マイノリティーに関係なく、全員が等しく主導権を握り、メンバーの殆どがマイノリティーで、しかもいろいろなタイプがバランスよく組み合わされているため、全員が少数派になる。たとえば、チームが日本の長崎でも、学部にとった二人しかいない日本人の私とイズミが、いきなりプロジェクトの主役になどなりえなかった。マジョリティーが存在しない、特定の民族を主題に置かないこのプロジェクトは、普段、心の片隅で「いまいちシツクリこない」と感じていた私たちを魅了したのだと思う。

メンバーの動機を聞きながら、私は自分自身の動機をもう一度心の中で確認していた。修学旅行で聴いたスピーチ。自分の動機は明確である。発言していないのは、残りあとジェシカと自分だけというところで、私は一呼吸して少し微笑みながら、

「今日自分がここにいるのは、現在存在している核兵器に、一言「NO」と言いたいから」と、話し始めた。

「はつきり言つて、アメリカで、核兵器や原爆について語ることは、容易なことではないと思う。そのことは、今までの経験からもよく理解している」

私は、真剣になり過ぎないような口調で、原爆をテーマにしたプロジェクトに集まってくれているメンバーに最大限の敬意を払うべく、自分の発する単語一つ一つに細心の注意を払った。そして、自分自身、アメリカで原爆について語ることが容易でないと痛感した二つの経験のうち、その一つを、ごく簡単に説明した。

一つ目の経験は、短大時代のスピーチのクラスで起きた。「自分の立場を主張し、聞き手を説得する」という課題で、私は核兵器の廃絶をトピックに選んだ。長崎で聞いたスピーチを基に、核兵器の必要性を主張した。六分間のスピーチの間、「アメリカ」という単語は一度も出ていない。スピーチを終えて自分の席へ戻る。誰一人言葉を発さない。一番後ろの席で聞いていた初老の先生が、ゆっくりと教室の前へ歩いてゆき、静まり返っている生徒に質問する。

「アキのスピーチに対して何か意見はないかな」

すると、一番前の右端に座っていた二十代後半の男子生徒が、笑みを浮かべながら手を

挙げた。

「あの原爆（長崎に落とされた原爆）は必要だった」

その日の自分のスピーチに対する意見は後にも先にもそれだけだった。先生がその場のムードを取り繕う言葉を二言、三言言つて、授業が終了した。

もう一つの経験は、これも短大時代に政治学のクラスで起きた。日系アメリカ人のクラスメートが選んだプレゼンテーションのトピックは、核兵器。そして、彼のポイントは「核兵器がいかに重要で、必要であるか」ということだった。彼は、クラスでもかなり成績がよく、この日のレポートも、しっかりと準備してあった。核兵器保有国や、国際条約のこ
とまで、よく調べてあった。

「インドやパキスタンといった、危険極まりない国が調印していない核拡散防止条約など、はつきり言つて無意味で、アメリカ合衆国が加盟する価値は無い。ロシアや中国といった大国も当然核武装している。むしろ、自国防衛のために、核兵器をもつと重要視すべきだ。核兵器を使う必要は無くても、他国に負けないだけの開発と備えは必要である。（二〇〇〇

年当時)」

彼のスピーチは「みんながやっているのに、自分もやってどが悪いの？」という幼稚なへ理屈のように聞こえ、私は不快を感じた。しかし、彼が言っていることも確かに一理ある。他の大国がどんどん核による軍備を整える様を、ただ指をくわえて見ているだけで、いつか、侵略されても太刀打ちができないようなことになれば、それこそ何のために調印した条約なのかということになる。

核兵器の保有が、効果的な国家防衛手段だとはちとも思わないが、調印を拒否している大国がある以上、そういった国に対等であるためには核兵器は必要なのかもしれない。彼のスピーチは、論理的で説得力があつた。他のクラスメートも彼の意見に納得し、殆どが同意し、残りの数人が中間の立場をとっている。自分の内心は、意見に納得はしているものの、やはり核兵器の保有には不賛成という立場から、かなり混乱していた。彼の意見は、終わりのなき核兵器開発に拍車をかけるだけだと思つてはいるのに、なかなか切り出せない。何かを言いたいような、でも言うのを凄く恐れているような、葛藤でのどが渇く。

賛成派が盛り上がりを見せ、クラスの終了時間を少し回ったところで、最後に、教授が

質問を私に振った。

「それじゃあ最後に、アキの意見も聞いてみよう。被爆国から来た彼女は、もしかしたら違う意見を持っているかもしれないからね」

クラス全員が、一斉にこちらを振り向く。スピーチの彼だけは、私から視線を逸らしたまま前を向いていた。発言するのが苦痛だ。焦る。クラス中の視線を全身に感じながら、私は先生の目を見ながら、一言だけ言った。

「彼の言っていることは理解できるけど、私は彼の意見に反対です」

先生が腕時計をチラッとみて、

「同じ日系人でも、日本で生まれ育ったアキと、アメリカ生まれのブレットでは考え方が違っていて面白いね」

とテンポよく解説を入れ、その日の授業が終了した。

もう少し何かを言うべきだったのかもしれないが、あの時の自分にはあれが精一杯だったと思う。

スピーチのクラスで起きた出来事を話し、原爆について話すのが容易ではないことを説明しておきながら、しかし、自分がどうしてもこのプロジェクトに参加したかった理由を続けた。「十七歳の時に長崎で聞いた被爆体験談は衝撃的だった。スピーチをされた被爆者の方は、たった一つの原爆と戦争によって家族全員を失った。それでも彼女は一人で生きることを選び、そして、自身のつらい体験談を戦後ずっと語ってこられた。もし爆撃で家族全員を失ったら、みんなだったらどうしますか？ 私だったら、死を選ぶかもしれない。そして、あの講演者の方のように、核兵器廃絶のために自分の家族の〈死〉について語り続けているような勇氣は、無いと思う。だから、淡々と体験談を話す講演者に、私は心を打たれたし、彼女の勇氣に驚きもした。もう一度言うが、アメリカで原爆について語ることは、誰にとっても簡単なことではないと思う。自分にとっても決して簡単なことではない。でも、被爆者のあの凄い勇氣を見た以上、私は知らん顔はしてられない。次は、自分がほんの少しだけ勇氣を見せる番だと思う。だから、自分は今ここにいる」

正直な話

新学期が始まってまだ一週間。学期初めは各教科の課題もさほどきつくはない。週末には遊びに出かけたり、芝居を観に行く時間も多少ある。四週目ぐらいから、雪だるま方式が増えてくる課題を見越して、本の先読みなどをしておくのもこの時期である。時間に余裕があつたにも関わらず、ただ面倒くさいと言う理由から、弁当作りの手を抜いていた私は、出会ってから間もなく仲良くなった韓国人のデボラと、よくカフェテリアで昼食を共にしていた。

食堂には、異なつた六つのチェーン店が入っている。ハンバーガーのカールズJr、サンドイッチのサブウェイ、中華のライスガーデン、メキシカンのガーデンブリート、軽和食のキツカ寿司、そして、イタリアンのシカゴ&シカゴ。どれも、美味しくはないが、ライスガーデンとカールズJrを筆頭に、安さと速さと量の多さを売りに、まずまず繁盛していた。私はたいいてい、中華かメキシカン。デボラは、中華焼きそばとオレンジセサミチキンのコンビネーションを必ず食べていた。

オレンジセサミチキンは、唐揚げをオレンジ風味の甘いソースで絡めた、サクサクと美味しい、超高カロリーの、一度食べるとしばらくヤミツキになる危険な食べ物である。巨大なパックに、てんこ盛りになった中華は、日本の基準で言う二人前を優に超えている。それをぺろっと平らげて、ケロツとしていられるのは、胃袋がアメリカナイズしたからか、私たちが単なる腹ペコ貧乏学生だったからか、おそらくその両方だったと思う。

ドラマ学部から、近道を通れば五分もかからないカフェテリアへ、あえて遠回りをして歩きながらデボラが言った。

「この前、プロジェクトの参加動機を聞かれたときのことで、どうしてもアキに聞いておきたかったんだけど……」

二人並んで黙々と前を向いて歩きながらデボラが話している。

「私が、動機として、日韓関係のことに触れたことをどう思った？ アキやイズミに対して攻撃的に聞こえることや、不愉快にさせるようなことを言ったとしたら悪かったなと思って。日本のことを悪く言うつもりも、日本人のアキやイズミを傷つけるようなことを言うつもりも全くないけど、テーマがテーマだけに、言葉を選ばないと誤解を生みそうで

……。だから、もし私の発言が攻撃的に聞こえたら、正直に言ってほしい。本当に、そういうつもりはないから」

私は、デボラの参加動機を思い返す。確かに彼女は、長崎原爆という日本が犠牲者となっているテーマで、しかし、第二次世界大戦の犠牲者は日本だけではないということや、戦後から現在に至るまで、日韓の間にあった軋轢などについて、もっと話し合ったり、学んだりしたいから参加したと語っていた。もちろん具体的に、戦時下での日本兵の、韓国に対する非情な行いや、最近では、ワールドカップサッカー共同開催において、どちらの国で決勝戦を行うかをもめるなど、日本と韓国の間には、何かとスツキリしないことが多いとも指摘していた。

話す言葉にやや熱がこもっていたことを思い出しながら、今さっきデボラが言った言葉の意味が私にはよく分かる。自分が傷ついたという意味ではなくて、自分もまた、彼女と同じように、自分の動機内容が、アメリカ人の生徒に対して攻撃的ではなかったかと、心配していたからだ。

「攻撃的だなんて、全然そういう風には受け取らなかった。むしろ、日韓のことやデボラ

のそれに対する気持ちを正直に話してくれたほうが自分としては嬉しいし、そうでないとプロジェクトに参加した意味がないよ。この間の参加理由にしても、事実をはっきり言ってくれたことに感謝してるよ。で、それよりさあ、私の発言どう思った？アメリカ人の生徒を傷つけたかなあ」

人の心配事をよそに、自分に話を振ってみると、

「別にアメリカが良いとか悪いとか言ったわけじゃないし、アキの口調から攻撃的な印象は全く受けなかったから、全然気にすることはないよ。あれで、みんなが傷ついたなら、それこそ言う言葉がなくなってしまうよ」

と、笑顔ながら真剣な口調でデボラは言った。

お腹のすき具合に伴って、歩調が少し速まっている。無言で歩きながら、さつき自分がデボラに言った「正直に話してほしい」という言葉が少し引っかかっていた。

正直に話すとはどういうことなのだろうか。人に言っておきながら、自分自身はどうだろう。自分が原爆について話すとき、アメリカ人に対して話す内容と、その他の国の人や日本人に対してとでは、やはり少し違ってくる。

私は、原爆投下は最悪で非道な行為だったと思っている。政治的、歴史的観点からは、原爆が単なる殺人以外にもさまざまな意味（肯定的な意味合いも含めて）を持っていることは当然認識しているが、一般市民を大量殺害したという観点からは、やはりどう考えても非道な行為だったと思う。しかし、アメリカ人の友人や先生に、「あれはアメリカが犯した非道な行為でした」と、面と向かつては言えない。正直、そんなことは言いたくない。だから言わない。アメリカ人が、

「アメリカは原爆で多くの日本人を苦しめてしまったね」と、私に言えば、

「まあ、あれは確かに悲しい出来事だったけど、パールハーバーで先にきつかけを作った日本の、自業自得とも言えるから」

と、適当なことを言っている。

事実、最近の書物によれば、太平洋戦争勃発のきつかけを先に作ったのが、日本だったのかどうかという信憑性さえいまいで、実は参戦前のアメリカは、日本への経済制裁や日本の中国撤退要求をするなど、あの手この手で、参戦するきつかけを待っていたという説もある。パールハーバーを攻撃させることによって、アメリカは、対「日独伊」の戦争

を始める正当な理由と国民の同意を得たとも言われている。しかし、そうであるにも関わらず、今、目の前にいるアメリカ人に対して、自分が〈正直〉に話すとしたら、やはりこんな風になってしまうのだと思う。

多民族国家のアメリカにいと、こういう場面にたびたび遭遇する。境遇や文化的背景の異なった人たちと共にいる時、自分の〈正直な話〉は、同じ境遇の人たちと暮らしている時より、ずっと複雑になる。デボラの心の根底には、もしかしたら日本人に対する、恨みや憎しみがあつたのかもしれない。韓国人の固定観念として、「酷いことをした日本人」が彼女の頭の片隅にはあつたであろう。しかし、日本人の私を前に、彼女は、「日本人は最低だ」とは正直なところ言いたくなかつたのだと思う。

〈正直〉という言葉を聞くたびに思い出す話が一つある。高校時代の古典の授業で聞いた余談で、孔子の論語のひとつである。

昔、中国の楚という国の葉公という王が、自分の国には大変正直な若者がいると自慢し

た。その若者には父親がいたが、ある日、その父親が村で羊を盗んできた。村の役人がやってきて、息子に

「お前の父がやったのか」と聞くと、

その若者は、

「はい。私の父がやりました」と正直に答えた。

葉公の話を聴き終えた孔子は、

「なるほど。しかし、私の村の正直者は少し違う」と、同じような親子の話を始めた。同じように役人がやってきて息子に、

「羊を盗んだのは、お前の父か」と聞くと、その若者は、

「いいえ、私の父は盗んではない」と、父親をかばって嘘をついた。

孔子は言う。

「そこに人間の本当の正直さがある。父は子のために隠し、子は父のために隠す」
「直きこと其の中にあり」

私たちの爆発

デボラとは仲良くなるにつれて、昼食のおしゃべりタイムがどんどん長引いてゆき、しかしそのおかげで、たくさんのことを学んだ。他の仲間たちにしても同じで、クリフの「お互いについてよく知り合うことから始めていく」という基本方針からも、私たちは、プロジェクトの内外を問わず、お互いの交流を深めていった。十週間あったプロジェクトの期間のうち、初めの三週間を殆ど学習タイムに費やした。日本を初め、メンバーの出身国の文化について学んだり、戦争や原爆に関する事実を本やビデオで学習して、よく話し合った。

まず、日本の文化については、専門家のイズミがついていたため、ことがスムーズに運んだ。伝統文化にも、現代文化にもよく精通している。たまに、自分が同じ日本人であることを忘れて聞き入ってしまうほど、彼女は日本文化の説明が上手い。加えて、謎の人物クリフも、それはそれはよく日本のことを知っている。ある時などは、日本の地図を持ってきて、日本地理と、地域産物や産業のことを細かく説明していた。

地理の話が拡大して、

「イズミの出身地は確か東京だけど、アキはどこ出身だったっけ？」

と、クリフが私に聞いた。アメリカへ来て以来、実に多くの人に出身地を聞かれたが、答えるのはいつも億劫だ。三重県を知っている人など会ったことがない。日本人でさえ、「ええっと……、それって、真ん中のほうの県だったよねえ」と自信なさげだったりするのだから。真ん中のほうの県、って、何だそれは！

ことアメリカ人に対しては、もう、「三重の津」と答えるのをとっくの昔に諦めて、名古屋とか京都と言うようにしている。それでも分からなければ、大阪と言い、それでも知らなければ、

「あのー、君ねえ、日本には東京以外にも街があるって、知ってた？」

と聞き返すことにしている。

アジア人種以外のアメリカ人で、アジアについて、日本について、知らない人は、本当に全く何も知らない。アジア系の学生数が全学生の半数を上回るアーバイン校の院生でも、アメリカが半世紀ほど前にソ連と激しく戦闘を繰り返していた戦地、韓国がどこにあるの

かを知らなかったりする。これを筆頭に、何人かのアメリカ人は、日本では今でもゲイシヤが舞い、サムライが走り回っていると思っっている。こういう人たちに現在の日本を説明する時は先ず、

「日本にもマクドナルドがあるって知ってた？」と聞くと、

「マジで？」と仰天する。

「じゃあ聞くけど、君の乗ってるトヨタやホンダはどこから来たと思うの？」と聞くと、

「ああ、そう言われてみると、確かに日本車だ」と納得し、

「信じられないなあ、サムライがハンバーガーを食べて車を運転しているなんて……」

と相変わらすボケ続ける。そして私は、ニコやかに、

「そうだよ。サムライ達はとりわけビッグマックが大好きで、ゲイシヤ達はいつもスタバでたむろしてる」

と親切に教えてあげる。

今日は地図があるから心強い。津を紹介するチャンスだ。

「私の出身地は、三重県の津……、たぶん誰も知らないと思うけど……、」といいながら地図で津を探そうとした。

が、「無い！津がない！津が地図に載ってない！一応これでも県都なのに」

焦って、一瞬、「えっと、私の出身地は名古屋です」と言ってやろうと思ったが、それではあんまりだ。だいたい名古屋は、県外ではないか！もう一度よく地図を見ると、ノミみたいな小さい字で三重県内に何かが書いてある。

あつ、伊勢だ！

だから私は、

「はい、私の出身地は、ここ、伊勢です！」と、ISEとちいちゃく書かれた地図上を指差して堂々と嘘をついた。するとクリフが、

「ああ、パールで有名な……」と即答した。伊勢と聞いて、真珠と言う単語が口を付いて出てくるアメリカ人は初めてだ。感動した。これ以外にも、長崎のカステラを振舞って、その由来を説明したり、とにかく日本を知っている。

イズミはというと、着付けの仕方や、日本舞踊なども披露していた。キチツと着こなした浴衣姿で登場すると、予備の浴衣を他の生徒に手際よく着付けていく。

「後ろ襟を広げると、ほら、背筋が見えるでしょ。だから広げれば広げるほどセクシーなの。芸者さんとかはかなり広げて色気を出して、男性を魅了します」

実演しながら説明している。みんなは、

「おおー」

といった感じで見入っている。

「そして、脱ぐ時は、ほら、回れ回れ！」

どんとどんと帯がほどけていく様子を息を吞んで見ていると、ジョンがポツリと言った。

「恋に落ちたシェークスピアだ」

シェークスピアの、情熱的で、ロマンチックな愛を描いた映画の一場面に、彼が、恋人の胸にまかれたさらしを解いていくシーンがあった。映画の中のラブシーンを想像してますます興奮した私たちは、目をギンギン輝かせながら日本の文化を勉強した。クリフが、我々の学習意欲にさらに拍車をかける。

「日本の家屋は小さいため、狭い家の中で性生活を保っていくのは大変です。そこでできたのが、ラブホテル。セックス専用のホテルは、画期的な日本の文化です」

「おぉー」

みんなが感動している。こういう話題になると必ず張り切りだす。スケベ根性は万国共通だ。

この他にもイズミは、日本のファッションや、私たちが高校生の頃かなり話題になっていた援助交際などについての情報も提供していた。お茶や花見といった、いわゆる外人向けの日本伝統文化情報よりも、むしろ日本の現代内部事情を説明したため、その事が新鮮だったのか、みんなとても驚いていた。特に、若者のファッション熱や、ファッションへの投資金額には度肝を抜かれている様子だった。ジーンズとTシャツ以外学校へ着て行ったこともなかった私は、他の生徒に混じって、一緒に驚いたりしてみた。

日本情報が、不況や少年犯罪などの暗い話題に差し掛かってきたとき、「話が暗くなってきたけど、日本にも素晴らしいものがたくさんある」

と、盛り上げてくれたのは、日本へ旅行経験のある、ジニーだった。

旅館のお風呂、ふかふかの布団、新幹線から見た富士山、着心地のよい浴衣、美味で

芸術的な見栄えのする日本料理、接待上手の女将さんなど……。

「私なんか、ほんの一部のいいところだけしか見ていないんだろうけど、本当にいい思い出になった」と話している。

とりわけ驚いたのは、日本の缶コーヒーだったそう。日本へ行ったことのある他のアメリカ人にも言われたことがあるが、自動販売機の缶コーヒーは彼らにとつてセンサーシヨナルなのだそう。そういわれてみると、アメリカには、コーヒー（自販機）も、紅茶も、ポタージュもない。そもそも、温かい缶の出てくる自動販売機なんて見たことがない。

「缶の中には、もうミルクとか砂糖とかが入っていて、ちょうどいい頃合に温まって出してくるの」

と、ジニーは日本のすばらしさをみんなに紹介してくれた。私は、コーヒー一つで、ちよっぴり誇らしげな気分になり、ジニーが日本を素敵な国だと思ってくれていることが率直に嬉しかった。

日本以外の文化学習も楽しかった。ディアナとリリアンが、ラテン系アメリカ人という

ことで、当然ながら、いくつかのラテンダンスをみんなで踊った。彼女たち二人の腰の振り方は、しなやかで見事だ。体がコチコチの私が、ああいふ風に踊れるようになるにはあと百年ほど練習が必要かと思う。

しかし、腰が振れようが振れまいが、踊れようが踊れまいが、とにかく楽しみさえすればいいのが、ラテンダンスのいいところ。私たちのメンバーの中で、ダンスと聞いて乗ってこない者はいない。キャーキャー、ワーワー、踊りだしたらとまらない。この踊り熱が文化学習タイム以外にまで飛び火して、準備運動までが、ダンスになってしまったほどだ。誰か彼かが、CDを持ってきては、リハーサルの初めに、みんなで好き勝手に踊りまくった。

そんな中、デボラは韓国の伝統の踊りと歌を私たちに紹介してくれた。教会で幼い頃から歌い続けてきたデボラは美声で、手初めに、ある歌を歌って聴かせてくれた。「韓国の伝統ソングです」とだけ言うと、ニヤニヤしながら歌い始めた。すこしエロっぽい声色で、繊細に、色っぽく体をゆすりながら、美しく歌っている。こつちにまで感情が伝わってきて、みんなからも笑みが漏れる。歌い終わった時誰かが質問した。

「この歌は、どんなことを言っているの？　どんな時に歌うの？　祭りとかの時？　伝統的というからには子供の頃からみんなこの歌を覚えて歌い始めるのかなあ？」

すると、デボラが笑いながら答えた。

「この歌は大人の愛の歌。少しお酒の入った恋人同士が、『あなたが私に触れました、あーん』『私もあなたに触れますわ、キヤー』みたいにじゃれあっている、繊細な男女のふれあいを歌った歌。有名な歌だけど、まあ、あまり子供向けではないよね」

「ほおー」

みんな納得したり関心したりしている。私はみんなの顔を見渡した。なんともまあ、みんなの嬉しそうな顔！　つられてニヤケた自分の顔が、なかなか元に戻らない。

文化学習は楽しい。アレックスのお父さんがアレックスの幼少時代に歌って聴かせたルーマニアの民謡は、彼自身も歌の意味は分からないと言ったが、彼の体の中に刻み込まれた音とリズムが、国境を越えて私たちの心に響く。ふっと思いついて、つい口ずさみだくなるような歌だ。みんなのリクエストに答えて、アレックスは、最後の発表まで、この

歌を何度となく歌い続けることになる。

そして、そのリズムに合わせて、私たちの体が勝手に振り付けを始めた。回を追う毎に、無意識に、また自発的に形成されていった振りが、いつの間にか私たちの文化となる。とてもシンプルな振りには、かえって愛着が湧くのだ。伝統文化交流の中に、新しいものが生まれるチャンスがある。ちよつとしたことが、私たちの中に潜在した創造力を刺激する。

学習タイムに学ぶのは、楽しく共有できる文化だけではない。互いの国が共有してきた暗い歴史もまた学ばなければいけない。私たちは、冬休み中に読むように指示されていた原爆に関する二冊の本をもとに、その他、各々がリサーチした情報を持ち寄り、そのことを話し合った。一つ目の本は、原爆が投下された政治的背景や、原子爆弾の科学的な説明、そして、原爆の被害状況や統計を記したものだった。

白黒の写真が多く入っている。写真の人物は、ルーズベルト大統領や、昭和天皇、マッカーサー大佐に、アインシュタインなどが含まれ、その他は、アメリカ兵や投下される前に撮られた原爆の写真などもある。私が、原爆記念館で見たような写真も数多く挿入されている

た。壊れた家屋、不毛と化した土地、焼け爛れた人々。投下時の被害拡大の様子を図式化したものもある。そして、表紙にはもちろんきのこ雲の写真。白黒の本やビデオから学ぶ事実は、確かに重要だ。日本の歴史の教科書で既に学んだこととはいえ、プロジェクトを進める上で、こうして再確認することは大切だったと思う。

しかし、白黒学習というものはどこか、〈歴史の一部〉や、〈過去の話〉という印象が拭えない。自分の想像力の中で、白黒の画像や映像は、固定された一つの印象として残っていく。そして、それら一つ一つの印象に対して感想を持つことは当然ある。「恐い」とか「悲しい」、「嬉しい」といった感じの感想だ。しかし、自分が客観的にしか見ることのないそれら印象の中では、登場人物に魂が宿ることはない。動きが殆どなく、感情がない。だから、私は、白黒の人物の感情を具体的に感じることがないのである。

以前、スピルバーグ監督の作った、ナチスドイツとユダヤ人を写實的に描いた映画、『シンドラーのリスト』を観た時もそうだった。白黒の映像が、まるで、その当時に実際に撮影されたものであるかのように、ナチス支配下の状況を、生々しく映し出していた。映画の中のシーンが、今もなお、鮮烈な印象として、自分の記憶に残る。

貨物列車にすし詰めにされ、運ばれていく人、ゲーム感覚で次々と射殺されていく男たち、ぼつとん便所の中に隠れる子供たち、そしてシンドラーの工場に引き取られ命拾いする職人たち。そして、それらそれぞれの印象に、自分は、怒りと恐怖と安堵を感じた。

しかし、私には、映画を観た当初も今も、いまいち登場人物たちの感情が分からないし、シーンの中の状況を、主観的に体感することもないのだ。白黒の歴史的映像は写実的で具象的ではあっても、自分にとってはどこか客観的に捕らえられた無機質の印象として残っている。

その点、白黒映像を伴わない〈話〉は、確かに抽象的ではあるが、主観的にイメージを捕える機会を与える。だから、クリフの、身振り手振りを加えた爆発の話は、私に、爆発の生々しいイメージを想像させ、さらに私はそれを自分のイメージの中で体感した。

「原爆は、落ちた瞬間にまず爆発し、その爆風が全ての建物や人をなぎ倒した。そして、今度はきのこ雲が、瞬時にして全ての人と瓦礫を中心に向かって吸い上げた。この二段階構成によって、被害が拡大したのです」

真剣な眼差しで、瓦礫が吸い上げられた様子を実演している。

「ほらこんな風に、掃除機みたいに。しかも一瞬で凄く強力な吸引力で」

多くの人が、瓦礫の山にまみれて中心へ引き寄せられていく姿が、脳裏を過ぎる。クリフが勢いよく口から息を吸い込み、「スッ」と空気が鋭い音を立てる。同時に、イメージの中で、巨大な木片や壊れたコンクリートの破片が自分に向かって猛スピードで飛んできた。破片が、周りの人たちの顔を打つ。

「痛っ！」

以前、短大のソフトボール部の練習で、チーム一の剛速球を投げるチームメートの球が自分のグローブを突き抜けて右目に直撃した時の、頭の芯に響くような振動が鮮烈に蘇る。

「痛い！」

頭にジーンとひびき、めまいがする。クリフの話の途中、私は思わず顔をしかめた。

クリフの話に加え、さらに私に主観的イメージを与えたものが、二冊目の課題本「Voice from Hiroshima and Nagasaki」被爆者の実際の声を集めた本である。作文、俳句、短歌、詩の形式の中に、被爆者のさまざまな思いや、体験談が綴られている。長崎で聞いたスピーチと似たようなものもたくさんある。そして、死体焼きの話も多い。メンバーそれぞれが、自身

にとつて印象深かった作品を紹介しあい、それについて話し合う。筆者の視点から書かれた話は、メンバー一人一人の頭にはなく心の中に複雑に納められていったはずだ。普段はおしゃべり大好きみんなが、言葉少なに、神妙な顔つきでディスカッションを続けていた。

その時、さきほどひざの上のノートに目を落としていたウィリアムが、どこかの記事から見つけてきたあるフレーズを、絶妙のタイミングで紹介した。

「僕が以前見つけたあるフレーズに『多くの死は統計であり、一つの死は悲劇である』というのがあった」

シーンと静まり返ったホールの中で、私たちの大半がウィリアムの言葉にうなずいた。ここに、主観と客観のはっきりとした境界線がある。そしてこの時こそが、私たちがプロジェクトの中で成し遂げようとしていることが、初めて具体的に見え始めた瞬間でもあった。

プロジェクトの目的は、統計を学習することではない。一つの悲劇と向き合うことである。「Voices from Hiroshima and Nagasaki」は、その後、プロジェクトの構成の主軸となっていた。

学習期間には、日本の原爆を初め、テロや人種問題に関する話題も多く取り上げられた。

多国籍、多人種グループの中では、一つの議題に対して実にさまざまな視点がある。そして、異なる視点には、当然ながら異なる感情が伴う。誰一人として、口論なんてしたくない。メンバーの誰をも傷つけない。しかし、事実や自分の意見をはっきりと周りに伝えることの重要性も理解している。自分の発する言葉一つ一つに神経を使い、言えずじまいになった思いが、心の奥に重く蓄積されていく。

二週目の週末に、ロス郊外で行われた「能と狂言」を、デボラと一緒に観に行った時、お互い疲れきった顔でこんなことを話した。

幕間にも立つのがおつくうで、観客席に腰を下ろしたまま、私が言う。

「今学期は、充実はしてるけど、ほんとにきついよ」

「ああ、分かるわ。とりわけ他の教科を頑張つてやってるって感じはないのね。この疲れは全部プロジェクトから来てるのだと思う」

「そう。なんかいつも、プロジェクトのことで頭が一杯で、他のことに集中できなくて。こんなに時間と神経を使う四単位は初めてだね」

「あれは四単位じゃないよ。私には十単位ぐらいの重みがある。プロジェクト以外のクラ

スの成績が心配になってきたよ。あんまりにもほったらかしすぎで」

成績が一番どうにでもなるプロジェクトに、どんどん時間とエネルギー費やして……。ほんとに……ヤバイね」

「私なんか、彼氏と会ってるときも、最近はその話題しかしてない。ハッと気付くと、自分ばかり一方的にプロジェクトのことをしゃべり続けているから、彼は退屈だろうねえ。でもまあ、彼、優しいから大丈夫だけ」と、デボラが微笑む。

こういう時に聞く他人の幸せ恋愛話は、私の疲労を増進させ、体内で凝結し始めた血が、肩こり、目の痛み、および頭痛を併発させる。微妙に引きつった笑みを浮かべながら、「疲れたとか言って、この幸せ者！」と、私はデボラの肩を突き飛ばした。

その次の週末のマーチン・ルーサー・キングJr牧師を記念した三連休も、私は全く他の課題が手につかず、家の机、図書館、カフェ、公園、と場所を変えただけで、結局一ページも進まなかった教科書を凝視したまま、ひたすら「長崎レイン」のことを考え続けたのだった。それくらい、私たちはこのプロジェクトに神経を使い、時にかんりのフラストレーションを感じていた。

地盤と地盤の間の歪みが何万年もかけて進行し、いつかこらえきれなくなつてはじけた時、大地震は起こる。これは地学の話ではない。私たちの話だ。原爆の被害について話を進めてきた、三週目の金曜の午後、デイスカッションの中に一瞬の沈黙があつてから、デボラの口から、震えた声が堰を切つてあふれだした。

「私はもう分からない。何がなんだか分からない。みんな、日本の被爆者はかわいそうだとか、長崎の原爆は最悪だったとか、そりゃ私だつて、そんなことくらいは分かつてるよ。でも日本が日本がつて、じゃあ私の家族はどうなるの。日本人に苦しめられた多くの韓国人はどうなるの！」

いつの間にか、私たちの円座が、楕円形に形をゆがめていて、自分の左四人目ぐらいに座つているデボラの顔は、自分の位置からは見えない。加えて自分は、デボラのいる方を見ようとすらしていない。私は腕組みのまま、床の木目を凝視する。古い床は、木目の部分のニスをはげて、ところどころ灰色になっている。デボラが泣いている。震えている。声が裏返り、鼻水をすすする音が合間合間に聞こえてくる。さつきから、自分は息をしていない。

「私の祖母と叔母は、原爆が落ちる前、日本軍に捕えられて監獄に収容されていた。二人の処刑は他の捕虜と共に、原爆が落ちた次の日に予定されていたから、もしあの日、原爆が投下されていなかったら、私の祖母も叔母も日本兵に殺されていた。そして、自分は今日この場にいることはできなかった。日本に落ちた原爆が最悪なら、じゃあ、その代わりに私の家族が死ねばよかったってわけ？ 私は生まれてこなければよかったってわけ？ 日本の被爆者はかわいそうかもしれないけど、私は家族を日本に殺されかけたから、だから原爆がよかったとか悪かったとか、もう分からない。自分でも混乱して何がなんだか分からない！」

……沈黙。みんなはこの時何を思っていたのだろうか。デボラのしゃくり上げる声と、鼻水の音だけが時折静寂を破る。静かに、穏やかに、そして慎重に、クリフが口を開いた。「話してくれて、ありがとう」

そして、十分ほどの休憩に入った。

数人を残して、メンバーの殆どが外の空気を吸いにホールから出て行く。みんなに言葉はまだない。私は腕組みを解き、やはり息をするタイミングが上手くつかめないまま、相

変わらず床にボーっと視線を落として座っていた。私の椅子の後ろから、クリフはゆっくりと静かに近付いてくると、さつきデボラに声をかけたのと同じような落ち着いた口調で、「今日、この場にいてくれてありがとう」とささやき、私の右肩を、そっとたたいて去っていった。

友達として、一言デボラに言いたい。

「話してくれて、ありがとう。おばあさんと叔母さんが助かって本当によかった。アメリカで、デボラと出会えて、自分は本当に幸運だったと思っているから」

そして、スピーチをされた被爆者の方にも改めて一言。

「原爆によって御家族を失われたことを、非常に残念に思います。核兵器が世界からなくなることを祈っています」

これ以上、言いたい言葉が見つからない。筋を通せない自分を普通だと思う。

私も、あなたも、罪びとか？

デボラが、具体的に「日本人」による朝鮮半島での悪行を指摘して以来、一つの民族が歴史的に背負っていく責任について、自分は以前よりも敏感になっていた。

日本民族……そしてその責任。

どの人間にもアイデンティティーがある。人は、自分の好みに関係なく、さまざまなカテゴリーで分類される。私なら、先ず、日本人。アジア人種、三女（末っ子）、二十代、留学生、大学生、お酒は飲むがタバコはすわない、カリフォルニア在住、ドラマ学部、スポーツ愛好家、算数ができない、音痴、ソフト部のポジションはライトかセカンド以外やらせてもらえない、三重県出身、大食い。その他、数え切れないほどのカテゴリーに属している。そして、それぞれのカテゴリーの傘の下には、いろいろな事実や、一般世論や、特定の人からの特定の印象というものが数多くぶら下がっている。

例えば、三女（末っ子）Ⅱ甘えん坊で、わがまま。二十代Ⅱいい年頃。留学生Ⅱよそ者？

よく勉強する？ なにを言っているのか分からない？ 大学生Ⅱ自由。お酒は飲むがタバコはダメⅡまあまあ特にどうってことない。カリフォルニア在住Ⅱ遊び人？ ドラマ学部Ⅱ学校内の変人。スポーツ愛好家Ⅱさわやか、でも女らしくはない。算数ができないⅡバカ。音痴Ⅱ単なる公害。ソフト部のポジションはライトかセカンドⅡ肩が弱い。三重県出身Ⅱしよばい。大食いⅡ女のくせにみつともない！ 元気がよくてよい！ アメリカ生活が長い！ などなど。

これらは、私が以前誰かから定義された自分像や、周りの人の態度から「自分って、多分こう思われてるんだろうなあ」と感じたことの一例である。事実もあるが、当たっていないこともある。こういう風に、人はカテゴライズされ、自分の意思とは関係なくそれぞれのアイデンティティーを持つ。

多人種、多民族、多宗教国家で、自分が外国人という立場にあるアメリカでは、特に、自分をアジア人種、日本民族、無宗教者と、改めて認識させられる。肌の色、民族性、文化といった要素は、自分のIDの一部として語られることも多い。

アメリカへ来た当初、台湾人の男の子に、

「アキ、周りの男たちには気をつけたほうがいい。日本人の女の子は、こっちではイエローキャブって呼ばれてるから」

と、突然忠告され、

「何？」と、聞き返すと、

「簡単に乗り降りできる黄色い乗り物。つまり、性的に便利な黄色い道具みたいなもの」と、彼ははっきりと教えてくれた。

日本の芸者を、遊郭の女か何かと取り違えて定着させた昔のアメリカ映画の印象や、日本の援助交際の印象などがイエロー（黄色人種）の肌に掛けてあるらしい。うまいが座布団はあげられない。

その他、アジア人⇨勤勉。日本人⇨頭がよくて、数学ができる。

ちよつと待った！ 私は、数学はおろか算数もできない！ 頭の悪さは、「日本人」である母からの、れっきとした遺伝だ！

アジアの舞台を学ぶクラスで、台湾人で在米十年以上の助教授が、日本の歌舞伎や能を紹介した際に、その前置きとして日本について紹介した。

「日本、日本人と聞いて先ず何を想像しますか？ 先ずは定義として、日本は昔から他国に侵入し、広大な領地をのっとり、地元民に不条理なことや過酷な労働を押し付けましたね。住民を苦しめた挙句、無差別に大量殺害して平気な顔をしていられるのは、日本の民族性です。日本人と言えば、皆さんもそうだと思いますが、やはり凶暴で野蛮な印象がありますよね。それでも、日本にだってすばらしいものはたくさんあります。それが、能であり歌舞伎なのです。ところで、アキは、日本人として何か付け足すことはありますか？ 日本の歴史を簡潔に説明するとしたら、アキならどう言う？」

私は苦笑した。

戦時中、日本人には凶暴で野蛮な人も多くいたことは聞かされている。とりわけ重要な事項として、明確にそのことを習った覚えはないが、歴史の教科書や歴史番組から、日本兵の非道な行為は少しずつは伝えられてきたと思う。しかし、例えば日本人の教授が私に、

「歴史的に見て、日本人は野蛮です」

と説明するのと、日本人以外の教授、この場合台湾人の助教授が、同じことを言うのとは、意味合いがかなり違ってくる。自分の属するカテゴリーの外側から来る意見には、より一層の重みがある。

アメリカの黒人社会にある、奴隷制度時代の名残りから来る呼び名を、彼らどうしでは日常的に使っていても、他の人種がその言葉を使った時点でそれが彼らに対して大変な侮辱となるのも、同じような例と言えよう。

外側からされる認識には、現実味がある。どこか、自分のことを定義してしまったような強制感もある。そして、外側から来る意見には、その意見を発する人間の、自分に対する個人的な感情が含まれる。

自分の民族性を、「凶暴で野蛮」と定義された私は、日本が歴史上犯してきた罪について、より現実的に考えさせられた。そして、日本人として背負うべき「罪」と「責任」を、自分の胸に突きつけられたような威圧を感じた。

歴史上の責任を誰が取るのか。自分には責任があるのか。どうやって責任を取ればいいのか。自分の属する民族が、何かをやらかすたびに、その民族の間は連帯責任をとり続けてゆくのだろうか。自分の疑問にさらに問いかけたクリフの話がある。

クリフがかれこれ三十年近く連れ添ってきた、恋人のシゲルさんのご両親を日本に訪ねたときの話である。

シゲルさん（男性）は、舞台衣装のデザイナーとして、有名な劇場や、ディズニールンなどの有名テーマパークの衣装デザインを手がけるかたわら、クリフと同じく、アーバインのデザインのクラスでも、教鞭をとっている。彼は、気さくで気取らない。クリフの生徒だった私に、まだ会ったこともないうちから電話でアドバイスをくれていた親切な人だ。トップデザイナー同士のカップルの二人は、センスがよくて仲がいい、考え方も見た目も、びっくりするほど若くてかっこいい「夫夫」といったところだ。クリフが日本通である謎が解けた。

そのシゲルさんの日本の実家で、初めてご両親に会ったとき、クリフは、

「アメリカは原爆によって多くの日本人を苦しめました。アメリカ人として、アメリカの

犯した罪を深くお詫びいたします」

と、頭を下げたそうだ。すると、シゲルさんのご両親は、

「詫びなければいけないのは私たちのほうです。パールハーバを先に攻撃したのは日本ですから……。アメリカに対して本当に申し訳ないことをしました」

と、こちらも頭を下げられ、初面会は、お互い頭の下げあいになってしまったとクリフは言った。

私たちは皆、罪びとか？

現代韓国人の思い

自分は頭を下げるべきか？デボラに対して罪を背負い続けていくことがはたして自分のとるべき道なのか？そんなことをデボラは望んでいるのだろうか？

ある休日の夕暮れに、私はもう一人の韓国人の友人、ジアとキャンパスの横のカフェで落ち合った。ジアもドラマ学部生徒で、私たちは、時々一緒に勉強したり、映画や芝居を観に行く仲だった。いつものように、ジアがアイスコーヒー、私が温かい紅茶をオーダーすると、店の表のガラスの付いたテーブルに腰を下ろした。

背中にオレンジ色の夕日を感じながら、乾いた風に身をまかせ。あくび涙でウルウルになった私の目には、左前方に座っている、両方のまゆ毛が眉間のところでつながったままの、中年男性の濃厚な顔が、少しゆがんで映っていた。さっきから、ジアは足を組んで、足の先つちよにひっ掛けたサンダルをテーブルの下でぶらぶらさせている。たわいもない

話がだらだらと続き、いつの間にかワールドカップサッカーの話題になった時、私たちの会話はヒートアップした。

二〇〇二年の一大事。それは、ワールドカップ日韓共同開催だったと言える。アメリカではサッカーはさほど人気はないが、私の周りでは、アジア人と、特にヨーロッパ人が熱を上げて観戦していた。時差の関係上、ゲームがアメリカ時間の深夜に行われていたにも関わらず、みんな徹夜でテレビに張り付いていたのだ。自国チームは当然一番びいき。次いで、友達の国のチーム。単純な私たちは、自分たちの国が勝てば称えあい、負けると慰めあった。お互いの国が対戦する時は、ちよつと気まずかったりする。私の当時のルームメートの一人が、日本と予選同組のロシア出身であったため、私は対ロシア戦の二日前に家出した。

韓国との直接対決はなかったが、シアはこの日私にこう言った。

「もちろん日本のことも応援してるよ。でも、韓国は日本にだけは絶対に負けられない。日本が準優勝なら韓国は優勝しないといけない。日本が予選通過するなら、韓国は最低でもベストエイトまで残らないといけない。とにかく、日本にだけは絶対に負けられない」

さつきまで、チューチュー吸っていたアイスコーヒーのカフェインのせいもあるだろうが、ジアの言葉にエネルギーが満ちている。怒ってはいない。むしろ顔は笑っている。

韓国が日本に敵対心を持っていることぐらいは前からそれとなく知っていたし、その背景に戦争があることも分かる。私は、ジアに、「そのサンダルどこで買ったの？」と、聞くような調子で、サラッとダイレクトに尋ねた。

「日本人って、韓国ではやっぱり相当嫌われてるの？ それって、戦争の恨みとかから来てるのかなあ。でも私にとってはやっぱり韓国は隣の国だし、韓国人の友達も多いし、実際どう思われてるのかって結構気になるよ。現に今私たち一緒にお茶なんか飲んでるわけだし」私は、紅茶の入った紙コップを左右に揺らしながら微笑む。

「正直、どう思われてるわけ？」

ジアとは付き合いが長いため、ある程度何を言ってもお互い傷つかないことを分かっている。ジアはこう言った。

「お年寄りとかは、もちろん戦争を知っているから、正直、日本を恨んでいるだろうけど、でも若い世代はどうかなあ。特に恨んでるとか言う表現はもう当てはまらないと思う。嫌

いとか恨むとかじゃなくて、単にライバル意識を持つてるだけかもね。これは中国人も同じ。中国人の友達とかと話してるときも、やっぱりみんな『日本にだけは負けたくないよね』っていう意見で一致するからね」

アイスコーヒーの氷をカラカラ振って、もう一口コーヒーを口へ含ませると、

「まあ、今の二十代、三十代は特にそうだけど、考え方は人によってまちまちな。友達によつては、例えば日本人とは表面的には付き合いをしたとしても、心は絶対に開かないって言うてる人もいるし、そういう人は当然、親も本人も、韓国人は日本人とだけは絶対結婚すべきじゃないとかって思ってるんだよね。でも、ほら、覚えてる？ 私の友達で日本人と結婚した人のこと。そういう人ももちろん一杯いて、私は実際、彼女の婚約はおめでたいことだと思ってるし。今、どんどん意見が分かれてきてる時なのかもね」

そういえば以前、ジアの友達が日本人の男性と結婚するから、その二人に、日本語でメッセージをするならどう言えいいのかと聞かれたことがあったと思い出した。ジアは、嬉しそうに、私の教えた日本語のメッセージを練習していたなど回想していると、ジアは続けた。

「でも、結局、日本が嫌いだと言ってる人も、日本のファッションや音楽が好きで、真

似したりして、日本が憧れでもあるの。これって本当に皮肉だね。日本に戦争でむちゃくちゃにされた後、アジアの中で日本だけが凄いスピードで経済大国に成長してしまつて、韓国はなかなか追いつけない。日本はやりたい放題やつて、責任を取ったかどうかともわからないうちに、美味しいところばっかり持つていったから、きっと妬まれてるんだと思う。日本は目の上のたんこぶ」

ジアは、私の目を見てあきれたような顔をした。責任という言葉が出たのを機会に、私は一度聞いてみたかった質問をジアにぶつけた。

「政治的な責任以外に、日本人なら誰もが個人として戦争責任を感じるべきだと思う？ 戦争責任って、どうやって取つていけばいいのかなあ」

うーんと考えながらジアは、

「責任を感じるとか感じないとかって、よく分かんないけどねえ……。私は個人的には、特に責任を取るべきだとは思っていないし、だいたい、どうやって責任つて取るの？ 戦争中に実際に危害を加えたり、そのことを黙認した人たち以外に、日本人という理由だけで責任を取らせるのは変な気がするね」

と、まだ少し混乱したような、どう返答していいのか分からない感じでジアは言う。

私はというと、こちらでもまた神妙な顔つきで考えながら、質問を変えた。

「じゃあー、戦争について習った時とかに、過去の事実が、現代日本人に対する反日感情に即座に結びついたりはないの？ 歴史人と現代人を切り離して考えているってこと？ ジアみたいな現代の韓国人が、日本や日本人に対してとりわけ敵対心を燃やしたり、嫌悪感を持つ時って結局はどんな時なのかなあ」

ジアは宙を見上げたまま、今度こそうーんとうなって考え込んだ。私も自分自身が聞いた質問の意味を頭の中で整理しようとしていた。無造作に紙コップを手に取ると、ぬるま湯の残りの紅茶を飲み干して、なお考え続けた。

ジアが、ぽつぽつと、まだ宙を見つめたまま口を開く。

「戦争について習ったからってすぐ、日本人全員に反感を持つたりはしなかったし、現代の日本人に、罪と責任を押し付けようとも思わないけど……」

とまで言ったところで、ああそうだと言わんばかりにこちらを振り向くと、今思い出し

たことを話し始めた。

「現在の韓国で、私たちが腹を立てる時って、日本が過去の事実を歪めて伝えたり、歴史のことを完全に無視したような態度をとった時だ！例えば、日本政府が戦中に記録された書物を公開しなかったり、教科書の中で、日本兵が朝鮮半島でやった事実をしつかりと伝えていなかったりした時に、私たちはウオーって怒るのよ。それから、韓国人に対する差別意識や軽蔑が昔の日本にあったこともきちんと伝えられるべきだよ。昔、日本で地震が起きた時に、混乱の中で韓国人が差別にあつて槍玉にあげられたつてこととか、多分日本では習ってないんじゃないのかなあ」

「ああ、それは知ってるよ」

やや語気の上がつてきたジアを遮るように私は言った。関東大震災の時に、自分たちの苦境のあてつけに、在日朝鮮人が井戸水に毒をもったとデマを流し、差別によって、いわば憂さを晴らした話は、小学校の時に習ったはずである。

「知ってるんじゃないけど」

と、ジアは、少しの驚きと納得が入り混じった表情を見せた。

日韓関係といっても、戦争のことばかりではない。ジアの言うとおり、民族的に韓国を侮辱してきたことを、日本はもつと知るべきなのかも知れない。

「じゃあついでにもう一つアキに聞くけど、日本が最初に侵略したというか、最初に韓国を侮辱した出来事が何かも知ってる？」

何だろう？ 日本は第二次世界大戦以前にも、第一次大戦、日清戦争、日露戦争など、その頃は戦争をしまくっていたし、日本の周りの国なんて侵略しまくっていたから、実際何が始めの出来事だったのかはよく分からない。

「うーん。第一次世界大戦あたりかなあ……。はっきりとは分からないけど」

あてずっぽに言うのと、ジアは、「やっぱりな」という顔で、

「違ふよ。日韓の歴史上、最初にしこりを作った出来事は、日本が韓国に侵略してきて韓国の王妃を惨殺した事件だよ。第一次世界大戦なんかよりもつと昔」
知らなかった。

「知らない」ことが現代韓国人の反日感情を逆なでするのなら、現代日本人の自分がとるべき行動はただひとつ。「知る」ことである。

日本悪い悪い話？

まず、韓国の王妃慘殺事件。日本が日清戦争に勝利した一八九四年当時、韓国には国王「高宗」と国王の最重要アドバイザーの王妃・明成皇后がいた。中国への勝利を期に、朝鮮半島統治に乗り出していた日本軍から、韓国を守るべく、賢明な指示を国王に与えていたのがこの王妃だった。王妃の意図は、日本軍と戦うことではなかったが、自国の市民を不平等な他国の支配から守ろうと努力をした人らしい。的確なアドバイスで、日本の韓国統治を妨げる王妃に業を煮やした日本は、一八九五年、深夜の宮殿に暗殺部隊を送り込み明成皇后を斬殺した後、その遺体を庭に積み上げられた薪の上で、焼き払ったそうである。

韓国人してみれば、先ず第一に、中国に勝利したからという理由で、なぜ韓国までが日本の統治下に置かれなければならないのか納得がいかなかったはずだ。ついでに、いきなり暗殺部隊を送り込まれ、国民に最も愛された王妃を斬殺され、遺体まで焼かれたとなれば、それ以上に挑発的で侮辱的なことはないであろう。例えば今、アメリカがどこか

の国に戦争で負けて（それは絶対にありえないが）、アメリカが負けたからという理由で日本までがその勝利国の統治下におかれ、日本の国民的ヒーローをいきなり焼き殺されたら、日本人として怒るはずだ。

私はこの話を、韓国からの来賓教授である、キム教授のオフィスで聞いた。

「教授」という堅苦しい感じが全くないキム教授は、失礼な言い方かもしれないが、私にとっては気のいい物知りおじさんといったところだ。教授の娘さんが私と同世代でしかも同じように留学中ということもあって、私のことも何かと気にかけてくださる。コーヒを持ってオフィスを訪ねると、いつも勉強中の手を止め、「よく来たね。さあ入って入って」と、迎え入れてくれる。

「近いうちにお話に伺います」

と約束しておきながら、課題に追われてなかなか会いに来れなかった私を、

「気にしなくてもいいよ。学生は頑張って勉強することが一番大切ですから」

と気長に遅くまで待っていてくださって、

「それより、疲れたでしょう。お腹はすいてない？」

と、目の下にくまを作ってお腹をぐるぐる言わせている私に、とっておいたベーグルなどを手渡してくれる。私はもぐもぐ口を動かしながら教授の話を聞くのだ。教授はいつもたくさんの小話を用意しておいてくれる。面白い話ばかりだ。そして毎回必ず、私の話を聞くことも忘れない。家族のことや日本のことを話す私に、いつも熱心に耳を傾ける。

「人の話を聞くのは本当に面白いし、勉強になります」

と、細い目をさらに細めてうなずくと、今度は、お勧めの本の題名や面白い記事が、あらかじめタイプされているプリントを机の引き出しから出してきて、ていちょう丁寧に私に手渡し、「忙しいだろうけど、もし時間があれば一度読んでごらん。この中には、いろんなことを知るヒントが隠されているからね」

と、一生徒へのさりげない配慮も忘れない。

教授自らの「知ろうとする」姿勢から、私は多くのことを学んだ。

教授との三回目のお話会の後、話が長引いてすっかり暗くなってしまったキャンパス内を、「危ないから」と、教授は私を自転車置き場まで送って下さった。新設された劇場と

ドラマ学部の教員室の建物の横を通り過ぎた時、教授は

「日本のことがいろいろ聞けて嬉しいよ。特に、アキが漢字の意味を解説してくれるおかげで、今まであいまいだったことがいろいろ分かってきた。まだまだ聞きたいことがたくさんあるよ」

と、謙虚なしやべり方でそう言った。

「教授と話をする、自分がいかに自分の国のことに関して無知で、しかも漢字をよく理解していないかということに気付かされます。ぼろが出て、こっちは四苦八苦ですよ。でも自分にとってもいい勉強になっていると思います」

そこまで言って私は足を止めた。並んで歩いてた教授も足を止めてこちらを振り向く。私は少しためらったような表情で、しかし教授の目を見てこう聞いた。

「もしできれば、韓国人である教授の口から、戦中の日本や日本兵のことについて少し話をしてもらえませんか？ 日韓の歴史上の関係について、一度、教授ぐらいの年代の韓国人から、実際に話を聞いてみたと思っていたので。もし機会があれば、そのことを聞かせてください」

すると教授は、視線を逸らして二、三回軽くうなずいてから、視線を戻すと、やさしく穏やかな目でこちらを見ながらこう言った。

「もしそのことを知りたいのなら、僕の家族の話をするのが一番早いかな。じゃあ今度、僕の家族の本当の体験をアキに話してあげるよ。それが一番分かりやすいと思うから」
そう言うのと、「気をつけて帰るんだよ」と、自転車にまたがった私を見送ってくれた。

次に教授のオフィスを訪れた時、前半はもっぱら日本と韓国教育システムの話題で盛り上がった。なみなみとコップに注がれた、アメリカのあまーいホットチョコレートをがぶ飲みした私は、全身に行き渡った大量の砂糖のせいで明らかにテンションが上がっていた。一時間半くらい話しただろうか、話に気をとられているうちに外はもう真っ暗。

ブラインドの向こう側から時折聞こえてくる足音も、家路を急ぐのか、テンポが速い。コップの底に少しだけ残っていた冷え切った茶色い砂糖の塊を、話の勢いで口へ入れてしまった時、そのあまりのまずさに、私はハッと我に返った。会話が途切れる。その瞬間、今日聞こうと思っていた例の話が、ふっと自分の口について出た。

「例の話、聞かせてもらってもいいですか？」

室内の温度がスツと二度ほど下がり、空気中を舞っていたほこりが静かに床の上へと落ち着いた感じがした。

教授はうなずきながら、座っていた椅子へ深く腰掛け直した。

「私の母はね、日本軍の支配下で生き残るために、私の父との不幸な結婚をせざるを得なかった人なんだよ。母の生まれ育った農村も、当時日本兵の支配下にあった。どの韓国人も日本人名を与えられ、学校では日本兵が日本語で授業を行っていた」

「どんな日本名を名乗らされていたのか、教授はご存知なのですか？」

私が瞬間的に質問をはさむ。

「知らない。自分の名前を名乗れないというのはとても屈辱なことだからね、結局私の両親も親戚も、当時強制的に名乗らされていた日本名がどんなものだったのか話そうとしなかったし、私も具体的にどういう名前だったのかは一切尋ねもしなかったよ。屈辱的な過去について語ることは、時に、自分たちをいつそう惨めな思いにさせるから。それから、学校では韓国語は禁止されていたから、一言でも話せば先生に殴られる。私の叔父は、

学校で韓国語を使ったことが先生にばれて、一緒に使った生徒と共に教壇へ引きずり出されると、日本兵に『罰だ。お互いを殴り合え』と命令された。友人を目の前に、本気で殴れないでいる少年たちに先生は『何だ！殴り方も知らないのか！じゃあ俺が教えてやる』と言ってリンチする。私の叔父はよく、顔面を殴られて、ぼこぼこに腫れ上がった顔で家に帰ってきたそうだよ」

教授が、右手を頬に当てながら「ぼこぼこになった顔」を説明する。

「母自身もちろん窮屈な生活を送っていた。そしてその頃周囲には、日本兵の性的奴隷（従軍慰安婦）に多くの若い女性が連れて行かれていたという話が、かなり現実的なうわさとなって流れ始めていた。若い女性にとつてこのうわさは脅威だったと思うよ。だから、母は日本兵の手を逃れる方法を必死になって探した。その唯一の方法が、私の父との結婚だったんだよ。既婚者には日本兵は触手を伸ばさないことを母は知っていたからね。だからある時は母は、故郷を離れ街へ出て、顔も見ることがない、しかも十四歳も年上の父と結婚した。二十歳で無力だった母に他の選択肢はなかったんだね」

教授の真剣なまなざしが、一時も私の目から離れることはない。

「そういう状況下で結ばれた両親の結婚は、ずっと不幸なまま終わっていった。だから私は子供時代に、両親の幸せそうな顔を見たことが無かったよ。幸せな結婚がどういうものなのか、私は全く知らずに成長した」

「ご両親の不幸な結婚は、教授が、生活の中でそう察してきただけなのか、それとも、教授はご両親に結婚生活が不幸かどうか、直接尋ねられたことがあるのですか？」

「その両方だ」と教授は答えた。

「赤の他人同士のような結婚生活に愛情などは無論感じられなかったし、母は、結婚後の生活について殆ど語りたがらなかった。母の人生について尋ねるといつも、幼い頃はこうだったあだったと幼少時代については語るのに、十六歳ぐらいから後の人生については、『知る必要はないよ』と、口をつぐむ。私の父はずっと以前に死んでしまったが、母はまだ生きているので、私は一度、母が記憶を失い始める前に母の結婚生活や戦時中のことについて真剣に尋ねたんだよ。どうして、あんなにも不幸せな家族生活を送らなければならなかったんだって。そうしたら母が、日本軍の占領下で、とにかく結婚して〈既婚者〉という地位を手に入れるより他、道は無かったから、あれは不幸な結婚だったし、その後は

ずっと不幸せな生活をしてきたのだと、ついに打ち開けた。私の周りでは、確かにこういう不幸な結婚が殆どだったと思う。普通の結婚生活がどんなものなのか知らずに育ったことは、私の結婚生活に大きな影響を与え、そのことが、私の娘たちにも少なからず影響を与えたと思う」

いつの間にか教授は足組みをしている。ここまで話して、教授は机の上にある、空になったコーヒークップに目をやった。教授の態度や声色の中に怒りが含まれてないことを確認しながら、私はさらに質問した。

「現代の日本人が韓国に対してできることって、何かあるんでしょうか。日韓の歴史と、日本人の責任の関係について少し教授の話を聞きたいのですが」

くるくる回る座席をひらりと窓に向けると、遠くを見つめるような目で教授は言った。

「責任ねえ。アキが責任を取る時って、どうするの？ 相手が、例えば罰金とかの具体的な責任の取り方を提示しない場合、責任ってどうやって取るか分かる？」

「分かりません」と、私ははつきり答えてこう続けた。

「だいたい歴史上の責任なんて自分が取るようなことでもないように思いますが、日本が

悪い悪いといわれた時、自分は、日本人として何か責任のようなものを追及されているような気がして、さらにその事が、戦後生まれの自分にとって、不公平であるような不愉快な気持ちになることもあるから、韓国人が日本人に今期待していることが何なのかを知りたいと思っただけです」

「歴史上の責任なんてないよ。それに、アキの言う通り、そんなものは取れないよ。でもね、日本人が韓国人の信用を回復していくのに一番重要なことは、やはり、過去の事実にもう少し耳を傾けて、その事実を認めていくことだろうね。まあ、言葉を変えれば事実を認めるってことが、実は責任を取ることなのかも知れないけどね」

とりあえず聞くぐらいなら自分にもできるかな……と漠然と考えながら、しかしながら、これから先「日本が悪い悪い話」を延々と聞き続けていかなければいけない事実とうんざりしながら、最後の質問をした。

「韓国人は日本を許せるのでしょうか」

教授はこう答えた。

「We can forgive, but we can't forget. We must not forget」(許すことはできても、絶対に忘れ

ることはできない、絶対に忘れてはならない)

当の加害者の日本人が歴史を忘れてしまったら、被害者は許すことすらできなくなってしまうのではないだろうか。

日韓の戦争の歴史について、いろいろな憶測や考えがある。政府が謝ったとか謝らなかったとか、何が事実で何がそうでないのかとか、誰が責任を取るべきだとかとるべきでないとか、私にはそのあたりのことはよく分からないし、正しい答えを判断する力もない。統計や一般論や政治論は、自分にとっては、あまり大きな意味をもたない。

私の信じる答えは語り手の目の中にある。デボラの、涙でくしゃくしゃになった目や、教授の真剣なまなざしの中にある。私は、こうして親切でいてくれる教授の話を聞きながら、今、自分の心の内にわいてくる思いを大切にしたい。

知らずに通り過ぎてはいけない話がある。忘れてはいけない話がある。

性的奴隷

プロジェクトも折り返し地点の五週目を迎えた頃、私たちは土台作りとして行ってきた「学習」や「議論」といったプロセスを、徐々に「創造」へと切り替え始めていた。土台作りの中で得たものは知識だけではない。その中で培われたチームワークやメンバー各々の性格や特性の把握が、新たに何かを生み出すとする時ものをいうのだ。進む方向を定めたアメンバーの中で異色異形の十五の細胞が活動を活発化する。そして、私たちのエネルギーを確実に創造性へと導いてゆく三人のディレクターたち。

ジェフの始めた俳句サークルは、私たちの今ある姿を象徴していた。

まず輪になって、それぞれが用意してきた俳句、短歌、詩などを、自分の意思とタイミングで輪の中へ歩み出て披露する。自作のものでもいいし、どこから探してきたものでもいい。その瞬間のインスピレーションで作ったインスタント作品もあれば、何時間もの考え抜いた末に紙に書いてきたものを読む場合もある。回を重ねるたびに、少しずつそれ

ぞれの作品に個性という色がついてゆくのだ。

どんどんと進化していく俳句サークル。いつの間にかそこに歌が加わり、あるときには誰かが踊りだす。体で、文字で、声で、そして顔の表情で、自分たちの中から湧き出る「作品」が、次々とサークルの中に生まれては消えていった。こういうとき、人のパフォーマンスを「観る」ことを自分のその日の作品にするのもありだ。何かをやるのかやらないのか、やるのだったら何をやるのか、全てはその状況下における個人の判断にゆだねられていた。個人の判断にゆだねられた「自由」が、簡単に見えて、実は最も神経と責任を要する厄介なものだということを、私は俳句サークルに代表されるこのプロジェクトの全ての過程で、何度となく痛感させられた。クリフが「独りの舵取り役がない」と宣言したプロジェクトは、「周りを見渡す力」と、「自ら働きかけていく勇氣」を私たちに際限なく要求した。

月曜日の午後のリハサルで、ソヒニが女性問題を取り上げた後、数日が過ぎて、私とデボラは、久しぶりにキャンパス内をカフェテリアに向かって歩いていて。二月にしてはあまりにも強すぎる紫外線を、おでこの前にかざしたバインダーで遮りながら、根っこが

生えているかのように重い足を機械的に動かし続ける。お互い殆ど言葉を交わさないまま、昼食を目指してなだれ込んでくる生徒の群れに押し流されるようにして、カフェテリアへと足を踏み入れた。いつものごとく中華のライスガーデンに向かって歩を進めたが、強烈な中華料理の匂いに、油でこてこてになったてんこ盛りのオレンジセサミチキンを想像して、気分の悪さに思わず足が止まった。

「デボラ、私は今日は寿司にするよ」

と、指でキッカ寿司のほうを指差しながら言った。それまで、デボラの前では一度もキッカ寿司を食べたことがなかったため、デボラは少し疑ったような表情を見せたが、

「じゃあ、後でテーブルで」と言い残すと、ニコツと微笑んで、ライスガーデンの前に出た。長蛇の列に身を隠した。

キッカ寿司は、高い割りに、他の店に比べて極端に量が少なく、だからと言って特別美味しいわけでもない。小さく切り分けられた巻寿司が数個入っているだけで、正常時の自分であれば、キッカ寿司は全くお腹の足しにはならないのだ。

目の前の小さなパツクの山を見つめながら、自分のあまりの食欲のなさに信じがたい思

いがした。

病気かな？ バテたかな？

とりあえず、こういう超食欲不振のときぐらいしか、この超極小のお寿司を食べる機会など無いのだからと自分に言い聞かせ、それでもやはりお金の無駄使いをしているような、後る髪を引かれる思いで、悩んだ末に、カリフォルニアロールが数個入ったパックを手にとった。

空いているテーブルをほぼ同時に発見し、デボラと私は向かい合って座ると、それぞれのパックを開けた。案の定、デボラはオレンジセサミチキンと中華焼きそばのコンビネーションだ。その上に、着色料の塊のような色をした、蛍光オレンジのピリ辛ソースをかけると、短い祈りをささげ、

「アキ、大丈夫？ そんなので足りるの？」

と、心配そうに私の寿司に目をやって、自分はさっさと食べ始めた。私は、カリフォルニアロールにパック醤油をかけながら、この食欲のなさ、スツキリしない胸のうちは一体何なのだろうと考えていた。

デボラが、リハーサルで涙を流して以来、彼女の口から「日本人が」という言葉が出る度に、自分の心の振りが微妙に揺れ続けていたのかも知れないと思った。自分が日本人であることをとりわけ意識もしないし、デボラの「日本人が」という話に不愉快さや反抗心を感じるでもない。しかし、自分は彼女の話が心のどこかで気になっているのだ。デボラの口から、

「韓国の若くて何も知らない農村の少女たちが、日本兵にだまされて連れて行かれて……」

という話が出かかって途中で切れていったことが何度かあった。私はその話の続きが従軍慰安婦（性的奴隷）であることを知っていた。デボラは私たちに気を使っていたのか、そのことをあまりはつきりとは話さない。月曜日に女性問題を話し合ったときも、性的奴隷に関しては最後まであいまいなまま話が終わった。

デボラと二人の時に日韓関係について話することは少なくなっていたが、この日は、自分の気分が乗らないのを理由に、私はぼそぼそと暗い戦争の話を始めてしまった。

「デボラがこの前少しだけみんなに話してくれた従軍慰安婦の話、私はもうちょっと知っ

ておきたいなって思ってるんだけど。自分自身、日本人として、女として、やっぱり切っても切れない関係にある話だと思うから」

フムフムと聞きながら、デボラは食べ続けている。

「確か、私が十五くらいの時だったかな、家に従軍慰安婦の証言を集めた本があつて、それを読んだんだよね」

へえつと不思議そうな顔でデボラは私を見ながら、それでもなお熱心に口を動かし続けている。

「朝鮮半島で日本兵がレイプした人たちの話が一杯載つてて、かなり衝撃を受けたのを覚えてるよ。確か、うちの母が近所のおばさんから借りてきて、それを一家全員が読んだ後に、自分も何となくその本を手にしたんだつたと思う」

すると、デボラはかなり驚いた表情で、

「へえー。日本でもそういう本が出てるんだ。日本人がそんな本を読むなんてびっくり」

「うん。読むよ。うちの母はよく近所のおばさん友達と本の回し読みをしてるから、たぶん近所の人も何人かその本を読んだと思うよ。全ての日本人が、従軍慰安婦について全く

無知というわけじゃないよ。知ろうとしている人は中にもいるからね。それから、ついでに言うと、日本兵がやっていた人体実験なんかについても少しづつ日本でも情報が公開されてきていると思うよ。いつだったか、うちの母が七三一部隊展とかいう人体実験のことを公開した展覧会に行ったこともあった。自分は、あの時は行かなかったと記憶してるけど」以前母が、

「ずっと隠され続けてきた事実が、やっと公開されるようになったみたいやわ。人の体使って、残酷な実験を繰り返してたらしいから、ちょっと見に行ってくるわ。あんたも一緒に行く？」

と、七三一部隊展に私を誘ったことがあったと思い出した。母のもっていたパンフレットのの中のおぞましい挿絵が鮮明に記憶に蘇る。

胴体の部分にだけ薄っぺらい布を巻きつけられた中国人だか朝鮮人だが、雪の積もった屋外で、ハードル形に組まれた丸太に覆いかぶさるように縛り付けられて、顔を歪めている。素の手足を凍らせて、凍傷の実験をさせられているのだ。その横で、頭のとっぺんから足の先まで、毛皮に身を包んだ日本兵が、木の棒で実験者の手をたたいて、凍り具合

をチェックしている。

冷え性で、冬になると手足の先が真っ白になって感覚がなくなっていく私には、その挿絵の中で、実験者が味わっている苦痛が分かる。感覚がないといつても、それは表面が何も感じないだけであって、中心部の神経はズキズキと痛み続ける。私は、木枯らしの吹きつける田んぼのど真ん中を夜間に自転車で突っ切る時や、素足で剣道の冬稽古をしている時に、体が温まるまでの間、この「感覚のない痛み」を何度も経験した。

実験者は感覚を失い、痛みを感じ、おそらくそのまま失神して、実験の最後には手足を切断させられるか殺されるのであろう。

人間は一体どこまで残酷になれるのだろうか。この実験を思いついた人の頭の中はどうなっているのだろうか。そして、上からの命令に従って実験を敢行した兵士には、兵士として果たす責任以外に、人としての思考力は全くなかったに違いない。

鮮明な挿絵の記憶と、その挿絵を見た当時の思いが蘇って、食事の進みをさらに遅らせた。蛍光オレンジのソースを焼きそばに絡ませながら

「私の日本人観が少しずつ変わっていくよ」とデボラは言う。

「韓国人にも見えてないところはたくさんあるだろうね。私が韓国にいた頃は、日本人にも、従軍慰安婦や人体実験のことを知ろうとしている人がいるなんて、夢にも思わなかった。日本人は韓国人のことをただ見下しているんだって思ってた。でもアメリカへ来て、短大で最初にできた友達が実は日本人で、彼女はすごく親切にしてくれたし、宿題なんかも助けてくれて、ああ日本人にもいい人はいるんだって、その時初めて思った。それで今、アキとも仲良くなって、日本のことが分かり始めて……、韓国にいた時に持っていた日本の悪いイメージが、短大の友達やアキやイズミによって少しずつ変わってきてる。あつ、それから、シゲルさんもね。フレンドリーだし、会えばいつも声を掛けてくれて、親切で」嬉しそうな目でこっちを見つめながら、デボラは焼きそばの塊を口へ運んだ。

あーよかった。少しでも分かってもらえて。「日本悪い悪い話」を韓国で教わり、「日本人は過去の悪行をちっとも学ぼうとしていない」と信じて育ったデボラの考えが変わり始めている。私が、ほんの少しだけど日韓の歴史を知っていたこと、そして「私が少しは知っている」という事実をデボラが知ったということが、私たち互いの「これから」の関係をスムーズにしていくな。

ホツとしたのと同時に、一個目の海苔巻きに自然と箸が伸びた。しばしの沈黙を破つて、デボラが妙に納得したように口を開く。

「そうかー。従軍慰安婦のこととか知ってるのかー」

独り言なのか、こっちに話しかけているのか分からない。

「何が？何？」と探りを入れるようにデボラに聞いた。

「いや、月曜の議論中に、なんだか中途半端にしかそのことに触れなかったけど、もしアキが知ってたのなら、もう少し話を深めていってもよかったのかもしれない。もしかしたら今度、慰安婦問題が議論に出た時は、アキも何か言ってくれる？私は韓国人だから、もちろんそのことの知識はあるけど、自分の国の被害について、自分からはあまり深いところまでは話せない。だって、なんか、自分の国はこんなにもかわいそうって、同情買ってるみたいだし、一人で熱心に語ってみたところで、どこか孤立してるみたいな空しさもあるし」そして、ワンテンポおいてから、彼女は、今思いついたことを続けた。

「でも、よく考えたら、アメリカで日韓の歴史のことをこと細かく説明しても、他の生徒はしらけるだけかも。アメリカ人とはあんまり関係ないもん」

「そんなことはないよ」と、私はとっさに切り返した。

「日本人と韓国人だけが知っていればいい問題だとは思わないね。自分はそりゃ日本人だからもつと知らなければいけないと思うけど、日本人って以外にも、私は女として従軍慰安婦のことを知っておかなければと思う」

あれ、何か違う。と一瞬思つてこう付け加えた。

「いや、男でも結局一緒かな。男だから性的奴隷が何なのかを知るべきなんじゃない？ 男も女も両方。人間だから。日本人、韓国人だけじゃなくて」

続いてもう二言、三言出かかったが、私は口を閉じると。パックの寿司に視線を落とした。デボラも何も言わない。黙々とオレンジセサミチキンを食べている。私は無意識に海苔巻きを箸で突つつきまわしながら、心の中で仕切り直しすると、今度は巻かれたアボガドとカニかまぼこを酢飯の中から弄くり出しながらサラツと言った。

「私、小さい頃にレイプされたことがあるから、従軍慰安婦の本を読んだ時は他人事とは思えなかったんだよね」

デボラのフォークを持つ手が完全に止まった。こっちを見つめる視線が真剣なのが分かる。

私はこの時「レイプ」という単語を使ってしまったが、後になってあれはセクシュアルバイオレンス（性的暴行）が正しい言い回しだったと思った。しかし、それらによって受ける精神的打撃に何の違いがあるだろう。暴行を受けた当時、七歳だったことを考えると、「レイプ」というニュアンスが正しい気もする。抵抗しきれずやられてしまったのだから。ぐちゃぐちゃになったアボガドを口へ放り込んで、私はデボラの目を見ないまま、淡々と話を続けた。

「日本人としてだけじゃなくて、女としてあの本を読んだよ。暴行を受けた時は、あまりにも幼すぎて、自分でも自分自身に何が起こったのかよく理解できなかった。肉体的苦痛以外のことは、はつきりとは理解できなかった。ショックも何もなかった。単なる身体的暴行であって、性的暴行という意識すらほとんどなかった。でも成長していくにつれて、その意味が分かってくるじゃない？それで、中学ぐらいでだんだんと何が起こったのか分かり始めて、ショックを受け始めてって、変な言い方だけど……、自己羞恥と自己嫌悪みたいなのに陥りかけてたとも言おうかな。身体的暴行の後、何年も経って精神的暴行を受けたみたいな。上手く説明できないけど。その時に例の従軍慰安婦の本を読んで、ガー

ンって、瞬間的に相当落ち込んだのを覚えてる」

食欲は相変わらず無いにもかかわらず、私はパクパクとお寿司を食べ続け、はきはきと話し続けた。

「もうずっと前の話だし、今、事件のことを思い出したり話したりしたところで、どうということはないから、もし私の経験談が従軍慰安婦を説明する際に必要だったら、そう言ってくれればいいよ。月曜日にもこのことを話そうかどうか迷っただけど、タイミングがつかめなくて結局言わなかった。別にこのことを話しても話さなくても、どっちでもいいけど、ただ、デボラには私が従軍慰安婦の問題をどう考えてるかを伝えておきたかったから」話を、さも他人事であるかのようにまとめてしまったことをおかしく感じたが、しゃべってしまふとやはりスッキリした。

口数がめっきり少なくなってしまったデボラを前に、十五年前の暑い八月の午後を回想した。

気持ちの動揺は……、ない。

八月の陽炎

高い湿度、むせ返るような熱気、肌をじりじりと焦がす太陽光。日本の夏の暑さは只者ではない。座れば汗がにじみ、立てば汗が雫となり、歩けば汗が噴き出し、走れば汗が滝のように流れ出す。健康管理を怠ると、すぐにバテるのも日本の夏の特徴だ。そうめんやフルーツは、バテていてもひんやりとのどを通る……という理由から、夏場はよく食卓にも上がっていたが、こういう食べ物、食べれば食べるほど夏バテを促進する。だから私は、夏のそうめんとフルーツが嫌いだった。バテバテの夏、蒸し暑い部屋の中で、自分の食欲を唯一そそったものといえば、味噌煮込みうどんぐらいである。日本の夏、学生時代の思い出といえばやはり、ぐつぐつと煮え立った味噌煮込みうどん。

骨と皮だけのやせつぽつちの体で、だだだあ汗を流しながら、熱いものをひたすら食べ続けていた中学校当時、八月のある蒸し暑い日に、私は二階の両親の寝室で、朝鮮半島の従軍慰安婦の証言を集めた本を読んだ。

クーラーの入っていない煮えきるほど暑い二階の部屋では、南向きの窓のカーテンは開められていた。夕方の西南からの強い光を遮るためである。真つ赤に燃えた太陽光がカーテンのすぐ後ろまで迫り、カーテンをすり抜けた熱の塊が室内に充満していた。電気もつけず、薄暗い部屋の中で、積み上げられた両親の布団にもたれかかりながら、その本を手にした。

どうしてあんなに暗いシチュエーションで本を読んだのかは今でもよく分らない。バックミュージックに森田童子のCDでもかけていればそれこそ完璧のセッティングだったのにといままさながら思う。一人ぼつんと部屋の片隅に体育座りしたまま、両親の本棚に立てかけてあったその本を、偶然手にしてしまったのだった。

私は、静かに本を開けた。

どの証言もよく似た感じのことが書かれていたが、自分の記憶に残った言葉をかき集めてみると、以下のようなになる。

証言。

「私は十四歳の時に、従軍慰安婦として、日本兵に連れて行かれました。『簡単でいい仕

事があるから』と誘われて、家族のためにも働かなければいけないという思いから、他の若い女性たちと共に村を後にしました。連れて行かれた先は慰安所でした。それでも、着いた当初はまだ、そこが慰安所だとは知らず、どんな仕事が待っているのかも分かりませんでした。何も分らない場所で、とても不安を感じながら、最初は雑用に終わりました。そして、その後、個室に入れられて慰安婦として働かされました。

私は当時処女でした。だから日本兵が部屋へ来て服を脱がし始めた時、何度も何度もやめてくれと頼み抵抗しました。すると日本兵は私を平手打ちにし、強引に犯しました。何人も兵士に犯され、本当に辛くて痛い思いをさせられました。その夜は、他の従軍慰安婦たちと、泣きながら水で陰部を洗いました。その次の日も、また次の日も、一日に三十人以上（証言によつては百人以上というのもあったと記憶している）の男の相手をさせられました。

最初は抵抗しましたが、だんだんとその気力も無くなり、失神してしまったこともあります。それでも男たちは行為をやめませんでした。そのうち、性病に冒され、性病に冒されているからやめてほしいと何度も頼みましたが、やめてはくれませんでした。仲間

の中にはもつと抵抗したり、脱走を試みた人もいました。そういう人は、抵抗した罰と、私たちへの見せしめのために、私たちの前で、縄で吊り下げられて、滅多切りにされて殺されました。それ以来私たちは抵抗をやめました。恐ろしくて辛くて、もうこんな所からは早く逃げ去りたいと思いました。夜になると、他の慰安婦たちと、泣きながら祈りました」

「戦争が終わった後も、私はその事を何度も後悔しました。今でも悔しくつてなりません。恥ずかしくて、家族には自分の過去を隠し通して生きていました。そして、その後結婚しましたが、ある日、夫に自分が元従軍慰安婦だったことを打ち明けると、夫は何も言わず逃げていきました。日本兵は私の人生をめちゃめちゃにしました。本当に悔しくつてなりません」

本の中では、こんな内容の話が延々と続くのだ。私は体勢を変えることも、顔を上げることもなく、息を凝らして次々に証言を読み進んだ。

西日のせいで、部屋の温度が上がり続けている。心臓の鼓動が速まり、高まる。冷や汗が額から流れてきて、太ももにぼたりと落ちた。どこか一点に向かって突き動かされているかのように猛烈にページをめくっていく。体内を波打っていた熱湯が沸点に達した時、

私の頭は、七歳の八月にフラッシュバックした。それまで明確には思い出すことの無かった幼い日の記憶が、一気に脳裏に浮かぶ。

三分の二ほど読み進んだ本を、開けたまま両膝の上にもたせかけると、私は本から目を離した。

一九八六年八月。カラッと晴れ上がった昼下がりに、当時の夏の日課となっていた蝉捕りに、一つ年下の従弟と出かけた。あまり湿度は高くないが、日差しは強い。

当時、家の周りのありとあらゆる木には、油蟬が山ほどへばりついていた。蝉の声を、夏の風情などと悠長に語る人もいるが、私の家の周りの蝉は、単なる騒音公害の根源としか言いようがないほどやかましかった。早朝のラジオ体操がない日でも、夏休みの間は、蝉の声のせいで遅くまで寝坊する事は不可能だった。朝食をとって先ず、蝉を捕る。昼ごはんを食べてまた蝉を捕る。こうして夕方日が暮れるまで真っ黒焦げになって蝉と格闘した。大量に発生した油蟬以外に、羽根が透明のクマ蝉や、ミーン、ミーンと鳴くミンミン蝉などを見つけると、もう大騒ぎをして、木やはしごによじ登って捕ったものである。

その日は、家の前の木にはなぜかほとんど蟬がおらず、仕方がないので、小道を挟んで隣に建っていた従弟の家の前の桜の木のを調べに行った。ここにも油蟬があまりいない。途中で二つに分かれた幹のうち、細いほうの幹のかなり上のほうに、小さなミンミン蟬が一匹だけへばりついて声をたてていた。

どう考えても、網の届く距離ではない。おまけに周りに茂った葉っぱや細い枝が邪魔して、網を寄せるのは不可能と思われた。せっかく見つけたミンミン蟬を見つめながら、未練たらしく木の周りをうろついていると、その男はやって来た。黒い、ダサイ、現在では年賀状配達のアルバイト以外ではもう見かけなくなった、ハンドルが長く横に伸びたモデルの自転車に乗ってやってきた。前かごは付いておらず、黒い荷台がサドルの後ろに付いていた。男は自転車にまたがったまま、私と従弟に近付いてくると、

「何してるの？」と、笑顔で話しかけた。

「セミとり」と、私が元気に答える。

「そう。蟬捕りしてるの。たくさん捕れた？」

それがさっぱり……という落胆の表情を浮かべながら、

「ううん」と、私は首を振った。

男は自転車を下りて、桜の木を見上げると、

「あんまりここにはいないみたいだね」と言う。

「あそこに、ミンミンが一匹おるけど、あれはちよつと無理なん」

と、私は、相変わらず一匹だけ木にひっ付いている蟬を指差して言った。

「どこ？ ああ、あのちっちゃいやつか」

と、男が私のほうに体を寄せながら、木の上のほうを見やった。

残念そうに木を見つめている私を見ながら、男は尋ねる。

「ねえ、きみ、男の子？ 女の子？」

ちよんちよんに刈り上げられたショートカットで、いつも短パンとTシャツだった私は、小さい頃よく男の子と間違えられた。おまけに、夏休みとあって、この時は真っ黒に肌は焦げていて、おまけにカリカリにやせて、棒みたいな手足だったため、男は、私が男の子なのか女の子なのか分からなかったのだ。

いつものことながら、男の子と間違われるのはやはりちよつと恥ずかしい。いやなこと

聞くおじさんだなあ、と思いながら、

「女の子」と、苦笑いを浮かべて答えた。すると男は、今度は従弟のほうを見ながら、

「きみは？ きみも女の子？」

とまた聞いた。

当時、長めの髪の毛で、きのこをかぶったみたいな頭をしていた私の従弟は、私よりも肉付きがよく、まつげが長くて、女の子みたいだった。それなのに、短パンにランニングシャツだったため、男はまたも混乱したのだ。

「違う。そっちは男の子！」

と、私は男を諭すように、従弟に代わって答えた。

男は「ふーん」と言ってから、

「もっと向うの方の公園に行けば、いっぱい蟬がいるよ。こんなところにいるよりも、もっといっぱい蟬が捕れるよ。おじさんが連れて行ってあげようか？」

と、私たちを誘った。具体的にどの公園に行くかは言わなかった。私は家の近くの、大小合わせて四つほどある公園を思い浮かべたが、知らないおじさんについて行ってはいけ

ないと思い、首を横に振る。

「どうして？ ほら、一緒に行こうよ」

男は再度促したが、

「もう少しこの辺りで探してみます」

と、私は丁寧語で言つて、従弟の相槌を求めると、蝉がいないと分かっている桜の木の周りで、再び蟬探しを始めた。

男は、「じゃあね、頑張れよ」と言い残すと、ダサイ自転車にまたがって東のほうへ去つていった。

無言のまま、しばらくのこと家の周辺をうろついたが、やはり蟬は見つからない。もつと蟬が捕りたい！自分の欲求が、さつき男が話した、蟬いっぱい公園へと、私の心を傾かせる。家からほんの二百メートルくらい離れたところにある、桜の木に一面を囲まれた公園を想像した。

団地の端の丘陵地帯を利用したその公園は、道路よりもおよそ二メートルほど低地に設置されている。斜面にはつつじが植え込んであり、その横に設置された階段を下りると、

桜の植木で覆い隠されるような土の平地に出るのである。つつじの周りにも桜の木がよく茂り、道路からは公園の様子は殆ど見えない。

うつそうと茂った木々の間には、たくさん蝉がいる。私は我慢できなくなつて、従弟に言つた。

「公園行こか」

従弟は、「うん」と言つて、「どの公園？ 東公園？」と、家から二百メートルほど東に歩いたところにある、あまり木のない公園の方向を指して私に聞いた。

「西公園のほうがいっぱい桜の木もあるし、あっち行こう」

西に向かつて、虫取り網を担いで歩き始めると、緑の虫かごを首から提げた従弟は、張り切つて私の後ろをついて来た。

あつという間に公園に着くと、階段を下りて平地へ出た。蝉の音が聞こえる。油ゼミに混じつて、ミンミンもいるようだ。しかし、期待していたほどの数はいないようだ。とりあえず階段付近の木から調べ始めた。顎を上に向けたまま立ち尽くしていると、ガチャッと自転車を立てる音がして、振り返るとさっきと同じ男が階段を下りてきた。あつけにと

られて、

「あつ、また会った」

とつぶやくと、男は

「せやなあ。また会ったなあ。何してるの？ 蟬捕ってるの？」と尋ねた。

さつき会った時にも、蟬捕りをしてると説明したのに、しかも公園に行けばもつと蟬がいると言ったのは自分のくせに、このおじさんはどうしておんなじことばかり聞くのだろうと不思議に思った。うん。とうなずいて、その瞬間初めて男と向かい合った。

中年で下っ腹の出た、体格がいいというよりはやや小太りのその男は、紺の長ズボンに、薄手のベージュがかった、右胸にポケットの付いたポロシャツを身にまとっていた。四十九ぐらいで、首は短く、顔の形は四角で、髪を七三に分けていた。しかし、男の顔がどんな風だったかは、その後、自分の記憶から完全に消えてなくなったため分からない。それ以外の全ての部分に関しては非常に鮮明な記憶の中で、顔の部分だけが影を帯びて、今の自分には見えないのだ。

男から目を離し、木を見上げながら、カニ歩きでさりげなく男から離れた私に、男はま

たも質問した。

「男の子？ 女の子？」

どうして同じことばかり聞くのだろう。何かがおかしい。私は男と目を合わせないまま、ぼそっと、小さな声で、

「女の子」と答えた。

その二秒ぐらい後だ。突然背後から衝撃が走り、勢いあまつて私は前のめりによろけた。男が、後ろからしゃがみこむようにして私の体をがっちり抱える。私は立ったまま、背後からかがむように体を寄せくる男の股間に挟まるような格好になった。男の腕が、私の両肩口から伸びてきて、男の股間に私の体をびったりと貼り付けたまま動けなくする。頭の上から降りてくるタイプの、ジェットコースターのシートベルトに挟まったような格好だ。男が体をさらに前傾に倒し、力のみなぎった両手が私のパンツの中に伸びた。

ねっとりと脂ぎった男の太い手が、私の下半身をまさぐる。痛い。男の手を離れようと必死になって足を動かし、前進しようとするが、七歳の自分にかなうような相手ではなかった。目の前の桜の木が歪み始め、冷や汗が全身を伝う。蟬が鳴くのをやめ、空気の流れが

止まる。痛みと焦りの中、私はもがきながら、これまでの人生で最もばかげたことをこの瞬間に言った。

「あのー、すみませんが、止めてもらえませんか？ちよつと、手を離して頂けませんか？」
大人の人には丁寧な言葉を使いなさいと教えられていた私は、震える声でバカ丁寧に尋ねたのだ。

「止めてもらえませんか？」などと言われて、「はい、じゃあ止めます」と手を離す痴漢がどこの世にいるというのだろうか。その男は飢えていたのだ。男はさらに興奮し、息を荒げ、私の首の後ろに自分の股間を激しく押し付けながら、さらに指に力を込める。

止めてほしいと、か細い声で言いながらもがく私に、男は、嬉しそうな、鼻にかかったような、甘ったれた声で、こう言った。

「あれー。どうしてそんなこと言うのかなあ？おじさんがちよつと調べてあげてるだけじゃない。ありがとうって言わなきゃダメでしょ。ありがとうって」

どれくらいの時間が流れたのだろうか。目のやり場に困りながらうろたえていた従弟の

姿が、自分の視界の中でぼんやりと霞み始めた時、ついに男は手はなした。なのに、自分の体が動かない。即座に走り逃げる事ができないまま、しばらくその場に無言のまま立ち尽くした。股間の痛みという身体的な問題もあったが、それ以上に、精神的なものが自分をその公園にしばらくの間とどまらせていた。動揺して走り去ることによって、自分に今さっき起きた異常事態を、「異常事態」と認めてしまうのが恐かったのだ。男の目の前で、「やられた」ことを認め、心の乱れをさらけ出して逃げる事ができなかった。

男はまだ公園の中にいる。背後にいて何をしているのかは見えないが、まだそこにいる。しばらく立ち尽くした後、私はこともあるのか、再び蟬を探す振りをして、定まらない視点のまま公園内を歩き回った後、平常を装って、わざと男に聞こえるように、

「あんまり蟬もおらんみたいやし、もう行こうか」

と、さつきから落ち着かない様子の従弟に言って、階段をゆっくりゆっくりと上った。

自分は男から逃げて家に帰るわけじゃない。蟬がおらへんから帰るだけや。

道路へ出て家の方向に歩き始めると、だんだんと恐怖と罪悪感のようなものが体中を覆い始めた。何でもないと思うとする自分と、実はさつきの出来事が異常事態であること

を知っている自分がちぐはぐになって、私は無言のまま早歩きをした。八月のアスファルトからは、陽炎がめらめらと生えている。こんなにも家が遠く感じたことはない。歩いても歩いてもなかなか家に辿り着かない。焦る。でもだからといって、走ることもできない。

汗だくになって家まで来ると、家の前の雨溝に、中の姉が腰掛けていた。姉の周りに、誰かもう一人二人一緒に座っていた筈だが、この時自分は、姉の顔以外は見ていなかったため、そこにいたのが、姉の友達だったのか、もう一人のいとこだったのかははっきり思いつかない。虫取り網を右手に歩いてくる私を見ると、姉は、

「あつ、アーちゃん（私の愛称）、どこいっとったん？」

「西公園行つてセミとつとった」

姉は、従弟の首にぶら下がった、何も入っていない虫かごに目をやった後、

「なんやア。西公園行つとつたんか。ずっと探しとつたんやで。ほんなんやったら、みいちゃん（姉の呼び名）も一緒に行けばよかった。でも、何で一匹も入つとらんわけ？」

虫かごを指差して、痛いところを突いてくる。あんまり蟬がおらんかった、と言いつつに、私は今日の自分のニュースを姉に話した。

「蟬はまあええけど、それよりさあ、さつき西公園で痴漢に会ったで。いきなり後ろから襲いかかってきた」

すると姉は、両目玉を飛び出させて、「えー……」と驚くと、身を乗り出してきて、私に一部始終を話させた。あまりの姉の驚きぶりと、野次馬根性に、最初はたいしたことなさそうに話し始めた自分までが、興奮してくる。どこかで聞いてきた誰かの重大噂話を話すかのように、おお威張りで、私はそのことを話し切った。話し終えて、もう話すことがなくなると、切なさともなしさがわいてくる。姉の横に腰を下ろして、雨溝のふちに足を掛けた。

すると今度は、母が家から出てきて、並んで座っている私たちを見つけると、ゆっくり、穏やかな口調で、

「ああ、あんたらこんなところにおったん？」

と言った。格段心配した様子もなく、いつもどおり家の周りで遊んでいる私たちに声を掛けただけという感じである。歩いて近付いてくる母に、

「ちよっと、重大ニュース！アーちゃんがさつき痴漢に襲われたって！」

と、立ち上がって最初に叫んだのは姉だった。私は姉の足元に座ったまま自分のゴム草履を見つめていた。

「えっ！」母の声が緊迫し、「そうなの？」と私に問い詰める。

私は静かに、「うん」とうなずき、たいしたことなさそうに、冷静に、ポイントをかいつまんで話した。全部知っている姉が、横から大げさに補足を入れる。

母は、目が血走っているにも拘らず、落ち着こうと努力しているのが分かる。母は、普段からそうであるように、早口にもならず、大声を出すことも無かった。怒っている口調でもないが、母の声には、ただならぬ気配が漂っていることは子供の自分にもはつきりと分かった。

「何で逃げなかったの」

「でも、止めてくれませんかっ、何度も言っただよ」

「止めてくれませんか、じゃないでしょ。そういう時は、キャー、誰か助けてー、って叫ばなきゃダメでしょ！」

ああ、そうか。と、自分は妙に納得した。そういえば、痴漢にあつたら、「キャー誰か

助けてー」って叫ぶのが決まりだった。でもいざという時に、なかなかそんな声は出るものではない。抵抗できずやられてしまった後に、そのことに対して「たいしたことない」振りをして、その後ずいぶん時間がたってから、そのことを思い出しては後悔する。

痴漢、性的暴行、セクハラなどは、どれもよく似た傾向をたどっていると思われる。人によっては、「抵抗しなかった、逃げなかった女のほうの落ち度」を指摘したり、「男を誘惑したのではないか」と、その状況下での女の態度を疑問視する人もいる。確かに、それがあたっている場合もたくさんあるだろう。しかし、そうでない場合はさらに沢山ある筈だ。以前、アーバイン校の、とある先生のオフィスで、私は軽度のセクハラを受けたことがある。事件発生時は、自分ではセクハラだとは思わなかったし、そうだと認めたくなかったのだが、後々思い返してみると、やはりあれはセクハラだったと思うのだ。

私はその日、ジーパンをはき、丸首で無地のだぶつとした長袖Tシャツに、底の平たいサンダルといった、色気のかけらもないでたちで先生のオフィスを訪れた。先生と話をした後、オフィスを出る別れ際に、抱きしめられたまま、唇にぶちゅつとキスをされたのである。

アメリカには、ハグやチークキス（ほっぺにチュッとやるキス）があり、私はそれは全然構わない。むしろ、それらを愛情表現の一つとして好いている。しかし、長い時間抱きしめて、もろに口づけをされるのはやはり気分が悪い。中年の先生の顔面が迫ってきて私の唇にへばりついていた間（たて続けに二度やられた）、私は、不快を感じながらも抵抗できないまま、アメリカとはいえ、ちよつと過激だなあーと冷静に考えていた。先生が唇を離れた後も、淡々と笑顔で、

「それでは失礼します。また近いうちに連絡させていただきます」

と言いつ残して、何事もなかったかのように帰宅した。

どこか後味の悪さを残したまま、夜になってベッドへ入り、先生の顔のドアップと、唇の感覚が蘇った時、強烈な不快感と怒りがお腹の底から湧き上がってきた。心拍数が高まり、後悔に体が小刻みに震える。

「あのエロ親父！」

私は、この時点でやっと、それがセクハラだったことを悟った。

あれは、生徒への簡単なグッバイキスじゃない。オフィスの中という密室でなければ、

絶対起こりうるはずの無いことだった筈だ。先生の顔を思い出すのが辛い。自分の落ち度をふと考える。自分は誘惑するような態度をとっていたのだろうか。何か誤解を生むような行動があったのだろうか。先生は本当に、単純に自分のことを生徒として大切に思っていただけかもしれない。そうだとしたら、今、顔も見たくないと思うほど先生を嫌うのは失礼だろうか。

でもやはり、どんな理由があろうと、全くその気の無かった二十そこそこの生徒に、五十代か六十代かという先生がくちづけをするのは不適切である。むこうがどう思おうが、こちらの心理としては不愉快としか言いようがない。

なぜ自分は抵抗しなかったのか。「やめてください」とはつきり言うことは何故かできなかった。

抵抗した後に自分に返ってくるかもしれない仕打ちを恐れたからか、自己の羞恥をその場で認めたくなかったからか。そういう態度は七歳の自分から全く進歩していない。

母は、その男の容姿を大まかに把握し、いったん家へ自転車を取りに行つて戻つて来ると、

私が説明した「西公園」とは逆方向に自転車走らせ、日の傾き始めた団地内へと消えていった。母は、男を捕まえに行ったのか？ それとも、ただ、買い物にでも出たのだろうか？ 私は、血相を変えて自転車にまたがった母の行方を、とりわけ深刻には考えなかった。

しばらくして戻ってきた母が、今度は警察に電話をし、夕暮れの中を、三人の警察官が家へとやってきて、事情聴取して去っていった。私は、母にも、警察官にも、体の「痛み」については全く話さなかった。事実、その時点ではあまり痛みは無かったのだが、この日話したのは全て男に関することで、自分の事に関しては一切触れなかった。

そして、次の日、またその次の日、と、トイレへ行く度にひどくなる痛み、その後数日苦しんだ。下半身を圧迫するような、重々しい痛みがあり、排尿しようとしても、なかなかできない。トイレのドアを半開きにしたまま、延々と便座にすわり続け、情けない声で、「おしっこが出ない、出したいのに出ないよお」

と、トイレのドアの前で心配そうに様子を伺っていた母に、ぶつぶつ文句を言い続けた。

本を開けたまま座り続け、いつの間にかずいぶん日が落ちて真っ暗になった寝室の中で、

私は、額に滲んだ汗を、親指の甲で一氣にぬぐった。

八年の歳月を経て、自分が初めて「己の羞恥」を認めた瞬間である。朝鮮半島で、何度もレイプに遭った人々の証言が、ついに私の心の引き金を引いたのだ。鮮明な記憶の中に、自分の恥ずべき経験をたどった後、私は両親のことを考えた。

己の羞恥とは言っても、羞恥というのは、自分の中で勝手に沸いてきて自分に対して向けられる一人称的な感情ではない。誰かに対して自分を恥ずかしく思う、より相対的な感情なのだ。母は、娘が痴漢に襲われた話を聴いた瞬間、どう感じたのだろうか。あの日の、母の血走った目を思い浮かべると、羞恥の中に、さらに罪悪感までがこみ上げてくる。

自転車を西公園とは逆向きに走らせた母の行方が気になり始める。母は、男を捕まえるに行ったのでも、買い物に行ったのでもない。小柄で華奢な母が、手当たり次第身知らぬ男に近付いていって、「さつきうちの娘を襲いましたか？」と尋ねて、男を捕まえてくるなんて、どう考えてもありえない。

さつきぬぐった額にまた汗がにじんでいる。

母は、混乱していたのに違いない。どうしていいのか分からず、子供の前で動揺する事もできず、だから家を飛び出して、無心で自転車をこぎ回っていたのに違いない。母は、自転車に乗りながら、泣いていたのだろうか？

自分は親に対してなんということをしてしまったのだろう。自分はアホだ。最悪だ。不純で汚い生き物だ。

その夜、母はどんな思いで、事件を父に打ち明けたのだろう。そして、自分の娘が見ず知らずの男の手に落ちた話を、父はどんな思いで聞いていたのだろうか。

私はそこで考えるのをやめた。読みかけた本を閉じると、そっと本棚に戻し、寝室を出て階下に降りた。暗闇の中、電気もつけずに誰かが動き回っている。母だ。さつき帰ってきて、買い物の片付けをしているらしい。私を見つけるなり母は、

「あれ、あんた家におったん？ 真っ暗がりで、音もせんから、誰もおらんと思ってたわ」

「うん。二階で本読んでった」

「電気もつけへんと？」

「うん。例の従軍慰安婦の本読んどった」

「ああ、あの本なあ」

母は、忙しそうだ。

電気をつけないまま、私は何事も無かったように、

「だいぶ日も落ちて涼しくなってきたし、そろそろ犬の散歩行こか」

と言うと、裏口に腰掛けてサンダルを履いた。単純な三匹の犬たちは、私の姿を見ると、無邪気に吼えたり、回ったり、飛び跳ねたりして、散歩タイムを喜んだ。

仲間たちの気遣い

「もしいつか機会があれば、自分の経験を話しても構わないよ」

と、デボラに話してから何日か過ぎて、私は土曜日の午後のリハーサルに参加していた。前半二時間のリハーサルの後、短い休憩を挟んで、毎週恒例になっていたジェフのライティングタイムになった。ジェフが課題を出し、それについて各々が自由に自分の思いを書いてゆく。書き終わった作文はジェフが持ち帰って目を通す。心地よく、眠たい午後のひと時に、リラックスして、自分のスポットを見つけて書き始める。

ペンとノートを手に、メンバーの半分以上が、太陽の光と新鮮な空気を求めて、ホールを出て行った。私はホール内の壁に椅子をつけて座り、もう一つの椅子の上に足を投げ出した格好でペンを執った。今日のトピックは、「惨事」。私は即座に書き始めた。

自分にとっての「惨事」を、十五歳で自己の羞恥を認めた瞬間と設定し、戦時中に性的奴隷となった人たちのことを交えながら書いた。私の惨事は、事件が起こった後かなりの

時間が過ぎてから起きた。雷が光った後、しばらくして音が伝わってくる現象とよく似ている。しかし、性的奴隷にされた人たちは違う。思春期に性の奴隷にされた人たちは、悲劇が起こっている間、オンタイムで己の羞恥を認めざるを得なかった。雷が本人たちの上に落ち続けたとでも言えようか。光と音と下から突き上げるような振動が一斉に降りかった。まさに「大惨事」である。

汚い字でA4二枚分にぎっしり書き込むと、それをジェフに渡した。

一週間後の金曜日、リハーサル室に早く着きすぎた私は、ホールの中に設置されたピアノの鍵盤を一人でたたいて暇をつぶしていた。しばらくして、そこへジェフが歩み寄ってきて、穏やかな表情のまま、小声で話しかけてきた。

「先週のアキの作文読んだよ。ビックリした。勇気……要ることだね……」
ゆっくり、静かに話す。

「今日、今までにみんなが書き溜めてきた作文から、いくつか選んだものを発表しようと思ってるんだけど、その中にあの作文を入れてもいいかなあ？」

「いいよ」私はあっさりそう答えた。デボラとももう話したことだし、ジェフが適切だと思えば使っても構わないと言った。

「じゃあどうしようかなあ。アキが自分で朗読する？それともオレが読もうか」

ジェフが相当気を遣ってくれていることが、その口調から分かる。

「ジェフが読んだら？」

私は微笑みながらそう答えた。

十五点ばかり選ばれた作文を、全て匿名でジェフが読み、それをみんなで聞き入った。個人の話は、どれも実感がこもっていて興味深い。凄い話が一杯入っていた。朗読の後、本当にこれが自分たちの作文なのかと、自分たちで驚き感心する。何週間もかけて全ての作文を読んできたジェフが、

「なっ、そうだろ！だから前にも言ったじゃん！凄い作文がいっぱいあるって！」

と、得意げに話す。誰かが、この作文全部を、最後の発表で使ったらどうかと言い出し、みんなが盛り上がり始めた。すると、イズミが、

「でも、作文を書いた人の同意を先ず得るべきじゃない？仲間内では話せても、発表まで

はしたくないことだってあるかもしれないし」と発言した。

匿名ではあるものの、性的暴行を日本人の視点から書いた作文が、もう一人の日本人の私のものであることに気付いた彼女が、とっさにフォローを入れたのだ。今度は、クリフが勢いよく椅子から立ち上がり、右手を胸の前にかざして忠誠を誓う格好のまま、

「その通りだね。私は、書き手の意思を尊重する事をここに誓う！」
と、宣誓した。みんなが力強くうなづく。

従軍慰安婦問題は、日韓の問題としてだけでなく、女性問題でもある。女性問題は、女性だけの問題ではなく、全ての人間の問題である。娘をもつ父親、妻を持つ夫、ガールフレンドのいる彼氏、母から生まれた息子、女友達のいる全ての人。誰にだって関係がある。

私は、これまでに一つ屋根の下に暮らした数多くのルームメートのうち、すでにそのうちの三人が、何らかの形で性的暴行を受けたことがあると聞いた。事実が表に出ることはあまりないが、性的暴行は多くの国の多くの社会に数多く潜んでいるはずである。暴行を犯す男は沢山いる。

しかし、それと同時に、それを防ごうと努力している男もさらに沢山いることを忘れるべきではない。男女を問わず、問題を真剣に受け止め、少しでも解決に努めようとしている人間もまた数多くいるはずである。メンバーの「気遣い」の中に、私はそういうことを感じ始めていた。

プロジェクトの主要事項

アーバイン校のようにクォーター制の大学では、学期そのものが、たった十週間と短い
ため、中間試験のあたりからは、ただただ坂道を転がり落ちていくかのごとく、ひたすら
課題をこなし、ハッと気付くと学期が終わっているものである。ドラマ学部においては、
とりわけ七・九週目あたりがきつかった印象がある。

歴史や論理のクラスの学期末レポートや、演劇評論の提出、デザインのクラスでは、自
分のデザインのプレゼンテーションをするのがこの時期である。疲れたら一・二時間眠り、
起きてコーヒーを飲んでまた続きをする。ブラインドの外の群青色に染まった町が、徐々
に薄水色になってくる明け方、最後の追い込みにかかる。焦りと大量のカフェインで心臓
がバクバク言い始める。夜明けと共に、絵の具がまだ乾き切らないデザインを担いで自転
車で学校へと疾走し、ゲエゲエ息を弾ませながら、プレゼンテーションの内容を整理した。
デザインのクラスとはいえ、生徒の大半が役者志望であるため、人前に立つプレゼンテー

シヨンは皆張り切ってやっていた。先生が持ってきたクッキーやベーグルをバクバク食べ、コーラやオレンジジュース

をガバガバ飲みながら、ああだこうだと、全然大したことないデザインに大威張りでこじつけするのである。こんな時にもやはり、嘘つきゲームで鍛えられた演技力は抜群の効果を発揮する。

ごみの塊のようなステージの模型や、衣装というよりは、ただぼろ布が張ってあるだけの画用紙を前に、

「これは、この劇の中に潜伏している抽象性を、より宇宙的観点から、歴史と現代における、社会と家族のどう猛性に着目しながら創造したデザインです」

と、真顔で話している。

ビックリした。何なんだそれは？

あまりに自信満々に話すクラスメートを見ると、時に猛烈に笑いがこみ上げてくる。実際、当のデザイナーも他の生徒もこらえ切れずにふきだすこともある。しかし、人のことを小バカにする権利は自分にはない。他の生徒が発表している間中、どうやって自分の

デザインにこじつけをしようか必死で考え、自分の番が回ってくると、言いたいこともなかなか伝わらず、四苦八苦するのがおちなのだ。とりわけ、デザインのクラスでは、形容詞の語彙力が問われるから難しい。私のプレゼンテーションは大方以下のようになる。

「これは、この劇の中にある抽象性を、より抽象的観点から、抽象と具象の中にある何か分らないものに着目しながら、適当にやってみたデザインです」

堂々と、同じ単語を繰り返しながら、説明をどんどんいい加減にしていく。ここで、

「うーん。どうやって説明すれば私のイメージが伝わるかなー」

と、神妙な顔つきで悩むと、他のクラスメートは、さらに神妙な顔つきで、いろいろな形容詞を提案しながらフォローしてくれるのだ。

他の生徒が提案してくれた、本当は自分には意味も分らない単語に、

「ああ、それ！それが私の言いたかったこと。ありがとう！」

と、希望の色を顔一杯に浮かべて頷けば、一件落着となるのである。

こんなプレゼンテーションでも、準備にはそれなりの時間がかかり、そのため、中間試験後は大変だった。

プロジェクトも最終章に向かって着々と進歩を遂げていた。ダンスの先生、ディードラの指示で訓練してきた創作ダンスに、より力を入れ始めた。

『Voices from Hiroshima and Nagasaki』の本がダンスのベースとなる。いくつかの話を厳選し、その中で印象に残ったフレーズを基に、そのフレーズにこめられた意味やイメージを体現していく。他には、ある被害者のストーリーをジニーが朗読し、その周りに立ち並んだ私たちが、ストーリーに沿って、その情景を音や体を使って表現したりもした。

同じストーリーに即したダンスでも、毎週のリハーサルごとに、解釈の仕方が変化し、それに伴って動きも変化する。繰り返えしストーリーを聴くことによって、それまで見えなかった情景や、背景や、語り手の思いが、新たに分かってくる。

それ以外では、兵士の戦いや死を、太鼓、掛け声、足踏みの音を織り交ぜながら、グルーブとして体現し、自分たちで作り上げた一連の動作を本番まで反復練習したり、全員で覚えた『長崎の鐘』という歌をイズミとジェシカが歌い、その歌に合わせての即興団体創作ダンスも経験した。

最後のパフォーマンスを、どのように骨組みしていくかを話し合い始めたのも、七週目を過ぎた頃からだった。数人ずつのグループに分かれ、今までにやってきたことや、最終パフォーマンスにどうしても盛り込みたいことなどを、思い当たるだけ全て書き出し、重要な順に番号を振る。それらをポスティブに一つずつ書き込み、全グループのメモとあわせて、リハールホールの壁に設置された、ダンス用の巨大ミラーに貼り付けた。一位に貼り付けられたメモと向かい合うように、壁のミラーと向かい合って、半円状に椅子を並べて座ると、それらを一望した。

重要事項第一位は「FOOD」。どのグループも、「食べ物」を一位か二位に挙げていた。ここまで散々難しい話し合いや創作ダンスや作文をやってきたのに、ここへきて最重要事項が「食べ物」だから笑ってしまう。一体どこからそんなものが出てきたのだろう。しかも、全グループ一斉に「食べ物」をあげたのを見て、私たちは大爆笑した。あるグループは、より具体的に、「FOOD FOR US」と、発表の中で最も重要なものが「自分たちの食べ物」であることを明示していた。クリフが、「FOOD」と書かれた紙を集めて、

「これだけは、どうしてもはずせないみたいだね」

と、こちらも笑いながら、プロジェクト最重要事項のスペースに、それらを貼り付け直す。プロジェクトの予算はいくらだとか、食べるんだったらやっぱ日本食だとか、みんな嬉しそうな顔で、大いに盛り上がっている。

「食べ物」以下に続くものは作文、ダンス、歌、俳句サークル、伝統文化のデモンストレーション、といったまともな事項だった。ダンスや歌の中には、プロジェクトの主題であった長崎原爆が主要素として多く組み込まれている。しかし、それ以外の部分、特に作文の朗読の中には、もう一つの主題となりつつあった九月十一日のテロ事件への切実な思いが多く盛り込まれていた。

事件から五カ月ほどが過ぎ、少しずつ冷静さを取り戻しながら、「テロが自分たちそれぞれに何を意味したのか」を考え直してきた軌跡が、作品の中にくっきりと刻み込まれている。テロ後、アメリカは軍国主義化した。圧倒的な武力で戦い続け、いつの間にかイラクまでやつつけた（二〇〇三年現在）。アメリカの軍事傾倒について、また、国際紛争のもたらす影響について、プロジェクトを通じて何度も話し合ったことが、いまさらながら思い出される。

テロとアメリカ国旗

二〇〇一年九月十一日。その日、アーバイン校はまだ夏休みの最中だった。短大での夏のアルバイトを早めに切り上げ、編入先のアーバインに引越した私は、学校が始まるまでの間、地域やキャンパスの探検に出かける以外は、だらだらとした日々を送っていた。七十二歳のアメリカ人の女性、フィリスの家の二階に間借りをし、その他、定期的に泊りに来るロシア人の芸術家と、イギリス人の俳優と一緒に暮らしていた。

事件当日の朝、私は階下から聞こえてくる大音響のテレビの音で目を覚ました。普段は静かで、朝っぱらからテレビの音や人の声が聞こえることはまずない。たまに、フィリスが芸術家や美術館関係者を集めてセミナーを行う時以外は、早朝から人の声など先ず聞こえてくることない。平日にセミナーをやってるなんて変だと思いながら、ベッドの中でしばらくぐずぐずしてから、いよいよ目がさえて眠れなくなると、仕方なく一階へ降りた。

自分の部屋のテレビをつけっぱなしのまま、キッチンで朝食を作っていたフィリスが、

血相を変えてキッチンから飛び出してきた。右手にフライ返しを握り締めたまま、

「アキ、私たちの国がやられた！ ニューヨークが攻撃されて大変なことになってる！ 早くテレビを見て！」

涙ぐみながら騒ぎ立てるフィリスに圧倒されて、フィリスの部屋のテレビに目をやった。貿易センタービルに飛行機が突っ込む映像が何度も繰り返され、飛び散る瓦礫と煙の中を逃げ惑う人々が映し出される。

「今朝早くに、友達から電話が入って、すぐにテレビをつけろって言うからつけてみたらこんなことになってたの。ああ、なんてことが起こったの。信じられない！ 人類はバカだ、愚かだ！ テロリストは最悪だ！」

大興奮し、今日の前で自分の家族でも亡くしたかのように騒ぎ立てるフィリスの声が、逆に自分の心を惨事から疎外し、私はどう反応していいのか分からないまま、アクション映画のワンシーンでも見ているかのような気持ちで画面に目をやっていた。実感がまるで湧かない。興奮もしない、何の感情も抱いていない。

「ああ、信じられない。どうして人が死ななきゃならないの。第一次、二次世界大戦やべ

トナム戦争でもう十分！バカだ！バカだ！アキもそう思うでしょ！」

充血した目でこちらを見ながらフィリスは言う。右手のフライ返しで小刻みに震えている。悲しんでいない自分は異常なのだろうかと冷静に考えながら、「何も感じない」と正直に言うわけにもいかず、とりあえず、フィリスの意見に同意した。

どのテレビ局も、画質と撮影角度を変えただけで、同じ場面を何度も繰り返していた。そして、いくつかのテレビ局がパレスチナの市民の様子もまた放映している。歓喜に沸く市民、というタイトルで、アメリカ国旗を燃やして騒ぎ立てる若者や、興奮して飛び跳ねながら、カメラに喜びをアピールする子供たちが画面に映し出される。ほんの五秒程度のシーンが、これもまた何度も何度も繰り返される。

「酷いわ、見てよ、この子達を！人が苦しんでるのを喜んでいるなんて、信じられない！なぜ、なぜこんな顔してられるの？」

スクランブルエッグを食べ終えて、今度はベッドの上に腰掛けてテレビを見始めたフィリスは、拳を握り締めてそう叫んだ。顔が悔しさに歪んでいる。

確かにパレスチナからのその映像は挑発的だった。一瞬やらせではないかと目を疑うほ

ど、人々はアメリカの惨事を全身全霊で喜んでいた。テロの映像には特に何の感情も抱かなかった自分も、パレスチナ市民の歓喜する様子には、多少ムツとした。

ニュース番組は延々と続く。キャスターが、「これはあのパールハーバー以来の大惨事だ!」と報道する。その度に、自分は居心地の悪さを感じた。

フィリスが私に氣遣つてか、

「これは、パールハーバーとは全然関係ないことなのよ。日本人とは関係ない。これはパレスチナ人の問題なのよ」

と、私のほうを見ないで言う。

厳戒体制が布かれ、外出禁止だと聞いた私は、延々と同じ画像を繰り返すテレビに一日中付き合う気がせず、頃合いを見計らって、自分の部屋へと戻った。ふと、日本でも騒ぎになっているのだろうかと思ひ、インターネットをつないだ。上の姉のケータイから短いメッセージが入っていた以外、テロに関するEメールは無かったが、Yahoo! Japanで、大々的に掲載されたテロ攻撃の写真と見出しを見たとき、どういふわけか自分は興奮し始めた。

アメリカ大陸の反対側とはいえ、自分は今、攻撃された国アメリカにいるのだという実感が湧いてきた。貿易センターに続き、ペンタゴンがやられたということは、もしかしたら、次はロスが攻撃の対象になるかもしれない。自分の部屋の小型テレビをつけ直して、テレビの音を小さくしてから、雑事を始めた。事件発生から時間が過ぎるにつれて、真相が徐々に浮かび上がってくる。それと同時に、テレビも、爆破シーン以外のこと、特に被害者にフォーカスを移し始めた。

顔を衣服で覆い、土煙の中を、どろどろの服のまま血を流しながら逃げ惑う人々や、警察官、消防隊員、その他、助け合う人々の様子がより多く画面に映り始めると、自分は被害の程を徐々に実感し始め、恐怖を感じた。ニューヨーク方面へ引越すといっていた何人かの友人のことが心配になる。まさかマンハッタンにいるはずはないと思いながらも、もしものがあつたらどうかとうろたえた。

結局、殆どテレビにかじりついたまま一日を過ごした私に、夕方遅く日本の母から電話が入った。かかってくるかもしれないとある程度は予想していたが、いくら母でも、私がニューヨークからは遥か離れたところにいることぐらいは理解しているはずだという思い

から、もう少し事態が落ち着いてからEメールでもしておけばいいだろう程度に考えていたため、連絡は入れていなかったのだ。

電話が鳴った瞬間、母かもしれないと思った私は、一瞬、母の大きさに心配する様子を想像して受話器をとった。そして、受話器をとって、あっけにとられた。母は異常に落ち着いていたからだ。冷静すぎるというか、冷めているというか、相変わらずボーっとしているだけなのか、母はこう言った。

「どうしてる？アメリカ攻撃されたねえ。まあ、ロスのあたりは別になんともないと思うけど。どう、騒ぎになってる？」

あまりに落ち着き払った口調に、私は驚き、逆にそのことが自分を興奮させた。さっきまで見ていた逃げ惑う人々の映像のせいもあるだろう。私は受話器を握りしめる。

「騒ぎになってるって？当たり前やん！大騒ぎになってるわ！何でそんなに冷静なの？アメリカが攻撃されたんやで、アメリカが！世界最強のアメリカやで。何でこんなことになったんやろ。信じられへんわ。日本でも騒ぎになってるやろ？ニュースとか見てないの？こっちは朝からこのニュースでもちきりや！フィリスが朝からテレビががんかけてる

し、ただ事じゃないと思っただわ」

「そら日本でも騒ぎにはなってるよ。私ら、ニュースステーション見とったから、昨日の夜知ったんや。アメリカやられたなあーって、お父さんとも言っとったんやあ」

「アメリカやられたなあーって、ボケーっとテレビの前に座り込んで言うもったん？ 二人揃って、娘アメリカにおるんやで！ 心配とかしないの？」

心配要らないという台詞をいうために受話器を取ったはずなのに、まるで今の自分は「心配して！」と頼んでいるかのようだ。

ここへきて母は、

「あつ、大丈夫？」

「いまさら大丈夫？ とか言われてももう遅いわ。……そりゃまあ、……うん、別に、……大丈夫やけど」

きまり悪く答える私に、母はこう続けた。

「まあ、最近のアメリカはちよつと強引過ぎたわ。イスラエルにあんなに肩入れしたら、そらパレスチナの人怒るわなあ。ブッシュ政権になってからむちゃくちゃやったでなあ。

危ないぞ、危ないぞって言うとならやっぱりなあ」

「えっ、そんなに危ないぞって言うとなん？」

私はこの時点では、中近東の諸国の間にある長年にわたる軋轢や、紛争についての知識が殆ど無かった。「パレスチナ人とイスラエル人の仲が悪くて、アメリカはイスラエルの味方で、イスラエルの復興の手助けをしました」みたいなことを、短大時代に会ったイスラエル人が話していたのを知っている程度だった。イスラエルの国旗の白と青が平和を意味していることや、苦境から国民が立ち直ろうとしていることなども熱弁していたが、その時はとりわけ気にも留めなかった。

母の口調には最後まで緊張感はなく、かたや電話のこちら側では「悪魔の手に落ちたかわいそうなアメリカ」に国中が騒然としている様子が、このときの自分には、妙に滑稽で、しかも皮肉に思えた。

翌日、翌々日、その後もずっと、テレビをつければテロのニュースを目にしない日は無かった。飛び交う情報、デマ、そして、テロ後の二次災害……。町中にアメリカ国旗が溢れかえり、「強い、正義の味方アメリカ」はリベンジに燃え始めた。

そんなある日、相変わらずテレビに釘付けになっていたフィリスに、私は子供が聞くような質問をした。

「どうしてテロは起こったの？」

「それは、オサマ・ビン・ラデンという大富豪が、あまりにもお金がありすぎて、退屈しのぎかなんかにテロやら戦争やらをやっていて、ニューヨークはその犠牲になったの」

「でも、どんなにそのオサマ何とかという人が莫大なギャラを払っても、わざわざ自分の身を滅ぼしてまでテロに参加するかなあ。誰だって死にたくないと思うけど」

「それは、あの人たちはイスラム教徒だから、テロをやって死ねば天国へ行けるって信じさせられているから、恐いものなしでやるわよ」

なるほど。確かに筋が通ってはいなくもないが、どうも日本から聞く情報とアメリカで聞くものとの間には、開きがあるようだ。この時点では、自分にはどの情報が正しいのかもよく分からないでいた。しかし、フィリスの説明こそがやはり、アメリカのメディアが最初に報じ、アメリカで多くの人に信じられていた一般説の筈であった。私は彼女の話を鵜呑みにもしなかったが、しかしそれと同時に、このテロが起きた本当の理由が、イスラム

教や大富豪の気まぐれではなくて、アメリカの中近東への長年にわたる不公平な干渉や、アメリカの経済制裁によって生じたアラブ諸国の貧困が原因の根底にあったことを、かなり後になるまで知らずにいたのだった。

事件当日は家にいなかったロシア人のルームメートも、帰ってくるとすぐ、フィリスと共にテレビにかじりついた。かなり興奮して、二人であだこうだ言い合いながらテレビを見ている。ふいに彼が、

「フィリス、俺たちも早くアメリカ国旗を買わなきゃ。でっかいのを買おう！そして家の前に飾らなくちゃだめだ。俺が買いに行つてこようか」

と、アメリカ国旗の重要性を説明し始めると、それに対してフィリスが、

「その通りだわ！」

といった具合に盛り上がり、数日後、家の入り口のゲートの横に、新しく買ってきたアメリカ国旗が飾られた。

隣の家は二つの国旗が門前に、その他小さな国旗も無数に車に貼り付けている。その隣

も、また隣も、国旗を飾らない家など先ず見当たらない。街を車で走ると、ろうそくと国旗を持つて雄たけびを上げている多数の少年少女や、巨大な国旗を担いでひたすらもくもくと炎天下の歩道を歩き続けている青年や中年を目にした。アメリカが何かに向かつて猛烈に突進し始めた気配が町中を覆っている。

テレビの中に映った、ニューヨーク市民、国旗や花束が飾られたテロ現場、その周りで抱き合って泣いている遺族を見る度に、国旗を買わずに過ごしている自分がどこか道徳の欠けている人間であるかのようにも思えた。そして、周りの人間は自分のことを非人道的で反米的な人間だとも思いかもしれないと、不安な気持ちにすらなる。普段はあまり親米的な発言をしたことのなかったロシア人のルームメイトが、アメリカ国旗を買おうと言いつ出したこと。そして私の顔を見るといつも彼が、「オサマ！ オサマ！」と冗談交じりに私のことを呼ぶという事実も、どこか引つかかった。

国旗一つで、自分の心は大いに揺れた。しかし結局は、被害者とその遺族に対して自分が抱いていた悲哀が、国旗一つで変化するとも思わなかった。国旗を買おうが買わないが、自分がニューヨークの受けた惨事を厳粛に受け止めた事実是不変である。ではどうして国

旗が必要なのか。

みんなが持っているから？ アメリカが一致団結するのを応援しているから？ 社会的風潮によりそれは適切なことだったから？ 持たないと変だから？ 自分の悲しみを表現する唯一の手段だったから？ アメリカのリベンジを支持しているから？ アラブ諸国が憎いから？ 持たないと被害者に対して失礼だから？ テロリストに対する怒りを示すため？ 事態を厳粛に受け止めたことを世間に知らすため？ アメリカ人であることを誇りに思うから？ 特に個人的な理由は無いけどなんとなく？

自分には最後までこれといった明確な理由が見つからず、相変わらず「オサマ！ オサマ！」とルームメイトに笑われながら、結局アメリカ国旗は買わずじまいだった。ただ、被害現場の映像や被害者の証言を目にした時だけ、私は何度かテレビの前に座ったまま、熱くなった目頭を押さえた。

人種、人権

「Now, I am a racist !」(私は人種差別者だ！)

事件後、フィリスが言った言葉である。

「私たちの国は、アラブ人種を徹底的に締め出すべきだ！この国にずっと以前から住んでいるアラブ人はアメリカ人だから当然差別されるべきじゃないけど、これからはもうアラブ諸国からは誰もアメリカに来るべきじゃない。こんなこと、本当は言いたくないけど、彼らが私たちに対してしたことを考えれば、差別されても仕方がないわよ。だから、私は今から人種差別者。アラブ人は危険。イスラム人はもう要らない！」

大学で芸術を教え、保守的、愛国的、または軍事的な考えを徹底的に嫌い、人種や文化の混ざり合いや新しい考え方を愛し、民主的で前衛的な流れを、長い人生を通じて支えてきたフィリスが、「悪魔のアラブ諸国」を大々的に謳うテレビをバックに言った言葉が、「

am a racist」だった。その言葉を発するフィリスの顔が苦渋に歪んでいる。

ユダヤ系アメリカ人として生きてきたフィリス本人が、その言葉の持つ意味の大きさを一番理解していたはずである。彼女は理性で物を言っていない。感情で物を言っている。そのことが、彼女の苦しそうな顔や、投げやりな言葉の端々に現れていた。これは彼女の本心ではない。

しかし、私は彼女の言葉に異常な危機感を覚えた。少数派人種のアジア人種で、少数派民族の日本人で、部外者の外人としてアメリカにいる自分は、この言葉に威圧感すら感じていた。メディアが、「パールハーバー」という単語を繰り返した時には、居心地の悪さを感じながらも、はつきりとは分からなかった不快感の原因が、今、フィリスの言葉によって明確になる。

テロの二次災害……「犯罪者」ならぬ「犯罪人種」への偏見と差別と抑圧が始まった。

学校のカフェテリアの入り口に「PROUD TO AMERICAN」とプリントされたアメリカ国旗が貼り付けられ、映画館では戦争映画が4本ぐらい同時期に封切りになる。この頃の

アメリカには、リベンジ攻撃に賛成しない者や、アラブ人種はみんな敵であるという風潮があった。「個人」という単位がなくなり、国家や正義や多数派という「勢力」のみが社会の中でもものを言っている雰囲気がある。属する勢力がはっきりしない者は黙っているのが安全だった。

アラブ人種への圧力の高まりが報じ始められた頃、短大で知り合った日本人の友達から電話が入った。彼女はカリフォルニア大学のロサンゼルス校に通っていた。

「アキ、久しぶり。元気？学校のほうはどう？」

アーバインへ引越して以来の、久々の電話である。私は、学校の方は、良くも悪くもないと答えた。

「そっちの方こそどう？結構危ない地区に住んでるとか言ってたけど大丈夫？特にテロの後、ロスの方なんかは物々しい警備体制とかになってるんじゃない？」

「そうだねえ、まあ、警備とかもかなり強化されてるみたいだけど、それよりさあ、最近また近所のインド人が殺されてさあ、恐いわーと思って。最近はあるまりインド系の人とか見かけなくなっていたけど、それでもまた殺されたって聞いたから、相当危なくなっ

きたのかなんて思つて。アキもマジで氣をつけたほうがいいよ。一応うちら外人だし、アラブ人じゃないけど、マイノリティーだから。何かにつけて怪しまれたり、攻撃されたりするかわからないよ」

「そういえばうちの家の周りでもアラブ系の人はさっぱり見かけなくなつたわ。アーバインに來たすぐの頃はキャンパスの横のショッピング街で、アラブ系つて言うか、あの頭に布巻いてる人たち、あれつてイスラム教徒のしるし？ まあ、そんな人たちをしょつちゅう見かけて、アーバインはアラブ系が結構いるのかなーなんて思つてたら、テロ後は、さっぱり見かけなくなつた」

白人以外と、少しのラテン系以外殆ど目にするこの無かつた田舎の短大から、アーバインに出てきて、街で民族衣装を身にまとつたアラブ人を見かけるようになった私は、以前よりも、文化的に開けた街へやつてきた事實を單純に喜んでいた。民族衣装、民族系レストラン、異なる言語、そして人種。「違い」はいつも私の心をときめかせる。

アラブ語で店名の書かれたスーパーマーケットの横で、韓国のビビンバを食べ、その横にはインド人の経営するカレー屋があり、またその横に、寿司バーがあり、その裏通りがイタ

リア系で、そのむこうに巨大なステーキハウスが建ち、その奥にはタコス売るメキシカン系ファーストフード店、そしてその先の、大型中華マーケットは、中国語を話す人の活気で溢れかえっている。アメリカの最も魅力的なところといえば、たくさんの「文化的違い」を一度に体験できる点である。民族衣装も素敵だが、何よりも美味しいのが一番いい。

しかし、一度、国家間や民族間に問題が生じると、混ざり合う人々の間に激しい摩擦が起きるのも事実である。こういう場合、特に少数派は、社会の腹いせに使われる可能性が高い。社会の「悪者」を自分以外の民族に定義することでしか自分の立場の正当性を証明できない人間はこの社会にもいる。単一民族国家といわれている日本であっても、同じような現象は数多くある。

後に、大々的に掲載された北朝鮮拉致事件の見出しを、ロサンゼルスタイムズの表紙に見つけたときも、その瞬間に抱いた私のいやな予感的中した。在日朝鮮人への、無神経な嫌がらせ。社会の中に共存する無罪の少数派に、怒りの矛先を向ける偏見者や過激派は後を絶たない。

受話器の向こうで、警察や軍隊の数もずいぶん増えたと話す友人の声を聞きながら、私は、アラブ人がいなくなり妙に殺風景になった街を想像していた。そして、もし仮にテロリストがヨーロッパ人だったとしても、おそらく多数派の白人が街から忽然と姿を消すことも、白人の殺害のニュースを聞くことも先ずないであろうと思った。

「アーバインはロスほどはひどくないと思うけど、細心の注意を払った方がいい」という友達に、

「そうだね。とにかく、静かに嵐が過ぎるのを待った方がいいかもね。下手に何か発言して殺されても困るから。アラブ人みたいな格好もしない方が身のためかもよ。黒の頭巾は狙われるよ。アラブ人にとっては本当にいい迷惑だろうけど。でも、かわいそうだけど、こっちも身の安全がかかっている訳だし、とにかく黙っている以外手はないよ」

と言うと、言い終わった後でとても肩身の狭い思いがした。うんざりと受話器を置いて、さっき自分が軽々しくした「アラブ人みたいな格好や頭巾はやめた方がいい」という失言を思っ、さらに重い気持ちになった。自分は一体何を言っているのだろう。

大学の授業でも、トピックがそれとすぐ、テロの話や、その後の人種差別の話になった。特に、台湾人の先生が教えていたクラスは、マイノリティーの生徒が多く、しかも、先生自身もマイノリティーだったため、人種問題について少数派が率直な意見を言える機会が広がり、ディスカッションは盛り上がりを見せた。そんなある日、イタリア系とアイルランド系が混ざった、アメリカ人のクラスメートがこんなことを言った。

「この間、うちのお母さんが言ったことをちょっと聞いてよ。今、アラブ人や、イスラム系の人たちが、矢面に立たされて差別とか受けてるじゃない？ そうしたら、うちのお母さんったら、笑いながらこう言ったの。『どうして政府はもっとしっかりとアラブ人を捕獲して、隔離しないのかしら。ほら、第二次世界大戦中に日本人を入れておいた監獄がまだたくさん残っているだろうに、せっかくだから、あれを使えばいいのよ。アラブ人を入れておくにはちょうどいいじゃない』だって。信じられる？ お母さん、自分が何言ってるか分かっているの、って思わず聞き返した。ゾツとしたよ。しかも、それって笑いながら言うようなことなの？ 自分の母親ながら、あの発言には正直言って幻滅した」

クラスメート全員が、ガーンという顔をして、失望の眼差しを彼女に送った。彼女は、

呆れたような怒ったような顔のまま、数回目をしばたかせた。

第二次世界大戦中に日系アメリカ人が受けた差別が、対象人種を変えただけで、そのままそっくり繰り返される。日本のパールハーバー攻撃も、今回のテロ攻撃も、時と場所を変えただけで、その後の二次災害から政府の報復戦争に至るまでほぼ同じ経過をたどった。

国家間の戦いで圧力がかかるのは、スパイ容疑を掛けられ、裏切り者のレッテルを貼られながら敵国で暮らす人間たちであり、報復戦争で被害にあうのは、その国の弱き一般市民である。人は歴史から、何を学んできたのだろうか。何かを学んできたのだろうか。

パールハーバーに始まった太平洋戦争によって、戦前からアメリカに住んでいた日系人は大変な被害をこうむった。ナチスドイツやファシストイタリアからの移民に対してよりも、はるかに激しい差別と厳しい規制が、日系人に対してのみ集中した。

私が短大で履修した「民族と人種」のクラスの教科書の一部には、アメリカの日系人の歴史が簡単に記されていた。当然そのメイントピックは、第二次大戦中に起きた日系人強制収容キャンプのことであった。

「パールハーバー攻撃が行われ、アメリカが日本に開戦したことにより、アメリカに移住していた邦人と日系のアメリカ市民は〈危険な人種〉とみなされました。これにより、過去にもあった、日本民族への偏見や嫌がらせが社会の中で直ちに再燃しました。日系人は職を失い、全ての信用を失い、街では、〈ジャップ禁止〉と書かれた張り紙や看板があちらこちらに現れました。日系女性の中には、FBI職員と偽った男に暴行を受けた人もいました。十一万人の日系人（うち七万人がすでにアメリカで市民権を取得していた）に対し直ちに立ち退き命令が出され、「軍事的必要性」のために強制キャンプへ収容されました。キャンプ地移住の際には、〈手で持つていけるだけの所持品〉の持込のみが許され、その他、家、店、家具、などを含めた、かばんに入りきらない残りの所有物は、全て手放すことを強いられました。強制キャンプ（ほぼ監獄と同じ）は、人の住めないような荒野に設置され、その建物は馬小屋やバラックの小屋で、小さなそれぞれの部屋にすし詰めにした人々は、わらの布団で砂漠地帯の凍つく夜を過ごし、昼間は焼け付く太陽の下、肉体的労働に終始しました。アメリカで生まれ、アメリカ人として育ったにも拘らず、ただ自分の先祖が日本人で、外見が日本的というだけで差別をされた人の中には、その不公平を訴

えてストライキを起こした人もいましたが、そういう人は処刑されました。……」

教科書には、こんな感じのことを含めた日系人の歴史が、およそ四十ページに渡って記されていた。太平洋戦争中に、勢力間の戦いの中で抹殺された個々の人権の記録である。

クラスメートのお母さんの言った、「アラブ人を入れておくにはちょうどいい建物」とは、これらバラックの小屋のことだった。

新しい世代

街の中から、イスラム教徒らしき人たちが姿を消していた間、少数派や外国人もまた、自分たちの居場所や立場を心配した。日本は、テロ後すぐにアメリカ側につくことを宣言し、それ以来アメリカの武力行使を完全サポートし続けているため、在米日本人にしてみれば、敵人扱いされなくて済んだ。しかし、そのような事実によってしか身の安全を保障されないとしたら、これほど悲しいこともまたない。

留学生の友人の間では、一度帰国するとアメリカへは再入国できなくなるとか、これからはビザの取得がさらに難しくなるとかといった情報が乱れ飛んだ。ビザの心配は、私にとっても他人事ではない。

「テロの関係でビザが下りにくくなってるみたいで、これから先のが心配だ」という話を、アメリカ人の友達にすると、

「そんな！それはおかしいよ。だってアキはアラブ人じゃないじゃない」

と、友人は口をそろえて私をかばった。

じゃあ、仮に私がアラブ人だったとしたら、ビザが下りにくくなってもよいのだろうか？ どうせ言うなら「だってアキはテロリストじゃないじゃない」が適切なのではないかと心の中で何度か思った。しかし、必ずしも適切でないにせよ、友人が私のことを気遣って言ったその言葉に、自分は失望ではなくむしろ希望を感じた。

私をかばった友人達の真剣な眼差しの向こうには「外国人だから、少数派民族だからという理由で、私の立場が脅かされるのは間違っている」という意思がはつきりと見える。

フィリスの「In a racist」発言にしても、クラスメートの「お母さんに幻滅した」話にしても、いい話ではないが、ただ絶望的なばかりではない。フィリスは、「アメリカにすでに何年も住んでいるアラブ人や、特にアラブ系アメリカ人の人権は守られるべきである」という点を明確にした。在米邦人や日系アメリカ人が一まとめにしてキャンプに送られた時代よりは進歩している。アラブ人禁止のポスターも見かけなかった。勢力に守られた一部の過激派と、警戒心に神経を尖らせていた政府の警備機関以外では、アラブ系民族の人権を、真剣に危惧した人もまた、アメリカには数多くいたはずである。

クラスメートの発言の中にも「母親の無知と無神経」にいらだつ彼女の心境が表れていた。そして、彼女の母親の話を聞いて失望に沈んだ教室には、「日系人の受けた差別が繰り返されるべきではない」という理念が、当然のこととして存在していた。人々の意識が時代と共に変わりつつある。

テロ後半年以上が過ぎた、ある火曜日の昼前、授業の合間を縫って、キャンパスの横の郵便局へ行った。大きな封筒を抱えて長蛇の列に体をねじ込むと、私の二人前にはイスラム教のスカーフをした若い女性が立っていた。淡いピンクの地に、繊細な花の絵柄がついた、スタイリッシュなスカーフに見とれていたが、彼女が頭を動かすと同時に、私は慌てて視線を逸らし、手元の封筒に視線を落とした。頭の中に残るピンクの花柄のイメージと共に、かつてのルームメートの一人がしてくれた話を思い出した。

私と同世代の、在日朝鮮人の彼女はこう言っていた。

「私が日本で朝鮮学校に通っていた頃、友達と二人でチョゴリを着て電車に乗っていたら、近くに座っていた老夫婦が、私たちのチョゴリを見ながら、朝鮮人がどうだこうだって嫌

味を言い出して、でも私たちは視線を逸らしたままじっと黙ってたの。そうしたら今度は、周りに乗ってた若い人たちが、その老夫婦に対して『ちよっとそれは酷いんじゃないですか』って反論し始めて、それを聞いた友達が、その若い人たちの言葉と勇気に感動して泣き出して、つられて私もオーオー泣いてしまった」

彼女は笑いながら、オーオー泣いてしまった様子を再現すると、こう付け加えた。

「若い世代の方が、人権教育とかを受けた人が多いから、こういうことって世代と共によくなってきたんじゃないかな」

学習効果は軽視できない。歴史や文化について学習しなければならぬことはこの先たぐさんある。そして、学習の中では、歴史上の出来事や文化の違いを、覚えるのではなくて、正しく理解する努力が必要になってくる。

クラスメートの母親は、日系人の体験した歴史を、おそらく正しく学習しなかった。出来事を知ってはいいても、その歴史上の事実が何を意味するのかを正しく理解していなかったのだと思う。

封筒から目上げて、行列の先を見つめた。どうしてアメリカの郵便局はこんなにも遅いのだろう。自分の番まで最低でもあと二十分はかかりそうだ。重たいリュックサックが両肩に食い込んでいる。ピンクのスカーフがもう一度自分の目に移り、自分は急に不安になった。

自分は差別されたくないし、差別者にもなりたくない。フィリスやクラスメートやその他大多数の人間もまた Discriminate されたくないだろうし、Racist にはなりたくないと思っているに違いない。

勢力と勢力の摩擦の中で、自分はどこまで「個人」でいられるのだろうか。自分たちの普遍性が試されている気がした。

好戦・反戦・非戦

テロ後、あからさまに軍国化したアメリカは戦い続けた。

先ずは、アフガニスタンへの報復戦争。私は報復戦争が起こっていた頃、アメリカが戦争をしているという実感が殆ど湧かないまま、ケリーの実家でクリスマス休暇を過ごしていた。ケリーの家族と共に、メルヘンチックなクリスマス映画を観たり、ジンジャーマンクッキーを焼いたり、雪山へクリスマスツリーを切りに行ったり、のきな時間を過ごした。戦争について話が出たのは一度だけ。ニュースなど殆ど見ていなかった私たちが、偶然アフガン攻撃を伝えるニュースチャンネルを目にした時である。

「そういえば今、戦争してるんだよねえ。実感ないなあ」

と、私が言うと、ケリーは、

「うん全然ない。アフガン攻撃のこととか、実はあまり知らないんだけど、アキは知ってる？ 何が起こってるの？」

「そんなこと、私に聞いてどうするの。私も知らないよ」

みんなでボケーとテレビを見つめ、しばらくしてチャンネルを変えた。

報復戦争には、「やられた以上やりかえすのは当然」という開戦理由があった。テロリストの自業自得といえるにしても、やはり武力による解決は不適切であるような気もし、あまいな状態のまま、勢いで戦争が始まって、あつと思ったら終戦していたようなところがあった。

テロによって友人を失ったジニーも、プロジェクトの中でこう言っていた。

「報復戦争をサポートしていたというわけではないけれど、テロ直後で親友が行方不明になっていた時に、私は怒りの中で、政府が復讐するのを正当なことに感じた。政府は何をしているんだ！早くやり返して！と心の中で叫んだ」

話すジニーの態度の中に、テロ直後に、悲しくて、悔しくて、混乱して、我を見失っていたであろう彼女の様子が表れていた。

そこが、報復戦争のトリックでもあった。自分自身もそうであったように、テロリストへの「報復」という部分で意識があいまいになり、それが一般市民の命を奪う「戦争」で

あるという感覚が殆ど無かったのである。

しかし、「勢い」のうちに終わったアフガン攻撃が終わると、その後もなお武装解除の気配すら見せない政府に対して、アメリカの軍事傾倒への危機感が、周囲にもはつきりと現れ始めた。

第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争、そして湾岸戦争を、時代と共に生きてきたフィリスは、新聞のトップを飾り続ける「戦争、紛争、軍事」などの文字を見ながら、毎朝ため息をつき、テレビのニュースを見ては苛立っていた。軍事化への疑問と、募る不安と不満。アメリカのイラク攻撃が近付くと、自分の周囲ではさらに「反戦」の動きが活発化した。グローバルな時代を象徴してか、アメリカ国内外を問わず、インターネットを通じての活動も多かった。地球上のあちらこちらから回ってきたEメールの署名活動や、平和を訴える記事が、国籍の違う友人から自分のコンピュータへと届けられる。世界のあちらこちらで反戦デモが起こり、主要都市の多くが「NO WAR」の活気に溢れた。世界が「戦争」への反発を見せた。

大学での、生徒の反応や活動状況に関心を寄せていたフィリスに、グローバル化した反戦活動の話をすると、彼女は目を輝かせた。そして、いつも私にこう言った。

「私は、ベトナム戦争を必死になって反対した。反戦を訴えて、サンフランシスコ市内をカイザースタジアムまで歩いた。ロサンゼルスやサンフランシスコのデモにも行った。でももう、私は七十三歳。自分が今、声を張り上げるべき世代にあるのかは疑問だわね。アキ。分かるかしら？ あなたたちの時代なの」

キッチン椅子に腰掛けて、フィリスは半世紀年下の私の目をしっかりと見つめた。

二〇〇三年、イラク戦争開戦の一カ月前、私はオーディションのためにサンフランシスコを訪れていた。

日曜日の朝のオーディションが終わり、会場で偶然居合わせた役者達のアンと共に表りを歩き始めると、マーケットストリートにはプラカードや太鼓を持った人々があふれ出した。人の数がどんどんと増え続け、車道も歩道も人で埋め尽くされている。人の波を掻き分けて、通りの反対側のカフェまで辿り着くと、同じくサンフランシスコに来ていた役

者仲間の何人かの携帯にメッセージを残して店内に入った。

店内にも、プラカードを持ったまま、トイレの順番待ちをする人が列を成していた。私たちはパスタを食べ始め、そこへ、オーデিশョンを終えたロークが加わって三人になった。

「今日はこの後どうするの？ 私は午後のオーデিশョンに行こうかなって思ってるんだけど一緒に行く？」

アンが私に聞いた。

「歩きに行ってくる」

私はマーケットストリートを指差して言った。

「ロークはどうするの？」

「オレは、映画でも見に行こうかなって思ってたけど、どうせだからおれもアキに付き合
うよ」

「そっか。私も一緒に歩きたいけど、うーんどうしようかな……。でもやっぱり私はオー
デিশョンに行くよ」

私の分もしっかり反対してきてと言い残すと、アンは会場へと戻って行き、ロークと私は、

人の流れに入った。

群衆は熱気に満ち溢れ、それぞれが思い思いの格好をし、工夫を凝らした反戦メッセー
ジを、体につけたりプラカードに掲げて参加していた。こういう場でのアメリカ人のノリ
とユーモアは目を見張るものがある。反戦デモといっても、厳しい空気はなく、むしろパ
レードのように、参加者一人一人が個性を出して行進を楽しんでいるような雰囲気がある。
愛と平和を訴えたヒッピーたちが、かつて多く住んでいたサンフランシスコには、独特
の雰囲気があり、行列のあちこちでは、長髪でヒッピー独特の衣服を身に着けた若者たち
が、民族的なドラムや大きなプラスチックの容器を逆さにしたものを首から提げて、魂の
限りにそれらを叩き続けていた。子供を担いだ人、車椅子の人、ラップ調の歌を全身で歌
いながら進んでいく若者の群れ、政治を皮肉ったコメディーをやっている集団、改造自転
車などを持ち込んで殆ど大道芸人化した人もいた。ユーモラスに政府を皮肉ったメッセー
ジは実に個性的でかつ巧妙にできていて、見ていて飽きることはない。芸術の盛んな町で
あるためか、知覚的に見事にデザインされた政治家の似顔絵や人形もある。

アメリカのドル札を一見本物そっくりにプリントし、その中の文字や絵を微妙に変えた

ものを配っている人がいる。そのドル札は、「One Dollar」が「One Deception（一裏切り）」に変わり、真ん中の絵が、「ワシントン大統領」の肖像画から「ブッシュ大統領」のしかめっ面になり、トップの「The United States of America」の文字は「The United States of Aggression（侵略、攻撃合衆国）」とある。

街の柱には、お芝居の宣伝ポスターが貼られ、そこには『Tragedy of MacBush（マクブッシュの悲劇）』と書かれていた。シェークスピアの（殺人もの）の傑作が大統領の名に掛けてあった。当然、キャストの欄には、ホワイトハウスの主要人物が名を連ねている。私とロークは顔を見合わせて思わず微笑した。

シティーホールまでの道を三時間半近くかけて行進した。その間何度も、群衆の前方や後方から、「ウォーッ」という雄たけびが地鳴りと共に押し寄せてきて、その轟音の波の中で私たちは吼えた。誰かが叫び出すと、その熱気と大声が波紋のように広がる。私の横を行進していた車椅子に乗った老婆が、髪を振り乱して叫び始めた。

「France is with us（フランスは我々の味方だ！）」

「ウォーッ」

「Germany is with us (ドイツは我々の味方だー)」

「ウオーツ」

アメリカの武力行使に背を向けた国の名前が次々に挙がっていく。そこに日本の名前は
ない。

日本という国は彼女たちの味方ではなかった。しかし、日本でも大規模な反戦デモはた
くさん起こった。八〇パーセント近い人々が戦争には反対していると、日本でピースウオー
クに参加していた姉のEメールには書かれていた。私は心の中で思った。

「Japan isn't with you, but many Japanese people are with you! (日本という国はあなたたちの
味方じゃない、でもたくさんの日本人があなたたちの味方だ)。

私には、そのことがとても重要に思えた。

シティーホールまで来ると、その広場の前で人の流れが詰まり始め、いよいよ身動きを
とるのが困難になった。ホールの前には二台のクレーンからぶら下がった巨大スピーカー
があり、その下のステージらしき辺りのどこかで、誰かがスピーチしているはずだった。

しかし、人が多くて、ステージに近付くことができないため、話し手がどこにいるのかは全く見えない。広場の周囲では、ワゴン車を止めた若者や楽器を持ち込んだアフリカ系アメリカ人たちが、反戦替え歌を歌い、盛り上がりを見せている。屋台も多く出て、その周辺にも人だかりができています。

人垣に埋もれたまましばらくその場に突っ立っていたが、広場の周りをゆっくりと巡回している人の流れに体をねじ込むと、帰路に着いた。広場をいったん抜けると、人が急に少なくなつた。まばらに歩いている人と共に、裏通りをもと来た方向へ向かつて歩き始めた。

と、そこへ五人ぐらいの警察官がバイクに乗って走っていくのが見えた。

「何だろう？」と、ロークが興味深々の顔で私に聞く。

「さあ」

「何か起こってるんだよきつと。見に行こうよ」

「エー、私はもう疲れたよ。靴もぼろぼろになってしまったし、もういいよ」

と、人に踏みたくられて汚くなつた、オーディション用に新調した靴を眺めた。オーディションのために正装していたため、動きにくさから、予想以上に疲労がたまっているらしい。

「でも、せっかくここまで来たんだし、最後まで見届けないとダメだよ」と、彼は変な理由をつけている。

パトカーがまた六台ほど私たちの横を走り去り、今度は街のどこから、ものすごい雄たけびが聞こえ始めた。

そうになると、自分の野次馬根性が黙っていらなくなる。疲れたなどといった場合ではなくなった。ヘルメットをかぶって武装した警官が十人以上列を成して、私たちの横の歩道を封鎖し始めた。ロークと私は顔を見合わせると、先ほどパトカーが走っていった方向めがけて走りだした。雄たけび集団の音がどんどん大きくなる。彼らが近くにいる。パトカーを追って違う通りに出たところで、左方向から雄たけび集団が押し寄せてきた。百五十人ぐらいの若者の過激派集団である。ぼろい服を着て、旗を振りながら、

「We don't want The fucking war!」（クソ戦争はいらない！）

と叫んでいる。ドラムの音も半端ではない。勢いが違う。

私とロークは、その他の野次馬や報道関係者と共に、その集団と警察に挟まれるような状態で、どこに向かうとも分からないまま歩き始めた。警察もすぐに手出しはしない。へ

ルメット警官たちが微妙に通路をブロックし、行き止まりになると、集団は方角を変え、サンフランシスコの碁盤の目状になった通りをジグザグに練り歩いた。

「この集団どこへ行くのかなあ？」

ロークに聞いても、分からないと答える。そのまま、集団に押されるようにして通りを下ると、その先にさらに台数を増やしたパトカー集団が道をふさいでいる。

それを見たロークが、

「あつ、分かった。ユニオンスクエアだ。この集団はユニオンスクエアを目指してるんだよ。それを警官隊が阻止しようとしてるんだよ」

ロークの予想どおり、集団はユニオンスクエアを目指した。警察にブロックされた通りを避けながら、それでもユニオンスクエアへの方角を変えることはなかった。

ついにあと一ブロックでユニオンスクエアというところまで来ると、最後の通路には馬に乗った十数人のヘルメット警官が現れた。警官と野次馬の群れによって全ての進行方向をふさがれ、ついに集団は行き場を失った。私とロークは建物の隅に体を寄せる。

集団の先頭にいたスピーカーを持った何人かの若者が、後ろから突き進んでくる集団に、

「止まれ」の合図を出している。が、なかなか勢いがとまらない。後から来た人たちの波に押しつぶされるようにして、その通りの一角に塊を形成すると、一瞬太鼓と騒音が止み、次の瞬間「ウォー」という雄たけびと共に、群れの先頭が騎馬隊に向かって突進を始めた。暴れる馬。焦る警官。突然出始めた火花とけむり。馬にまたがった警官達が、ぶつかってくる青年たちに棍棒を振り下ろした。

目の前で、青年が頭から血を流している。警察に両脇を抱えられて、護送車へと連れて行かれる。

無言のまま、ロークと私のデモ行進は終わりを告げた。

世界中が反対しても、最後は戦争になるだろう。という大方の予想が当たり、三月、アメリカは開戦した。私は特に戦争には注目もせず、テレビも殆ど見なかった。何か変化を感じたことといえば、急騰したガソリンの値段と、時折つけるテレビやラジオが伝える「アメリカ国民の戦争支持率七〇パーセント以上」のニュースぐらいだった。

学校や、その他自分の周りの人間が一〇〇パーセント戦争不支持であったのに、一体どこにそんなにたくさんの方々がいるのだろうかと思議に思つた。しかし、戦地へ送られた兵士やその家族の事を思うと、自分が「戦争不支持」のろしを上げるのもまた不適切な気がしてくる。私は、結局何もしなかった。

アメリカとその同盟国の圧倒的な軍事力により、戦争はあつという間に終わった。何のための戦争だったのかもあいまいになり、下がり始めたガソリンの値段と正比例して、イラク戦争は人々の意識の中から消え始めた。

四月。戦争が終わつておよそ一カ月ほどが過ぎた頃、戦争があつたことなどもうすっかり忘れていた私は、友人を訪ねてサンノゼにいた。アメリカに来て以来、いつも心の支えでいてくれた、日本人の友人夫妻に会うためである。久しぶりに実家にも帰つたような気分できつろいだ後、私とヨークは買い物に出た。近くのショッピングモールでサングラスを買うためである。

サングラスやさんで、ヨークがお目当てのサングラスを手に入れた後、私たちにしては

珍しく、物見遊山をせずにすぐ帰路についた。サングラスは、なかなかよく彼女に似合っている。

「結構似合ってるじゃん。いいの見つかってよかったねえ」などと車の中ではしゃぎながら、交差点まで来た時、その右手の角に、アメリカの小旗を持った女性が立っていた（アメリカ国旗は、この場合、好戦または、アメリカ軍のサーポーターを意味する）。

中年の女性は、トレーナーにジーンズの素朴ないでたちで、どこか遠くを見つめながら、強いサンノゼの日差しの下、一人でぼつんと立っていた。「そういえばつい最近まで戦争やってたんだよなあ」と心の中で思いつつ、その女性をぼんやり見つめていると、運転席にいたヨーコが、ポツリとつぶやいた。

「あの人の息子さん、まだ戦地から帰ってきてないのかなあ」

そのまま車は右へ折れて、大通りに出た。フロントガラスからは、春の青空が広がり、まぶしいくらいに日の光が私たちを照らす。サングラスを買ったヨーコは大正解だ。

戦争が始まる前、私は反戦の立場をとっていた。そして戦争が始まった後、当然好戦で

はなかったが、反戦でもまたなくなつた。私は非戦である。街角で、一人小旗を片手に立っていた女性の印象が、心の中から消えない。戦争を支持も不支持もできない。

戦争になることが分かっているながら、最後まで意地を張り通したフセイン政権。結局戦争に行つた、ブッシュアメリカ。そして、国益最優先につき、アメリカの戦争に投資せざるを得ない日本政府。

ジニーは、Eメールの中で、こう言っていた。

「イラク戦争に関する一連の動きは、もう滑稽としか言いようがないよ。単なるいちごっこだね。戦争が起らないことを願つてはいたけど、でも、これが起こってしまうのがアメリカのビックリするところ。いったん国家のリーダーを選んだら、私たちはその人の意思に従うはずになつてゐるんだもんね。つてことは、やっぱり私たちは、大統領選挙のときに、この戦争にもまた一票を投じてしまつていたのだろうか？」

反戦か好戦か、そんなことが騒ぎになる前に、誰一人として戦争のことなど考えずに済む方法はないのだろうか。いちごっこが始まつてしまつた原因を、よく考えたいと思う。どうすれば、私たちは永久不滅の非戦状態を手に入れることが出来るのだろうか。

中性化する私たち

あるリハーサルの中で、私たちは、クリフの持ってきたテロと平和を謳った長い長い詩を朗読していた。

立ったまま輪になって、ひとり一パラグラフずつ読みまわしていく。淡々と進む朗読の中で、ジニーの順番が回ってくると、彼女の声が徐々に震え出した。見る見る間に彼女の目には涙が溢れ、順番が変わっても、彼女の取り乱した様子は変わらない。それでもなお続く朗読。耐えられなくなって輪を抜け出したジニーの姿が、ホールの奥のトイレの中へと消えていった。

事件発生当初、私にとって破壊情報と被害統計としての意味合いが強かったテロが、今、ジニーの存在によって〈悲劇〉となる。

ジニーは、実の兄弟のようにして共に育った幼馴染の親友を、テロによって失った。

その幼馴染の親友は、身ごもった妻（もう一人のジニーの親友）を残して、貿易センター

の瓦礫の中へと消えたまま、二度と戻ってはこなかった。

テロ発生当時からの心境をジニーはこう語った。

世界貿易センターが崩壊し、親友が消息不明になった時、ジニーは次なるテロリストの攻撃を恐れた。政府が自分たちを守ってくれることを祈り、テロに責任のある国が分かり次第、すぐにその根源を撃破して、更なる脅威を政府が断ってくれることを願った。

自分の故郷、愛するニューヨークが破壊され、友人を失ったことを悟った時、ジニーには猛烈な怒りがあった。早くアフガニスタンへ行つてオサマ・ビン・ラデンを見つけ出してほしい。報復行為によってこの惨状を解決できるなら、そうすべきだと思った。そして、無実のニューヨーク市民を大量殺害してなお、歓喜に沸くパレスチナ市民に対して、憎悪を感じると共に、深く傷ついたという。しかし、それと同時に、ジニーは彼女自身もまた彼らの置かれた状況を理解していないことを知っていた。彼らの私たちに對する憎しみは一体どこから来たのだろうか。私たちの国は彼らに一体何をしてきたのだろうか。

ジニーは言う。「その時の自分には、原因は分からなかった」

アフガン攻撃が始まった後、過剰な報復行為には心配した。オサマ・ビン・ラデンを逮捕してほしい気持ちは変わらなかったが、戦争によって傷つくアフガンの一般市民のことを心配した。もっと上手くやる方法はなかったのか。戦争以外にほかの道は無かったのかと思う。テロから時間がたち、少しずつ事態を冷静に受け止め始めた今、軍事力の強化は被害者の家族や友人の心を癒す何の役にも立たないと思っている。街の復興のための費用が、軍事力強化の費用に費やされてはいまいかと思う。そして、更なる武装は、他国の人々の、アメリカに対する憎しみをさらに増長させているだけではないかと危惧する。

時間と共に、ジニーの気持ちは揺れた。恐怖、悲しみ、憎悪、怒り、疑問、そして混乱。プロジェクトの中で、私もまた彼女と同じような気持ちの変化や混乱を何度となく経験した。涙をこらえながら当時を振り返る彼女の前で、「あーでもねえ、つらくても報復行為はダメよ」などと誰が言えるだろう。「ニューヨークも大変かもしれないけど、パレスチナ人の苦しみもちよつとは考えれば？」などと言える筈がない。

私は報復行為には不賛成ではなかったのか。自分が賛成なのか不賛成なのかよく分から

なくなった。深く傷ついたジニーによって私は混乱した。

自分にとってどこか威圧的だったアメリカ国旗のことを話すと、ジニーはこう言った。

「テロ直後、私にとって、アメリカ国旗は統一のシンボルだった。国旗は私に『あなたの苦しみはみんなが理解している。あなたは一人じゃない。共に、この苦境を乗り越えていこう』と言っていた。私にとって国旗は、復讐や、アフガニスタンへの対抗や外国人排除のシンボルでは決してなかった。愛国的な意味合いもほとんど無かった」

私は、ジニーのことを思ったとき、国旗を持たなかった自分の立場をかなり苦しく感じ、やはりまた混乱した。

私たちのプロジェクトは、こんな混乱の連続だった。メンバーの存在、多様な見解によって、自分の筋がどんどん通せなくなっていく、息苦しくなり、混乱し、ついには言葉を失う。物事の多面性が、私たちの立場をどんどん中性化した。

混乱し続けたプロジェクトの間に、何度か思い出した言葉があった。私が留学する前、ほぼ一切留学に関して話をしなかった母が、ある日突然言った言葉である。

渡米前、私の両親は、私の留学に関して徹底的に無関心を貫いた。

高校時代に、

「高校を出たら、アメリカに行くことにしたから」

と父に報告したとき、

「ああそう。じゃあ行けば？でも、行きたいのなら、自分で勝手に行けよ」

とサラっと言われて以来、家の中で、留学の話が出たためしなどまずなかった。それが、ある日突然、食卓の横にボケーっと突っ立って、宙を見つめたままの母が、妙に納得した顔でこう言った。

「あんたがアメリカ行くなって気持ち分からんでもないわ。うん。案外ええ考えかもなあ。あんたがアメリカ行つて、いろんな人種やいろんな国の人に一杯出会って、世界中に友達ができたら、きつとあんたは、その友達の母国の平和も本当に願うようになるんと違うやろか。自分の国と友達の国が戦争とかせんことを本当に願うようになるんと違うやろか。

そしたらええんかあ。日本にも、もっと一杯留学生が来たらええんやわ。世界の人と友達になったらええんやわ、きつと」

あまりに唐突で、それまで、留学がいいとも悪いとも、アメリカへ行けとも行くなとも言われたことのなかった私は、完全に面食らって、

「は？ いきなり何？ 何言つとるの？ おかん、頭大丈夫？」

と、その時は母の言った言葉の意味を全く考えなかったのだった。

たまに、母はまともなことを言う。

高校を出て、アメリカへ渡ってから、私は、実に多種多様な人種、民族、宗教、そして国籍の人に出会った。私と共に、一つ屋根の下で寝食を共に暮らした人たちの国籍や民族的背景は、今までのところで十四カ国に及ぶ。アメリカ人をはじめ、中国人、台湾人、イギリス人、ロシア人、アイルランド人、インド人、フィリピン人、ミクロネシア人、ユーゴスラビア人、パナマ人、メキシコ人、北朝鮮人（在日朝鮮人）、そして日本人。

さらに、クラスメートとして仲良くなった友人や、さまざまなプロジェクトや近所付き合

いを通じて親しくなった人たちの国を入れると、さらにここへ二十カ国が加わる。韓国、カナダ、コロンビア、ブラジル、アルゼンチン、キューバ、スウェーデン、ルーマニア、ウクライナ、オランダ、デンマーク、ドイツ、チェコ、エジプト、サモア、インドネシア、ベルギー、フランス、マレーシア、ベトナムなどで、その他、そんなに親しくはならなかったが、何回かおしゃべりをしたことがある程度の人も入れると、イタリア、スペイン、トルコ、ヨルダン、クロアチア、ブルガリア、ポーランド、スイス、イスラエル、ベネズエラ、グアテマラ、ラオス、エチオピア、南アフリカ、ケニア、マダガスカル、サウジアラビア、アルメニアなど。その他にもはつきりとは思いつけないが、さまざまな国から来た人に出会った。そして、私には、会ったことのない国の人が世界中にまだまだたくさんいる。

私は、日本とアメリカが戦いになると、非常に困る。日本が自分の母国だからではない。理由はとても単純だ。日本には、いびき合唱隊の私の両親や家族がいる。幼馴染や、共に笑って過ごした、たくさんの友人がいる。私は、その大切な人たちを失いたくない。だから日本が戦いに巻き込まれないことを祈っている。さらに、私自身もアメリカで死にたくない

し、社会から敵国人として迫害されたくない。そして、アメリカで出会った友人や、家族のように共に過ごした人たちが苦しむ姿も見たくはない。だから、アメリカが戦わないこともまた願っている。そして、その他多くの国にいる私の友達や、友達が母国へ残してきたであろう彼らの家族や友人のことを、私は考えている。日本や、アメリカや、その他の地球上の国々がけんかをしないことを、友人たちと共に私は願っているだろう。

プロジェクト発表

最終発表をどうするか。私たちは悩んだ。

今までにやってきた創作活動や、カバーしてきたトピックがあまりにも多くて、どうやってそれらをまとめていくのが問題になった。一つの劇みたいなものを作るのか、いくらかピックアップした事柄を発表するのか。中には、自分たちの経験を一つの本にでもして読んでもらうという案もあった。

そして、私たちが出した最終結論は、「今までやってきた通りの、ありのままの自分たちの経験を、観客とシェアすること」に決まった。これは、発表ではない。私たちはシェアをする。つまり、観に来てくれた人たちと共に、自分たちの経験を「分かち合うこと」に決めた。

最後の二週間を切ってから、慌しく、今までやってきた作文や創作ダンスや歌をつなぎ合わせ、紙に書かれた順番を頭に叩き込んでリハーサルを繰り返した。ホールの中に半弧

状に並んだ椅子に観客が座り、その半分の弧を自分たちが埋めることで、観客と自分たちによる大きな一つの円を作り、その中で、作文を読んだり、即興創作ダンスをやることにした。もちろん、順番の最後にはいつも通りの俳句サークルが組み込まれ、今まで通り自由にする。そして、余興へと入る。余興には、私たちが、初回から、リハーサルの間わりに欠かさずにやってきた黙想を加えた。本番では、輪の半分を担っている観客も一緒に、みんなで静かに黙想する。私たちは、今まで通り、和気あいあいとやればいいだけだ。

本番前最後のリハーサルの後、クリフが、極小の字で何かが書かれたちっちゃい紙切れを私たちに配って、少しニヤけた顔を必死で真剣にさせながら、ヒソヒソ声で言った。

「これ、極小カンニングペーパー。これをポケットに忍ばせておいて、もし順番が分からなくなったら、こっそりとこの紙切れをとりだして順番を確認してね。別に悪いことしてるわけじゃないんだよ。ピンチになったら、カンニングペーパーで、速やかに対処しましょうね」

紙切れを見つめて私たちは笑った。それでもまだ、笑いを必死でこらえようとしている

クリフがおかしくて、またケラケラ笑った。こんなちっちゃい字、どうやってコピーしたんだよお、クリフ！ピンチになっても、これじゃ字が細かすぎて読めないよお。みんなの顔に安堵が戻る。紙切れをズボンのポケットに詰め込んでポンポンとたたくと、さらにみんなで大爆笑した。

蟬の声、虫の動き、太陽で焼けた地面と土埃、そして、低空飛行した戦闘機が鈍い唸り声と共に近づいてくる。

観客席の後ろのドアが静かに閉められた時、私たちは、ホール内の空間の中で、八月のある暑い一日を、思い思いに生き、それを表現していた。ある者は茶をたて、またある者は折り鶴を折っている。そして、それぞれのインスピレーションから放たれる「八月の音」が、空気中で混ざり合っては消えてゆく。一筋の戦闘機の音に、もう一人、もう一人と声が重なり、太く重みを増したエンジンの音が私たちに迫り来る。小さな鐘が音をたて、その瞬間に私たちの体は床の上へと崩れ落ちた。

吐息一つ聞こえない静けさの中、ゆっくりと起き上がってきたジョン、クリス、ジニーによる創作ダンスが始まった時、私は床の上に碎けた一体の死体のまま、プロジェクトの幕開けを知った。彼らの動作にホールが波打つ。掛け声や手拍子が高い天井へと上つてゆく。激しい足踏みが古い木目を伝ってくる。床にぴったりと押し当てた左頬にその振動を感じながら、私はひっそりと息をした。

創作ダンス、次は歴史説明、そして作文朗読、歌、創作ダンス、詩……。

観客たちを自分たちの輪の中に引き込みながら、私たちは一つの瞬間から次の瞬間へと、大切に大切に今の自分たちを生きた。歌、息抜きジョーク、詩、ダンス、太鼓、掛け声、……。自分たちが十週間をかけて作り上げてきたひとつひとつの作品の中に、今日は観客の想いが混ざる。ため息が混ざる。笑い声が混ざる。

プロジェクトの流れの中で、私は、ある被爆者が書いた体験談を三部に分けて朗読した。ダンスやら歌やらと、プロジェクト自体があまりにもばらばらな作品の連なりであったため、クリフが、全体的な「つながり」として、「Voice from Hiroshima and Nagasaki」の中

に書かれた一つの実話を、プロジェクトの序盤、中盤、終盤に組み込んだのである。その話は、自分をプロジェクトへと導いた、かつて長崎で聴いた被爆談と殆どおなじシチュエーションの話だった。

私は、観客席の方へ歩み寄ると、「妹と共に防空壕へ非難していた作者が、母親と姉を探して、焼けた家の周りの灰を掘り続けた」という被爆談を読み始めた。観客席の前を、左右に端から端まで行ったり来たりしながら、耳を傾ける人々の、澄んだ深い眼差しを全身に感じながら読んだ。ゆっくりと、一人一人の目を見ながら読み進む。ぴくりとも動かない茶色い眼。青い眼。黒い眼。緑の眼。一つ一つの優しくて力強い眼差しが私を支えていた。

「私たちは、掘って、掘って、掘り続けました。そして、ついに私たちは何かにぶつかりました。何だろう？ なお掘り続け、全体が掘り起こされると、思った通り、それは一体の死体でした。母か。姉か。それとも赤の他人か。私たちはうつ伏せになっていた焼けた体を裏返しました。すると、なんと不思議なことか、顔だけは焼けずに残っていました。それは私の姉でした。私がずっと探し続けていた、逢いたくて逢いたくて仕方のなかった姉

でした」

自分の胸が詰まっていくなを感じ、紙からも観客からも眼を離した私は、視点の合わない眼を前方へ向けたまま、

「私は姉に微笑みかけました。そして泣きました」

と言いつ終えると、すぐに観客に背を向けて、他のメンバーの座っている自分のポジションへと戻り正座した。気持ちを落ち着かせながら、私は背後にいる観客たちのことを想像した。そして、最後の一行を読んでいる間、霞んで、ぼやけて、まともに見ることが出来なかった、色とりどりの眼を思い浮かべた。

栄光、誇り、惨事……、ジェフの指示のもと、自分たちの思いをぶつけてきた作文が、歌や踊りの間に、一つ、また一つと読まれていく。リハーサルで何度も聴いたはずの作文が、今日もまた私たちの心に響く。

本番中で読まれた数多くの作文の中で、私の心に残った二つの作品がある。

スツと立ち上がり、輪の中心へ歩み出ると、ジニーは真つ直ぐに観客席を見据え読み始めた。

“Certainly if they had the bomb they would have done the same thing.”

“We wanted the war to end at all costs and since Japan was our enemy, we all felt justified.”

“Uncle Rich spent four years in the thick of it and felt very bitter towards the Japs; their cruelty to our prisoners of war, their slaughter of our servicemen at Pearl Harbor when no war had been declared - but about Nagasaki he felt the same way I did when he saw the terrible burns on the children:

‘Oh my God, what a tragedy.’”

“Nagasaki was just unfortunate.
The Japs stalled on declaring peace.”

Peace.

These are my grandparents' memories.

They are not wrong.

They are not immoral or hateful.

Nor did they ever impart upon me any hatred of the Japanese people.

They wish for peace for their family.

When a group of people robs you of your youth, kills your friends and takes away your sense of security, it is very hard to understand, forgive, wish for peace.

I know this now.

Six months ago I did not know it.

Six months ago my country had not been attacked in my lifetime.

Six months ago my favorite city, my home town, was intact.

Six months ago one of my best friends was a whole lot more than missing, unidentifiable dust.

How can you hope for peace when all you can do is shake your fists in anger?

I don't wish for death.

I don't wish for any more bombs to be dropped.

But can I let them be dropped on me, on my friends, while I stand with my eyes closed to the violence in this world?

How much peace can I have?

How much peace can my grandparents have?

"I started at Fort Dix, NJ, and was transferred to a hellish place at Camp Wheeler in Monterey, Georgia and then I was put on a troop train to Fort Ord near Monterey, CA (God's country) ready to be shipped out.

I stayed a few weeks and learned all about the heavy morning fog.

There is nothing more beautiful than the sight of the lifting of the fog and the rays of the sun, and all the small fishing boats going out with the tide.”

“Non c’è niente di più bello della vista della nebbia che si alza e i raggi del sole, e tutte le piccole barche dei pescatori che prendono il mare con la marea.”

〈〈訳文〉〉

「もし彼らが原爆を持っていたら、彼らだつてきつと同じことをやっただけに決まってる。俺たちはただ、何としてでも戦争を終わらせたかった。日本が敵である以上、俺たちはみな、それは正当化されると思ったよ。

叔父のリッチはその戦争で四年間戦い、捕虜に対する彼らの残酷さときたらならない

て、ジャップを憎んださ。しかも宣戦布告がないまま、パールハーバーのアメリカ兵たちは大量殺戮されたんだ。でも長崎に関しては違う。彼は子供たちの惨い火傷を見て、俺と全く同じ気持ちだったんだ。『なんてことだ。何という悲劇なんだ』って。

長崎はただ不運だった。ジャップたちはぐずぐずして平和宣言しなかった」

「平和

これらは私の祖父母の記憶である。彼らは間違っているわけではない。彼らは不道徳でも、憎しみに満ちた人間でもない。そして、彼らは、日本の人に対する憎しみをこれっぽっちも私の中に植えつけなかった。彼らはただ、家族のために平和を願っているだけなのだ。戦争によつて若き日々が奪われ、友が殺され、恐怖に陥れた時に、冷静に理解し、許し、そして平和を願うということはとても難しい。今、私にはそのことがよく分かる。

六カ月前まで、私は知らなかった。六カ月前まで、自分の国は、私の知る限り攻撃されたことなど無かった。六カ月前まで、私の愛する町、故郷は無傷だった。六カ月

前まで、見分けられない瓦礫やちりの中へ消えるまで、私の親友は生きていた。ただ怒りに拳を震わすことしかできない時に、どうやって平和を望むことができるだろう。私は誰の死も望まない。私はもうこれ以上の爆弾投下を望まない。しかし、世界中の暴力から目をそむける一方で、自分や友の上に落ちてくる爆弾に黙っていることなどできるだろうか。私には一体どれだけの平和と平穏があるのだろうか。私の祖父母には一体どれだけの平和と平穏があるのだろうか」

「俺はフォート・ディックスからジョージア州モントレーの、キャンプ・ウィーラーという、地獄みたいなところに送られた。それから、兵員輸送列車に詰められてカリフォルニア州モントレー近くの、フォート・オードって所に送られて、そこで戦地へ出されるのを待っていたんだ。俺はそこに数週間滞在して、あの濃い朝霧の全てを知った。あんなに美しい光景は見たことなかったな。霧が晴れて、何本もの光の筋が差し込んでくる。潮の流れにのって小さな船がみな出かけていくんだ」

そして、もう一つ、私の大好きな作文が読まれるときがきた。常に前向きな姿勢を失わないモニカの朗読。

みんなの前へさっそうと登場すると、モニカは鼻高々に読み始めた。

「スウェーデンは、過去三百年間、いかなる戦争や国際紛争にも参加していない国です！」
おおー。なんてすばらしいことだろう。自信満々のモニカがうらやましい。

「ところが、冷戦が最も緊迫した当時、一九八一年の十月二十七日に、スウェーデンの南岸にあった島に、ロシアの巨大な潜水艦、U137が座礁した。核兵器を積んだ潜水艦です」

大げさなジェスチャーを交えながら意気揚々と朗読していたモニカが、勢いあまつて、どこを読んでいたのか見失い、一瞬話が止まった後、観客の方を見て聞いた。

「あのー、もう一回最初からやしなおしてもいい？」

観客からドツと笑いが出て、照れ笑いのモニカは、堂々と仕切り直しすると、さっきまでよりもさらにモニカ節を炸裂させた。

「……とまあ、潜水艦がやってきた！スウェーデンの軍隊は直ちに軍備を整え、第二次世界大戦以来、最も深刻な違反攻撃、と発表した。国際社会が動向を見守る中、スウェーデン側がソビエト艦隊に連絡を入れる！国民は固唾を呑んで見守った。そして、ロシア側から連絡が入る。が、何を思ったか、ロシア艦隊は、スウェーデンをポーランドと間違えて漂着したとのことだった！

両国間の話し合いの末、ロシア政府がスウェーデン政府に謝罪し、お互いの友好関係を失わないでいようという事で決着した。ロシア艦隊は『それじゃあね、さようなら』と帰って行き、この異常に和やかな結末に、人々は驚いた。スウェーデンは、国連の規定にある、〈人権と、平和と、非暴力〉に最大の敬意を払いました。最後は、スウェーデンとロシアの仲。両国が、たばことウォッカを分け合って、一杯クイツとやってめでたしめでたし！」

観客のくすくす笑いに混じって笑いながら、私は想像した。三百年後、日本人はどんな作文を読んでいるだろうか。モニカのような作文を読んでいたら素敵だと思う。世界中の人が、ウォッカや酒やビールやワインやテキーラやマルガリータを、一緒になって一

杯やつていられたとしたら、どんなに楽しくてすばらしいだろう。

最後の黙想を静かに終えた私たちを待っていたのは、割れんばかりの拍手だった。発表ではなくて、これはあくまでシエアリングだと思っていた私たちは、最後のお辞儀なども準備しておらず、どうしたらいいのか戸惑いながら、拍手と歓声の前でテレにテレまわった。みんな恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべながら、観客の前を、中腰になって、いそいそと床のごみ拾いをしたりしたのだった。しかも皆無言で。

かなり長い間鳴り止まなかった拍手がようやく止むと、観客が私たちの方へと押し寄せてきて、その場は一気に活気づいた。

称えあう群衆の中で、私は、性的暴行事件を綴った「惨事」の作文を、自分に代わって読んでくれたリリアンを探した。リリアンと目が合う、そして、ハグをする。そして、私たちを精神的な面ですっと支え続けてくれたデイドラとかつちりハグをする。

ジニーと、デボラと、そしてみんなと、私は何度もハグをした。

フレンジシツプ

プロジェクトが幕を閉じてから、三カ月ほどが過ぎた頃、私たちメンバーは、週末を利用して持ち寄りパーティーを二度行った。キャンパスの横にあるデイドラのコンドミニアムに、みんなで押しかけていっておしゃべりをするためである。大して時間も経っていないのに、しばらくぶりにあうメンバーに胸がわくわくした。みんなどうしていたのだろう。パーティーにはどんなものを持つてくるのだろうか。楽しみで仕方がない。

クリフの授業で一緒だったジニーに、席の背後から、「巻き寿司を持つてくる気なら、トロを巻いてくるように!」との指令が出ていたにも関わらず、私は超低予算の、卵とアボカドときゅうりとカニカマ（この日はロブスター風味のかまぼこを使用!）だけを巻いたものを、大量にタッパウエアに詰めて持つていった。他のみんなもさまざまな手料理や、買ってきた食べ物を持つてきている。たちまちテーブルは、世界の料理で一杯になった。

そして、庭ではもちろん、デイドラがホットドッグに入れるソーセージをアメリカン風

にバーベキューしている。理屈なしに美味しいパーティーを、「食えること大好き人間」の私は満喫した。

みんなとのたわいもない話が続いた後、クリフが、「長崎レインプロジェクト」が各々に何を意味したのか、その後の自分達にどんな影響を与えたのかといったようなことを尋ね始めた。

私にとって、このプロジェクトは〈フレンドシップ〉を意味したと思う。

歴史や国際紛争や政治や、いろんなことをやってきたが、プロジェクトを通じて自分が得たものは、結局はとても単純な「友達」であった。「利害」や「理論」を語るずっと前にある、お互いを「理解し、思いやる」というごく当たり前のこと、クリフはそれとなく私に伝えたのだと思った。

アメリカに来る前、私は、国際社会を、どこか遠くにある、巨大で得体の知れない難解なもののように錯覚してはいなかったか。国際平和を、自分には手も届かないようなレベルの、遠い世界の人たちがやっているだけのものだと勘違いをしてはいなかったかと思う。今、私の感じる国際社会は限りなく小さい。国際平和が、ほんの目の前に存在している気

がしてならない。

ディアナが作ってきた、メキシカンのチーズエンチョラーダを頬張りながら私は考えた。いつか、プロジェクトのメンバーに日本へも訪ねて来てほしい。その他にも、アメリカへ来て右も左も分からなかった私を、暖かく迎え入れ、励まし、支えてくれた多くの友人や恩人に、ぜひ日本へも来てほしい、そして、私は彼らを暖かく迎え、もてなしたいと思う。今度こそトロを巻いて、みんなを待っていたと思う。

春学期最後の日、あすから始まる夏休みを、サンフランシスコで過ごすことになっていた私は、慌てて仕上げた最後の課題を各担当教科の先生のメールボックスに放り込んだ後、再びディードラのコンドミニウムへと自転車走らせた。

パーティーの時、「長崎レインのことを基にして、本でも書いてみようかなあ」としゃべっていた私とクリフの会話を聞き逃さなかったディードラが、「どうせ書くなら、私が九月十一日以来ずっと集めてきた新聞や雑誌を参考にしたら？」と声を掛けてくれたため、今日はその資料を取りに行くのである。

広大なキャンパスには木が覆い茂り、六月の生温い風が吹いている。自転車で、キャンパス内の山を越え、森を抜け、ひたすらこぎ続けていると、やっとデイドラのコンドミニウムが見えてきた。

暑いのに空気が乾いているためか汗は出ない。植え込みの木々の葉と葉の間からは、まぶしい初夏の太陽が差し込んでいる。空気がきれいで気持ちがいい。ドアの前で自転車を止めて、「デイドラ、デイドラ！」と叫びながら表の網戸を押し開けると、キッチンで洗い物をしていたデイドラが飛び出してきた。私たちは微笑んでハグをする。

「どう、元気にしてた？」と、私が聞くと、

「実は風邪をひいてね、咳がまだ止まらないのよ」

「夏休みはどうするの？ いつ引っ越すの？」

と、案の定全然片付いていない部屋を見渡しながら私が言った。すると、彼女はニヤリと笑って、

「あれ、アキにまだ言ってなかったっけ？ 私がインドに行くって決めたこと」

「へ？」

確かこの前会った時は、テキサスに行くことに決めたと言っていたはずだ。それが、今日はインドに行くといっている。明日あたりアフリカのケニアにでも出没しそうな勢いである。彼女のやさしそうな目を見つめた。初めてあった時の威厳はもうどこにもない。どころなく、セサミストリートのビッグバードに似ているような気がしてきた。

「本当にインドに行くの？インドだったら、今度は私の姉に会うかもしれないね」

と、当時インドだかネパールだかへの放浪を決めていた、もう何年も会っていない中の姉を想った。姉のことだから、どこへ行っても、強く、速く、そして元気に生きているに違いない。

紙の束をクローゼットの中から引きずり出してくると、ディードラはそれらをテーブルの上へ並べた。かつてリチャード・ギアとシンディー・クロフォードが使っていたのを譲り受けたという、超ご自慢の白い大きなソファアヘ腰を下ろし、必要な資料だけを取り分けて、袋へ入れてくれた。それでもかなりの量だ。袋が破けそうなくらい重い。

袋を抱えたまま表へ出た私の後ろを付いて、

「大丈夫？後で車で家まで送り届けてあげようか？」と心配するディードラに、

「全然平気！」

と、嘘をついて強がると、片方のブレーキがぶっ壊れた自転車の前で、カッコつけながら微笑んで見せた。

新緑の間から吹いてくるそよ風がすがすがしい。空は限りなく青く、おいしい空気が私たちを包みこむ。向かい合い、私たちは大きく一つ深呼吸すると、最後にもう一度、ビッグハグをして別れた。

あとがき

この本は、私がアメリカの大学で参加した『長崎レイン』と呼ばれた創作活動を基に、戦争の歴史と自分の感じる国際社会についてストレートに書いた本です。日本、アメリカ両国での生活をじ、私は多くの人に出会い、そして実にさまざまな話を耳にしました。人それぞれの、経験、見解、そして信念の違いには日々驚かされます。『長崎レイン』は、そのメンバーの多様性からも、『異なる見解と向きあう』という意味で、まさにその象徴的な体験でした。

プロジェクトが折り返し地点を迎えたとき、私は、重々しい気分で、クリフにEメールするための「前半の総括」をタイプしていました。プロジェクト自体は、確かに楽しかったのですが、それと同時に、心の中にずつしりと重くのしかかるプレッシャーをずっと感じていました。戦争、社会問題、といった暗い題材をカバーしているとはいえ、ある程度ことは、メディアや学校をじて知っていたことではないか、なのはどうしてあんなにも

悩んだのか。

それはおそらく、私たちは、お互いが生身の人間の、仲間どうしであつたからだと思います。いくら論理的に理解できたことでも、やはり私たちは感情を持った普通の人間だつたということです。そして、メンバーたちの存在によって苦しんだ一方で、私たちを救つたものもやはり、互いの存在でした。

クリフへのEメールの中で、この楽しくて苦しいプロジェクトをやる意味について書いたのを覚えています。私たちは、過去の罪を擦り付け合つたり、事実を解明するためにやっているのではなくて、将来の互いの関係を少しでもよくするために、過去の話を聞きあつたり、現在の議論をしているのだと書きました。互いの民族や国家の関係を少しでもよくしていくための、小さな小さな、しかし確実な第一歩であつたと思います。

私の経験や価値観と、真剣にそして寛大な心で向き合ってくれたプロジェクトのメンバーに感謝します。そして、私にプロジェクトというチャンスを与えてくれたクリフに、
Thank you so much.

また、この本を出版するにあたり、多くの方々の御支援、御協力を賜りました。オーダー

メード出版の目標冊数達成のためにお力をお借りしました、井手祐二さん、原登紀子さん、水谷進さん、湯沢さん、ありがとうございます。それから、原稿を書き始めたときから、ずっとお世話になっている、中根ご夫妻に、改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。ございました。

最後に、出版に関して全くの素人であった私と辛抱強く向き合い、出版を実現させてくださった、かんぽうの桐生敏明部長と、編集の過程で大変お世話になった、あうん社の平野智照氏に感謝します。

二〇〇四年二月八日

安希

安 希 (Aki)

三重県立津高等学校卒

カリフォルニア大学アーバイン校卒

現在、舞台芸術の分野で活動中

Big Hug

—長崎レイン—

2004 年 3 月 20 日発行

著 者 —— 安希 (Aki)

発行者 —— 桐生敏明

発行所 —— 株式会社 **かんぼうサービス**

大阪市西区江戸堀 1 丁目 2 番 14 号 (〒 550-0002)

電話……(06)6443-7611 / FAX……(06)6445-2470

発売元 —— 株式会社 **かんぼう**

大阪市西区江戸堀 1 丁目 2 番 14 号 (〒 550-0002)

電話……(06)6443-2171 / FAX……(06)6443-2175

印刷 / 製本……株式会社 淀川工技社

©2004 Printed in Japan

ISBN4-900277-40-1

乱丁本・落丁本はお取替えいたします。 **Big Hug**